

第54回

日米学生会議

The 54th Japan-America Student Conference

日本側報告書

相互理解、「力」の獲得、そして前進

Mutual Understanding, Empowerment and Progress



1934~2002

現代の社会問題における日米の役割を問い直す

~ Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues ~

第54回日米学生会議 日本側報告書

—目次—

序章

➤ 日本側実行委員長の挨拶.....	2
➤ アメリカ側実行委員長の挨拶.....	3
➤ 内閣総理大臣からのメッセージ.....	4
➤ 大統領からのメッセージ.....	5

第1章 第54回日米学生会議の概要

➤ 第54回日米学生会議理念.....	7
➤ 第54回日米学生会議テーマ.....	8
➤ 第54回日米学生会議活動の概要.....	9
➤ 第54回日米学生会議参加者.....	11
➤ 本会議行程.....	13

第2章 事前活動および事後活動

➤ 春合宿.....	15
➤ 公開講演会.....	16
➤ 勉強会.....	21
➤ 防衛大学校訪問.....	25
➤ 報告会“第54回日米学生会議シンポジウム”.....	26

第3章 本会議—サイト活動

➤ ワシントンD.C.サイト.....	29
➤ オーバリンサイト.....	36
➤ パークレーサイト.....	42
➤ サンディエゴサイト.....	45

第4章 本会議—分科会

➔ 通商政策.....	56
➔ 政治システム.....	58
➔ 先端技術と倫理.....	60
➔ 社会的不平等.....	62
➔ 宗教とアイデンティティ.....	64
➔ 多文化社会における教育.....	66
➔ 創造的表現から探る歴史認識.....	68
➔ 環境問題.....	70

第5章 本会議—スペシャルピック

➔ 食と健康.....	73
➔ パフォーマンスアート.....	73
➔ アウトドアスポーツ.....	74
➔ 民俗工芸.....	74
➔ リズムと音楽.....	74
➔ 映画とアニメ.....	75
➔ テロリズム.....	75

第6章 会議を終えて

➔ 会議参加者の感想.....	77
-----------------	----

第7章 第55回日米学生会議

➔ 第55回日米学生会議の概要.....	106
----------------------	-----

第8章 第54回日米学生会議にご協力いただいた方々

➔ 協力者.....	111
➔ 賛助者・団体・企業.....	117

序章

日本側実行委員長の挨拶

アメリカ側実行委員長の挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ

アメリカ大統領からのメッセージ

日本側実行委員長の挨拶

第 54 回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長 千代明弘

今夏、米国で開催された第 54 回日米学生会議を振り返る上で、忘れることのできない記憶がひとつあります。それは、2001 年 9 月 11 日に米国で発生した同時多発テロです。テロ発生までは 21 世紀初の米国で開催される会議という位置付けを考えていた第 54 回会議ですが、あの悲劇によって、さらにテロ事件後初の米国で開催される会議という、もうひとつの重要な意味付けが加わることになりました。

日米双方 72 名の会議参加者はテロに対してそれぞれの想いを抱いていたと想います。そして、その想いを胸に第 54 回会議に臨んだこともまた事実でありましょう。会議を通じて参加者たちは、自ら設定した課題や問題意識に沿って議論を展開し、また、それらに対する何らかの回答を出そうと努力を続けました。その努力が結集したもの、それが第 54 回日米学生会議の核のひとつであったように思います。

私たちは第 54 回会議のテーマとして、“Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues” 「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」を掲げました。その中でも“Redefining” 「問い直す」という言葉が今回の会議ではクローズアップされました。日米の役割はもちろんのこと、社会に根強く存在する不平等の問題、戦争のこと、人間存在、そしてそのような私たちを取り巻くあらゆる現象を問い直し、何よりも自分自身の内に存在する可能性と限界を、参加者たちは会議を通じて問い直していったのではないのでしょうか。

本年度会議はその行程をすべて無事に終了しましたが、その成果を一言で表すのは非常に難しいことであると感じています。なぜならば、一ヵ月という本会議の期間はあくまで「問い直した時間」であり、本当の試行錯誤が始まるのはこれからであると考えているからです。会議期間中に行われた討論会や講演会、または米国各地での実地研修や 8 つ用意された分科会の中での討論などは自己を取り巻くさまざまな現代の社会問題の情報を得たに過ぎません。今後私たちが社会の諸問題に立ち向かって行くとき、それらの情報をどのように活かしていくべきか、そこに会議の本質があると思います。

「本会議だけでは終わらない会議」、それが日米学生会議です。会議を通じて得た仲間や知識、そして記憶を会議参加者は生涯に渡って持ち続けることになるでしょう。仲間は未来に向かって共に進む勇気を与えてくれます。知識は困難に立ち向かう際の武器となり、防具ともなります。そして、素晴らしい記憶は会議中の自己をいつのときも眼前に鮮明に映し出し、常に自らを省みるための指針となり得るでしょう。それらを活用することによって、人生はより一層豊かで深みを増したものと変化し、同時に日米学生会議への想いの強さも比例して高まっていくはずで、第 54 回日米学生会議とは、会議参加者の心の中で永遠に継続されていくものなのです。

最後になりましたが、第 54 回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団企業の皆様、準備段階の期間に学習面でご協力賜りました講師の皆様、日頃より貴重なご指導をいただきました国際教育振興会の皆様、さまざまな局面で多大なご支援いただきました日米学生会議 OB、OG の皆様、そしてその他すべての日米学生会議に関わっていただいた皆様に、参加者一同、心より御礼申し上げます。これからは、私たちが本年度会議を通じて得たものを社会に還元していく過程の中で、改めて皆様への感謝の意を表していきたいと考えています。本当にありがとうございました。

アメリカ側実行委員長挨拶

Jaime Muscar

American Executive Committee Chair

The 54th Japan-America Student Conference Executive Committee

The Japan-America Student Conference is a program unlike any other. Through my involvement as both a delegate of the 53rd JASC and a member of the Executive Committee of the 54th, I have had the opportunity to meet some amazing students who share a vision for promoting mutual understanding between Japan and the US. My life has been greatly enriched by my friendships with them, and I know this experience will continue to affect me for many years to come.

At the conclusion of the 53rd JASC, I felt that I had more to contribute to this unique conference. While the month had been satisfying in many ways, I wanted to continue to explore the role of JASC while sharing and promoting this experience to other students who might benefit from it. Thus after the Executive Committee elections at the close of the 53rd JASC, the sixteen new EC members began intense preparations for the 54th JASC. In working with the 15 other EC members, I learned much about myself and teamwork, and the difficulties of planning an event of this magnitude.

The 54th EC can only provide a framework for the conference, the heart of JASC is what the delegates make of it. Our delegates approached the conference with great enthusiasm and passion. There are two aspects of JASC that are sometimes considered distinct: the academic content and the social interactions. The delegates approached both with equal intensity, however. They constantly challenged themselves and the rest of us to approach issues in new ways and from perspectives different than our own.

There was much debate during the 54th JASC regarding the role of JASC today. For the month not only were we trying to redefine the role of Japan and the US in contemporary social issues, but redefining JASC in that context as well. The future of JASC is ultimately in the hands of the 55th EC and those that will succeed them, but I have the utmost confidence in their vision. From its conception in 1934, JASC has always adapted to the changes in the relationship between Japan and the US and their positions in the global community. In spite of the growing uncertainties in the world today, I know JASC will continue to be an invaluable source of fresh ideas, providing an opportunity for students to come together for a month of intense debate while allowing them to share their hopes and uncertainties, and ultimately realizing that we are not so different after all.

内閣総理大臣からのメッセージ

第 54 回日米学生会議の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。

1934 年に日米両国の学生有志によって始められた日米学生会議が、世紀を越えて今日まで引き続いていることを喜ばしく思います。日米両国は戦後半世紀あまりにわたり共通の価値観のもと、世界でも他に類を見ないほどの強固なパートナーシップを築き、世界平和の維持と発展に貢献して参りました。そのような歴史の中で過去の会議参加者が日米両国において大いに活躍されていることを見るにつけ、次世代を担う若者の交流の重要性を強く認識させられる次第であります。

第 54 回日米学生会議は「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」(Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues) を総合テーマに掲げています。21 世紀を担い築き上げていく学生の皆さんが今夏このテーマのもとで人権と安全保障、文化、環境、テロリズム等を巡って活発な議論を展開し、互いの価値観を共有されることは、必ずや皆さんの将来にとって有益なものとなり、そして何よりも日米関係のより一層の発展に大きなものとなることを期待します。

第 54 回日米学生会議が皆さんにとって人生の転換点となることを信じてやみません。

内閣総理大臣 小泉純一郎

大統領からのメッセージ

I send greetings to those attending the 54th Japan-America Student Conference.

The United States and Japan continue close coordination on issues vitally important to each, as well as to the world. Those who preach hate and prey upon ignorance threaten civilization on all continents, and the United States appreciates Japan's participation in the coalition against terrorism. To help ensure the defeat of global terrorism and related threats, we must continue our efforts to build a world at peace and with opportunity for all. Knowledge and learning remain crucial to the success of these endeavors.

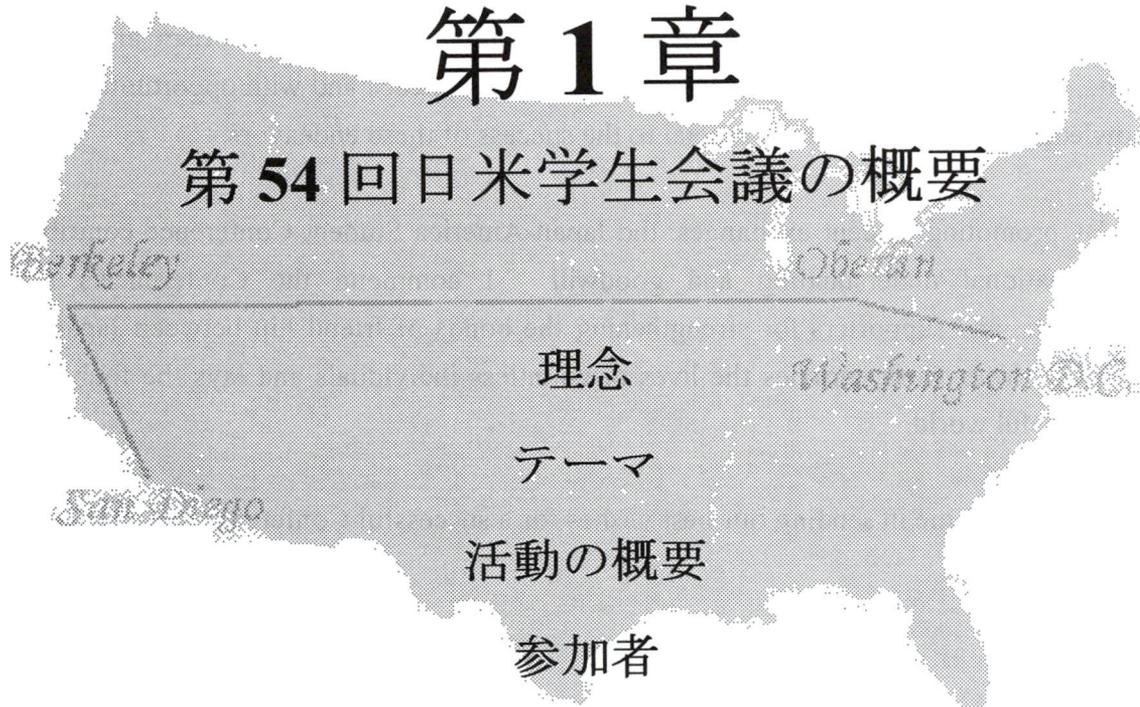
By promoting student exchanges, the Japan-America Student Conference contributes to international understanding and goodwill. I commend the Conference's staff, participants, and supporters for strengthening the bonds of friendship between Japan and America. Your work enriches the lives of countless individuals and lays the foundation for a peaceful world.

Laura joins me in sending our best wishes for a successful Conference.

George W. Bush
(The White House Washington July 29, 2002)

第1章

第54回日米学生会議の概要



理念

テーマ

活動の概要

参加者

本会議行程

第54回日米学生会議理念

Mutual Understanding, Empowerment and Progress

相互理解、「力」の獲得、そして前進

1951年9月8日のサンフランシスコ講和条約締結から半世紀、日米関係は紆余曲折を経て現在の関係に至っている。先の太平洋戦争における激しい衝突にもかかわらず、両国は戦後、史上稀に見る強いパートナーシップを構築し、日米関係は現在、国際関係における最重要事項の一つとみなされるまでになった。ただ、日米関係の発展段階において中心的な役割を果たしてきた国家レベルのアクターに加え、市民レベルでの交流も重要な役割を果たしてきたことは見逃せない。

一ヵ月に渡る共同生活を通じ、両国の学生はそれぞれの持つ多様な価値観を共有する。その過程でときには衝突を経験しながらも互いを認め、尊重し合うことによって、相互理解を模索していく。そこでの経験の中から今までの人間関係や価値観、および自己とそれを取り巻く社会との関係を見つめ直す。さらに、会議を通じて獲得した「力」を、自己完結で満足するのではなく、私たちの生きている社会へと発信させていく。それらの段階を経て、私たちは過去を踏まえて現在を生き、未来に向けて前進することができるのではないだろうか。それが日米学生会議を貫く理念であり、今回の第54回会議で私たちが挑戦すべき目標でもある。

第 54 回日米学生会議テーマ

Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues

「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」

世界は、グローバル化の波の中で 21 世紀を迎えた。通信技術の発達や経済の自由化などにより、既成の社会的、文化的な枠組みや価値観が疑問視されるとともに、国際社会は新たなパラダイムに転換しつつある。昨年の 9.11 事件に表されるように、異なる概念、価値観の混在が新しい問題を引き起こし、そして同時に旧来の社会問題を一層複雑化する。このような社会構造の中で、個人や国家も新時代における自らの役割の再定義が必要とされている。従来国際社会の中で確立されてきた日米関係についても存在意義を問い直す議論がなされるべきであろう。

以上の問題意識から、第 54 回日米学生会議は「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」をテーマとして掲げた。このテーマのもとに、通商政策、政治システム、先端技術と倫理、社会的不平等、宗教とアイデンティティ、多文化社会における教育、創造的表現から探る歴史認識、環境問題の 8 つの分科会を設置した。会議では以上の分科会活動を中心に各開催地でのプログラムや講演を通じて、現代の社会問題に対し日米両国の学生がさまざまな視点からアプローチし議論を深めることで、新たな国際社会において日米の果たすべき役割を探ろうと努めた。このようなテーマの下で開催された第 54 回日米学生会議は、参加者が問題意識の深化を図ることのできる場であったといえるだろう。互いに自己を主張しぶつかりあうというこの会議での経験が、新世紀における日米関係の役割を問い直していく上で大きな力になったことを願う。

第54回日米学生会議活動の概要

主催：財団法人 国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター
財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

期間：2002年7月27日～8月21日

● 活動内容

第54回会議は「相互理解、「力」の獲得、そして前進」という理念の下で、すべてのプログラムが行われた。活動の中でお互いを高め合い、そこで得られた「力」を自己完結させるのではなく、積極的に発信していくという思いが本会議には強く反映されている。本会議の主な活動はサイトイベント、分科会、スペシャルトピックに分けられる。会議中は主に英語が共通語として使用された。

サイトイベントは各サイトの性質、またサイトごとに設定された理念に基づいて実施された。フィールドトリップやパネリスト招いてのパネルディスカッションなど各サイトの文化、歴史的背景、またそこから派生される特色あるトピックに注目しそれぞれのイベントが組まれた。

分科会では8つの分科会それぞれ8～10人の学生が集まり、各トピックについての議論を行った。これらの分科会は54回会議テーマである「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」に基づいて設定されたものである。すべての会議参加者が夏の本会議前に自らの主張をまとめたペーパーを作成し、各分科会内での事前の勉強会などの活動を経て、本会議では議論が繰り広げられた。また、各分科会では議論と補完させる意味でフィールドワークや講演会も行った。政治、文化、経済など各分野の第一線で活躍されている方々をお迎えし、また、その現場を実際に訪問することで、議論をより実のあるものにすることができた。

スペシャルトピックは、分科会での議論とは異なり、多人数で一つの活動に取り組むものである。活動形態は分科会のような討論形式にとらわれず、芸術作品制作、スポーツなど多様なものとなった。また、活動内容は主に日米双方の文化的な違いを体感するものが中心となり、さまざまな形で参加者間のコミュニケーションが図られ、会議全体をより盛り上げることができた。

● 会議運営

第 54 回日米学生会議の会議企画運営は、原則としてすべて学生の手によって行われた。第 53 回会議の終盤に選挙で選出された日米 16 人の実行委員が約一年に渡り会議の骨子となる会議理念、テーマ、サイト、分科会議題、スペシャルトピックの決定をすべて共同で行った。

これらに加え、日本側実行委員は独自に、財務活動、予算書作成、事業計画書作成、実施要綱作成、広報活動、公開講演会、参加者選考（2～3 月）、春合宿（5 月）、防衛大学校訪問、事前勉強会、報告書作成などを企画、実施した。

第 54 回会議はアメリカ開催ということもあり、本会議へ向けた具体的な準備作業はアメリカ側実行委員によってなされた。日本側実行委員は物理的な距離を埋め、情報の共有を図るべく、電子メールなどで積極的にその発案、意思決定過程に参加していった。もちろん実行委員だけでは会議全体の成功は不可能であり、実際に参加者全員が企画のプログラム、広報活動など多くに主体的に参加し会議の枠組みを作り上げた。

第54回日米学生会議 <日本側参加者 一覧>

名前	大学	学部 / 学科	学年
日本側実行委員会 Japanese Executive Committee			
秋山 洋児	立命館大学	国際関係学部国際インスティテュート	3年
喜多 洋輔	三重大学	医学部医学科	5年
柴田 綾沙美	慶應義塾大学	経済学部	3年
千代 明弘	国際基督教大学	教養学部社会科学科	3年
出浦 直子	慶應義塾大学	法学部法律学科	3年
中川 由紀	一橋大学	法学部	4年
古川 敏明	東京大学	大学院総合文化研究科	修士課程 2年
松岡 洋平	京都大学	教育学部教育心理学科	4年
日本側参加者 Japanese Delegation			
石 さゆり	東京大学	教養学部総合社会科学科	3年
伊藤 志織	早稲田大学	法学部	3年
江川 響子	京都大学	農学部資源生物科	2年
大塚 絵美	慶應義塾大学	法学部法律学科	4年
大藪 真紀	国際基督教大学	教養学部社会科学科	2年
川良 麗子	早稲田大学	第一文学部総合人文学科	4年
北松 円香	国際基督教大学	教養学部社会科学科	2年
小林 悦子	慶應義塾大学	総合政策学部	3年
佐藤 陽一郎	早稲田大学	法学部	4年
鹿谷 幸史	東京大学	法学部	4年
高沢 健史	関西学院大学	総合政策学科	2年
高橋 泰美	筑波大学	第三学群国際総合学類	3年
筑紫 正宏	東京大学	法学部	3年
富田 美緒	早稲田大学	政治経済学部政治学科	4年
西納 由紀	一橋大学	法学部	3年
乗竹 亮治	University of Central Oklahoma	Communication 専攻	1年
服部 高明	東京医科歯科大学	医学部医学科	4年
福田 潤一	東京大学	大学院総合文化研究科	修士課程 1年
藤田 葵	東京大学	教養学部文科Ⅲ類	2年
堀抜 功二	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	2年
増谷 康	東京大学	大学院総合文化研究科	修士課程 3年
水本 憲治	京都大学	医学部	4年
宮下 紘	一橋大学	大学院法学研究科	修士課程 2年
森川 幹人	国際基督教大学	教養学部社会科学科	4年
守屋 彰人	慶應義塾大学	商学部商学科	4年
山田 哲平	慶應義塾大学	経済学部	2年
米田 綾子	東京大学	文学部社会科学科	3年

第 54 回日米学生会議 <アメリカ側参加者 一覧>

Name	University	Major	Year
アメリカ側実行委員会	The American Executive Committee		
Liv Coleman	University of Wisconsin, Madison	Political Science	Doctorate
Lisa Daily	Eckerd College	Art/Writing/East Asian Studies	Junior
Amy Jones	University of Kansas	Japanese	Senior
Sophia Kan	University of Washington	International Business	
		/Political Science/Asian Studies	Senior
Jaime Muscar	Washington and Lee University	East Asian Studies	Sophomore
Hannah Peterson-McCoy	Howard University	International Business	Junior
Lourdes Rivera	University of Guam	Secondary Education-Mathematics	Junior
Nana Uemura	Oberlin College	Sociology/East Asian Studies	Junior
アメリカ側参加者	American Delegation		
Michael Baik	University of Texas at Austin	Japanese/Biology	Sophomore
Gregory Balan	New York University	Psychology	Junior
Patrick Emerson	Guilford College	Business Management	Junior
Lauren Frese	Lafayette College	International Affairs	Junior
Lindsey Gallagher	Guilford College	Asian Studies/Women's Studies	Sophomore
Pamela Gard	University of Washington	Political Science	Senior
Hana Heineken	Princeton University	Politics/East Asian Studies	Junior
Max Homerding	University of Central Oklahoma	International Trade	Senior
Benjamin Larson	University of Washington	East Asian Studies	Senior
Marina Li	Mills College	Art/Social Change	Senior
Hao-Hung Liao	New York University	Economics	Sophomore
Katy Liu	New York University	Marketing	Sophomore
Alexandru Luta	Occidental College	Diplomacy/World Affairs	Sophomore
Amity Malack	Earlham College	Japanese Studies	Sophomore
Helen McCallister	Barnard College	East Asian Cultures	Sophomore
Leona Middleton	Washington University in St.Louis	Japanese/Psychology	Junior
Brittany Mitchell	University of Colorado, Boulder	International Affairs	Senior
Adam Rasmussen	University of Washington	Japan Studies	Master's
Walker Roberts	New York University	Screenwriting	Senior
Paul Rodriguez	University of Texas at Austin	Asian Cultures & Languages	Senior
Maho Saito	Smith College	East Asian Studies	Junior
Jaime Scheppers	Northwestern University	Journalism/East Asian Studies	Junior
Sachiko Tanaka	Keio University	Business & Commerce	Freshman
Taylor Upson	Duke University	Japanese/Political Science	Sophomore
Andrea Viski	Georgetown University	Government	Freshman
Rebecca Weisinger	Harvard University	Chemistry	Senior
Thomas West	Johns Hopkins University	International Relation	Sophomore
Fusako Yoneda	Ohio State University at Columbus	Education	Doctorate

本会議行程

ワシントン D.C.

- 7月27日 日本側参加者到着
- 28日 ジョイントオリエンテーション／キャンパスツアー／分科会#1
- 29日 分科会#2／オープニングセレモニー
- 30日 フィールドトリップ
- 31日 分科会#3／パネルディスカッション
- 8月1日 分科会#4／パネルディスカッション
- 2日 ST「パフォーマンスアート」
- 3日 移動

オーバリン

- 3日 移動／ST「映画とアニメ」
- 4日 分科会#5／Carol Lasser氏講演／オープニングレセプション
- 5日 分科会#6／ボランティア／ST「スポーツ」
- 6日 Roy Ebihara氏講演／Diana Roose氏講演
- 7日 分科会#7

バークレー

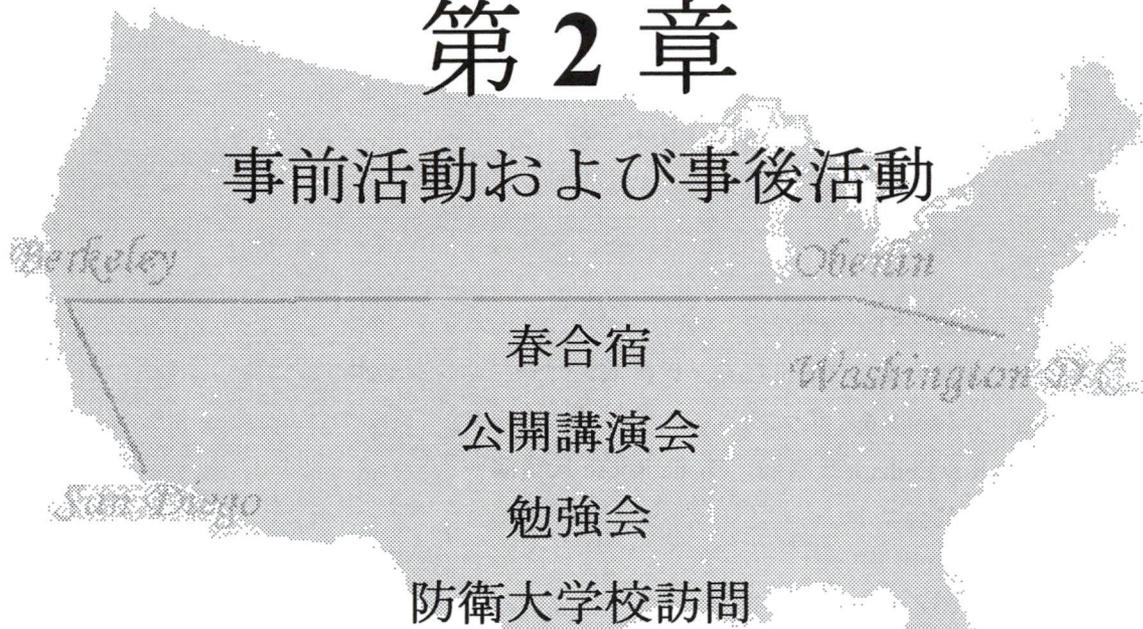
- 8日 移動／キャンパスツアー
- 9日 パネルディスカッション／レセプション
- 10日 フィールドトリップ／分科会#8／ST「パフォーマンスアート」
- 11日 分科会#9
- 12日 移動

サンディエゴ

- 12日 移動／キャンパスツアー／全体ディスカッション「テロリズム」
- 13日 レセプション／パネルディスカッション
- 14日 フィールドトリップ／分科会#10
- 15日 分科会#11
- 16日 分科会#12
- 17日 フォーラム／フォーラムレセプション
- 18日 ホームステイ
- 19日 新実行委員選挙／新実行委員ミーティング
- 20日 新実行委員ミーティング／クロージングセレモニー
- 21日 日本側参加者帰国

第 2 章

事前活動および事後活動



春合宿

公開講演会

勉強会

防衛大学校訪問

報告会 “第 54 回日米学生会議シンポジウム”

春合宿

2002年5月4日より、国立オリンピック記念青少年総合センターにて三日間の合宿を行った。定刻20分前には、受付に続々と参加者たちが期待と不安の入り混じった面持ちでやってくる。実行委員にとっては、ちょうど一年前の参加者であった自分の姿を思い起こす瞬間であった。また参加者にとっては、初めて他の参加者と出会うこの場から、本会議に向けての準備活動が本格的に始まった。実行委員長の「これからは実行委員も参加者もなく、皆同じ参加者です。72人全員で第54回会議を創り上げていきましょう」という歓迎の挨拶と共に、春合宿は開始された。

オリエンテーションでは、日米学生会議の歴史、組織概要、運営形態、第54回会議の理念テーマ、本会議までの事前活動、本会議活動の概要、事後活動、実行委員役職説明、サイト説明、分科会説明などが行われた。略語説明では、日米学生会議独自の用語（JASC、JASCer、EC、デリ、ジャパデリ、アメデリなど）についての紹介があり、日米学生会議カルチャーの一端を知ってもらうことができた。

自己紹介やアイスブレイキングでは第54回会議に集まった各参加者の強い個性を知ることができた。分科会ごとに分かれて数時間行ったディスカッションでは、分科会メンバーがそれぞれの興味関心を出し合い、どのように実りある分科会を創っていくか、ブレインストーミングが行われた。その後、全体で集まり、テーマに向けての議論の進行予定を分科会ごとに発表を行った。

春合宿から本会議開催までの期間において、一つの山場となるのが分科会ディスカッションで使うこととなる英文ペーパーの執筆である。多くの参加者にとって、初めての経験となる英文ペーパーの作成について、実行委員が論文執筆方法の説明を行った。後半では、合宿後、全国に散らばってしまう参加者をつなぐためのメーリングリストなどについての具体的な説明の他に、メールマガジンや掲示板などの作成も検討された。夜には日米学生会議OB、OGとの懇談会も開かれ、日米学生会議の歴史の厚みを感じることができた。

ほとんどの参加者はこの合宿が初の顔合わせとなったが、春合宿が終わる頃には旧知の友人のように打ちとけあっていた。参加者は密度の濃い夏の予感をそれぞれの胸に抱きながら、志を同じくする仲間たちとの出会いの喜びをかみしめていた。

公開講演会

● 福山哲郎氏講演会

「テロ後変わりゆく国際関係における日本の果たすべき役割」

日時：2001年12月26日

場所：京都大学

講師：福山哲郎氏

【略歴】(財)松下政経塾第11期生として入塾。1991年、スリランカの農村開発(サルボダヤ運動)を実体験。ノーベル平和賞候補アリヤラトネ博士と出会う。1992年、松下政経塾初の地域支部である「京都市政経塾」を設立し塾頭に就任。その後、東京政経塾塾頭、政策調査室長を歴任。1997年、旧民主党の京都副代表に就任。地球温暖化防止京都会議(COP3)にCOP3コーディネーターとして参加。1998年、参議院議員選挙に京都選挙区より立候補。トップ当選を果たし予算委員、経済、産業委員、行財政、税制等特別委員として活動。1999年に民主党に入党。

講演内容

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ発生時、実際にアメリカに滞在されていた福山氏から、中東の国際関係における歴史的背景を踏まえつつ「テロ後変わりゆく国際関係における日本の果たすべき役割」について講演をしていただいた。中東という地理が国際関係上のさまざまな力学が交差するポイントであり、時代背景とともにその様相を変化させてきたこと、そして中東で噴出する問題に対し国際社会がどのように対応してきたかをお話いただいた。またそのようなコンテクストを理解することなしに今回のテロを語ることはできないという指摘は、グローバル化、複雑化する国際関係にあって日本が重要な役割を果たしていくに際しても常にその出発点とするべき視点であることを再認識する機会となった。

テロ直後の日米マスコミの混乱や政治の対応などについて生々しく語りつつも、冷戦期を皆さんで中東に影響を及ぼし続けるアメリカの存在とその功罪に触れながらアメリカという国家への正しい理解を促すとともに日本のあるべき姿を問いかけた。

● 高橋和夫氏講演会

「現代社会を問い直すー国際情勢におけるアフガン問題を考えるー」

日時：2002年1月19日

場所：日米会話学院

講師：高橋和夫氏



【略歴】放送大学助教授。専門は国際政治、中東研究。日米学生会議OB（第26回会議）。大阪外国語大学ペルシア語科卒業後、コロンビア大学大学院で国際関係論を修める。1979年博士課程修了。1983~84年、クウェート大学客員研究員を経て、1985年から現職。東京大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、日米会話学院講師(School of International Studies)も務める。湾岸戦争、同時多発テロ事件などでのニュース解説等でも活躍。

【著書】『現代の国際政治／冷戦を越えて』（放送大学教育振興会）、『第三世界の政治／南からの視点』（編著、放送大学教育振興会）、『ハジ・ババの冒険上・下』（共訳、平凡社東洋文庫）、『アラブとイスラエル／パレスチナ問題の構図』（講談社現代新書）、『燃え上がる海／湾岸現代史』（東京大学出版会）、『アメリカとパレスチナ問題／アフガニスタンの影で』（角川ワンテーマ21）他。

講演内容

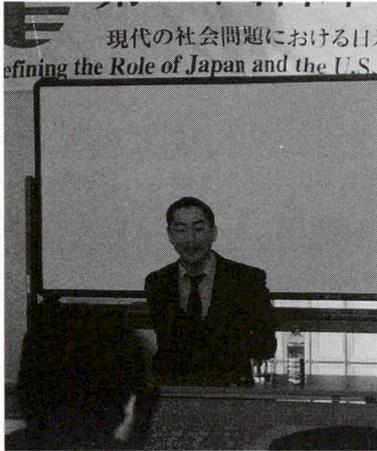
高橋氏はまず、9月11日以降の一連の事件はアメリカの生活様式そのものへの攻撃であったと述べられた。次にアフガニスタンについて、主に三つの点を指摘された。まず私たちがアフガン問題を考えるときいくつかの誤った対立図式を描いているということ、次にアフガニスタンの平和実現のためには、国内権力間の調整と周辺国の利害の調整という二元連立方程式を解く必要があるということ。そしてさらに、国際社会は大国の利害関係に振り回された今までのあり方を反省しなければならず、同時にアフガニスタン国民自身の反省も必要であるとされた。両者がともに過去を反省したその接点にこそ平和が生まれるとして、過去と同様の過ちを繰り返さないことの必要性を説かれた。

● 村田晃嗣氏講演会

「21世紀日米の果たすべき役割とは～20世紀の日米外交史を振り返って～」

日時：2002年2月19日

場所：キャンパスプラザ京都



講師：村田晃嗣氏

【略歴】専門はアメリカ外交、安全保障政策研究。広島大学平和科学研究センター客員研究員、日本国際政治学会評議員・企画研究委員などを兼任、グローバル・フォーラム有識者メンバーでもある。1996年、読売論壇新人賞、優秀賞を受賞。2000年、衆議院憲法調査会参考人を務める。現在、同志社大学法学部助教授。

【著書】『大統領の挫折—カーター政権の在韓米軍撤退政策』（有斐閣、1998年、サントリー学芸賞、アメリカ学会清水博賞）や『米国初代国防長官フォレストル——冷戦の闘士はなぜ自殺したのか』（中公新書、1999年）など多数。

講演内容

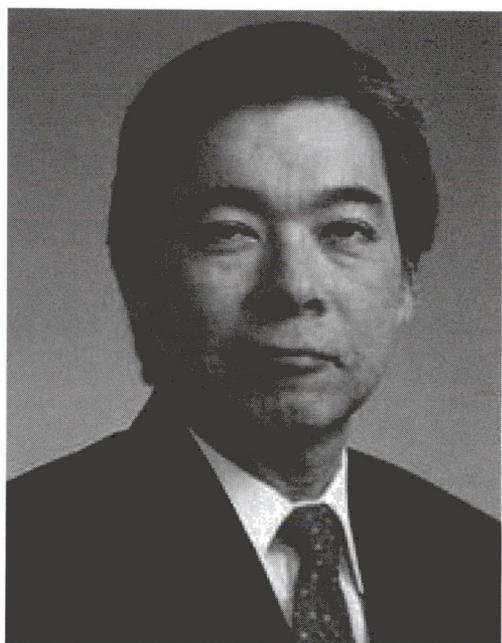
ブッシュ政権樹立後初の日米首脳会談をひとまずの成功だと捉えつつ、冷戦後の「ポスト冷戦」を定義できぬままにテロ後「ポスト・ポスト冷戦」に入ったという主張のもと、日本の政治外交について1970年代と1990年代という二つの時間軸からさまざまな共通点と相違点を指摘された。その上で「明確な冷戦構造」から、複雑な構造へと変化した国際社会、そして経済的な側面での変化が日米関係に及ぼした影響を明らかにしていった。また、今後の日米関係については、日本は「アジアの中の日本」という総合的ビジョンを明確にしつつ、アメリカという超大国をパートナーとしながらも、さまざまな場面での「説得」を通じて国際政治の中で確固たる地位を獲得していく必要性を訴えられた。

● グレン・S・フクシマ氏講演会
「日米関係の課題と展望」

日時：2002年6月8日

場所：東京大学駒場キャンパス

講師：グレン・S・フクシマ氏



【略歴】カリフォルニア州出身の日系三世。1968～72年、スタンフォード大学、1974～78年ハーバード大学大学院（Ph.D.課程を論文を除いて終了）1978～82年ハーバード・ビジネス・スクール（M.B.A.コース）ハーバード・ロー・スクール（J.D.；弁護士資格取得）。1985年4月、ロサンジェルスの大手法律事務所から、米国大統領府通商代表部に入省。その後1990年までアメリカの対日・対中通商政策の立案、調整、実施を行い、訪日は45回にわたった。1990年4月米国AT&T社に入社。1998年5月まで日本AT&T（株）副社長を務め、同年5月よりアーサー・D・リトル（ジャパン）株式会社代表取締役社長に就任する。その後2000年10月には日本ケイデンス・デザイン・システムズ社長に就任し、現在に至る。経済同友会等各種の団体の幹事、理事を務める。第22回（1970）、第23回（1971）日米学生会議参加。夫人、橘・フクシマ・咲江氏も同会議参加者。経団連、経済同友会をはじめ数多くの団体・協会等で講演。

【著書】『日米経済摩擦の政治学』（朝日新聞社、1992年）第9回大平正芳賞受賞（1993年）、『変わるアメリカ・変わるか日本』（世界文化社、1993年）、『2001年、日本は必ずよみがえる』（文芸春秋、1999年）他。

講演内容

日本にとって最大の同盟国である超大国アメリカとの関係は、どのような変遷を経て現在に至っているのか。また今後どのような道をたどるのであろうか。フクシマ氏はまず日米関係の伝統的な外交上の三本の支柱、「安全保障」「政治」「経済」について説明された。しかし冷戦後にはその三本の柱のみでの分析が難しくなったとし、クリントン政権の、日本を脅威とみなしていた1990年代前半と日本の経済的地位低下による対日政策の変遷について説かれた。次にブッシュ政権について、親日派ではあるが、対日経済問題についての関心は薄いとされた。また、共和党政権でも民主党政権でも細かな政策の違いがあるとはいえ、基本的には対日政策に変わりはないとし、今後10年間の多岐に渡る18のトレンドを指摘した後、複雑化する日米関係におけるプライベートセクターの役割の増大を指摘された。そして最後に、日本はアメリカの多様性を見習い、そして日本の役割を明確化することが重要であるとした。

● 田中明彦氏講演会

「現代の社会問題：日本の安全保障～その意義と今後の課題～」

日時：2002年6月29日

場所：日米会話学院



講師：田中明彦氏

【略歴】1954年8月生まれ。1977年、東京大学教養学部教養学科卒、1981年、Ph.D. (政治学・マサチューセッツ工大)。1981年、平和・安全保障研究所研究員、1983年東大教養学部助手、1984年、東大教養学部助教授、1986年～1987年、ルール大学ボーフム客員教授、1990年、東洋文化研究所助教授、1994年～1995年、オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ客員研究員、現在東洋文化研究所所長。

【著書】『世界システム』(東京大学出版会、1989年)、『日中関係1945～1990』(東京大学出版会、1991年)、『新しい「中世」』(日本経済新聞社、1996年)、『安全保障』(読売新聞社、1997年)

講演内容

日米関係は、安全保障政策を抜きにして考えることはできない。しかし、そもそも安全保障政策を考えるとどういうことなのだろうか。安全保障政策を考える際には、目的(何を守るか)、脅威(何から守るか)、手段(何で守るか)、の三つの側面から考える必要がある。まず、安全保障の目的としては、従来は「領土」を守ることが主だった。しかし、現代においては、「経済」、「エネルギー」、「人間」などの新たな安全保障が登場し、安全保障の目的は多様化している。次に、安全保障の脅威としては、古典的安全保障の脅威である「侵略」が挙げられる。しかし、現代における脅威は、環境破壊やテロなど、主体と意図が不明確なものが多い。最後に、安全保障の手段にはさまざまなものが存在する。国家は、単独、二国間、多国間の形態にて、軍事力、経済力、外交、政治の手段で、予防、抑止、防衛を行うことを選択できる。以上を踏まえた上で日米安全保障条約の意義を考えると、本来、当条約は、領土に対する(目的)、ソ連の脅威を(脅威)、二国間で抑止をする(手段)条約だったことがいえる。しかし、冷戦が終結し、日米安全保障条約の意義はこのような方式では説明できなくなった。では日米安全保障条約は、現代ではどのような機能をもつのだろうか。それは従来のように領土を二国間で抑止するのではなく、狭い意味での日米関係にとどまらない「多国間」の「予防」であるといえるのではないだろうか。

勉強会

● 山脇啓造氏勉強会

日時：2002年6月1日

場所：東京大学駒場キャンパス

講師：山脇啓造氏

【略歴】1960年生まれ、埼玉県出身。東京大学法学部卒業。コロンビア大学国際関係大学院修了（国際関係論修士）。国連開発計画（UNDP）JPO（在コスタリカ）、NHK・BS放送通訳、明治学院大学国際平和研究所・特別所員を経て、現在、明治大学商学部助教授。第33回、第34回日米学生会議参加。



【著書】『近代日本と外国人労働者』（明石書店）、『「韓国併合」前の在日朝鮮人』（共編著、明石書店）など。

【インターネットサイト】<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yamawaki/>

講義内容

春合宿後からの、一連の勉強会の皮切りとして、かつて日米学生会議にも参加された山脇氏に、「2010年の日本・外国人・学校—多文化共生社会に向けて」と題し、講演をしていただいた。まず、外国人の定住化の現状と、21世紀の日本の将来推計人口を概観し、その後、日本政府によるこれまでの外国人政策についてお話いただいた。次に、市民レベルでのさまざまな多文化共生のまちづくりの事例をご紹介いただき、さらに、教育改革と多文化共生教育の拠点としての学校の重要性をお話された。2002年度より実施された新学習指導要領で目玉の1つである国際理解教育が、ゆとり教育の影に隠れてしまっている現状を指摘され、単なる外国理解教育ではない、多文化共生教育としての国際理解教育の重要性も説かれた。最後に、外国人政策はあっても外国人対策はない日本の現状を鑑み、抜本的政策の見直しとして、一、外国人対策に特化した事務局の設置、二、第二言語としての日本語教育、三、外国人の子供の存在を前提とした学習指導要領、四、外国人差別を防止する基本法の設置の四点を挙げられた。

● 荻谷剛彦氏勉強会

日時：2002年6月15日

場所：日米会話学院



講師：荻谷剛彦氏

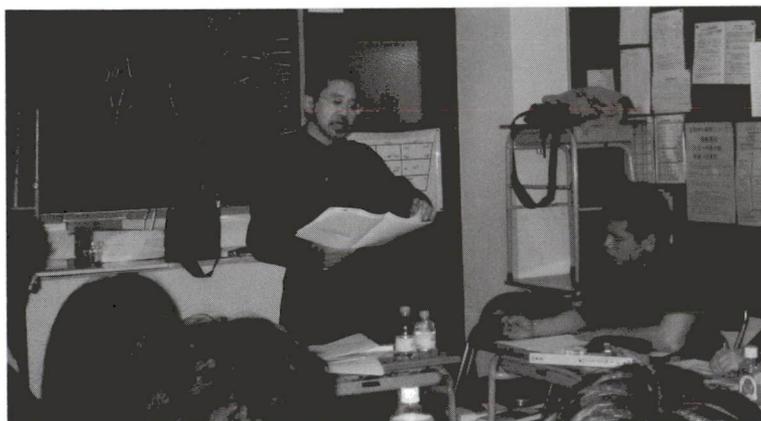
【略歴】1955年生まれ、東京都出身。東京大学大学院教育学研究科修了（教育学修士）。ノースウエスタン大学大学院修了（社会学博士）。ノースウエスタン大学客員講師、放送教育開発センター助教授等をへて、現在、東京大学大学院教育学研究科教授。専攻は、教育社会学、比較社会学。

【著書】『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書）、『階層化日本と教育危機』（有信堂高文社）、『教育改革の幻想』（ちくま新書）など。

講義内容

現代社会の諸問題に対し、教育は解決に向けた重要な糸口を与えてくれる。しかし、教育自体も内部にさまざまな問題を抱えており、日米の教育を比較するに先立ち、日本における教育の問題点を意識化しておくことは必要不可欠であった。実証的データに基づく見地から、日本の教育改革に対し警鐘を鳴らされている荻谷氏を招き、「教育における失われた10年の検証」というテーマで講義をしていただいた。まず、日米の教育の比較により、両国の違いと、かつて「子ども中心主義」であった日本の教育の「アメリカ化」が進行している現状を概観した。次に、「新しい学力観」に基づく教育や、「支援者」としての教師といったキーワードにより、1989年の改訂学習指導要領と2002年度から実施された学習指導要領との連続性を確認した。続いて、1989年と2001年に関西都市部で小中学生を対象に行われた調査を通し、ここ10数年で学力、学習意欲、学習態度において、社会階層による格差が拡大している現状を見た。グローバル化の中で生じる、こうした国内の階層格差を是正するためには、教育による下支えが必要不可欠であり、最後にそのための具体的な提言がなされた。

● 原孝氏勉強会



日時：2002年6月15日

場所：日米会話学院

勉強会風景

講師：原孝氏

【略歴】慶應義塾大学法学部法律学科卒業後、新聞記者を経てフリーライターとして活動。その後、プレジデント社に入社。現在、同社企画出版部長。1998年、「年間ベストセラー」（トーハン発表）に同氏が企画・刊行した単行本が2冊同時にベストテンにランクインする。同一編集者が「2冊ランクイン」させたのは戦後初めて。1999年より「大学の授業を考える会」を主宰し、全国の大学生と「熱い交流」を続けている。また、通信教育課程の社会人学生と通学課程の若い学生とが共演した、不登校少女が主人公となる劇『チェンジ』を昨秋上演し、話題になる。この劇の主人公を演じた長住亜美さんのドキュメンタリーを今回、渡辺崇の授賞第1作としてプロデュースした。

【作品】主な作品として、日本画壇の巨匠・平山郁夫や文化勲章受賞作家・遠藤周作などのドキュメンタリービデオがある。現在、早稲田大学講師として『自己表現論』を担当している。著書には、大橋功『教師を目指す若者たち』（プレジデント社、2000年）がある。

講演内容

原氏の講演は、ともすれば、「いい大学」に所属する「お嬢ちゃん、お坊ちゃん」が集うサロンになりがちな日米学生会議に強いアンチテーゼをなげかかけてくれた。キーワードは「群れる」である。種々雑多な人間が国籍をこえて集まり、“群れる”ことで新しいものが生まれる。そのためには、参加者の選考から問い直すべきではないか、という問題提起もなされた。たとえば、「愛は充足と欠乏の統一である」という言葉で日米学生会議を比較するとどうなるだろうか。「日米学生会議はアカデミズムと非アカデミズムの統一である」といえるだろうか。一面的な見方をしてはいけないという戒めは理解しているつもりでも、長年同じ会議が行われていると伝統という名のマンネリ化も顕著になり、会議参加者も似たような人間が集まる傾向が強くなる。日米学生会議の存在を絶え間ない新陳代謝によって自己を外界に分解させながら、同時に自己を再生産し、同一を維持することが、よき伝統につながっていくのではないだろうか。対立する力の均衡という本質が、静止した存続という現象を支えていけるのではないだろうか。

● 英語勉強会

日時：2002年6月29日

場所：日米会話学院

講師：Paul Arenson 氏（日米会話学院講師）

【略歴】 Paul Arenson was born in New York City and has lived and taught English in Japan since 1979. He is also an activist, poet and songwriter and has a website at <http://tokyoprogressive.org>

本会議中の分科会の議論や会議全体でのディスカッションは基本的にすべて英語で行われる。よって、コミュニケーションの質が会議の成果を大きく左右することになる。語学に不安を抱える参加者も多いことから、第54回会議では事前活動の一環として講師を招き、英語勉強会を設けた。英語勉強会ではまず第一部として、異なる意見が対立した分科会の状況を想定した。いかにして自分の意見を英語で理論的に主張するかを学ぶために、「日米学生会議の公用語に日本語を加えるべきか否か」というテーマに関して、少人数のグループに分かれてディベートを行った。Arenson氏には、ディベートについて講義していただき、反論、反駁の表現等もご指導いただいた。第二部では、本会議中で行われる会議参加者全員での議論に備えるために、大人数で日米学生会議の意義について意見交換を行った。この際に、実際に日米合同の議論の際に欠かせないハンドシグナルも導入し、大勢に自分の意見を届けることを試みた。

防衛大学校訪問

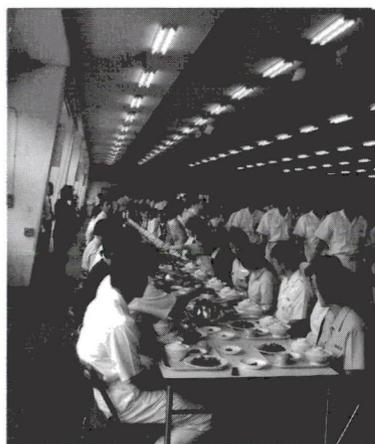
2002年6月14日、第54回日米学生会議日本側参加者は神奈川県横須賀市にある防衛大学校を訪問した。終日、日米安保や自衛隊派遣などについての激しい議論が交わされ、おおいに盛り上がりを見せた訪問となった。防衛大学校到着後、源田一空佐による防衛学講義を受け、引き続いて西原正防衛大学校長からの激励の挨拶をいただいた。学校紹介の広報映画を見た後、参加者は校舎屋上へと案内され、素晴らしい展望を前に施設の説明を受けた。次に通された食堂では、防衛大学校生による歓迎という予期せぬ事態を受け、驚きとともに始まった昼食会だったが、防衛大学校生との対話や美味しいご飯のおかげでとても楽しい時間を過ごすことができた。昼食後は防衛大学校生による課業行進を見学し、次に訪問におけるメインイベントである「防衛学特論研修」および「グループ討論会」へと進んでいった。

「防衛学特論研修」では日米同盟と中台関係、国連 PKO と平和協力法、日本的宗教観と特攻、玉碎思想など14の興味深いテーマが事前に用意されており、それらの中から会議参加者が興味のある分野を選び、事前にグループに分かれた上で講義が行われた。いずれの講義も、参加者が普段所属している一般大学で受ける講義とは一味違うものばかりで、参加者はそれぞれに違った感想を持ちながらも、新たな知識と視点を得たことに充実感を感じていた。

「グループ討論会」では6つのグループに分かれ、各グループとも日米学生会議参加者と防衛大学校の学生が同じ割合で入る構成となっていた。あらかじめ用意されていた、日米安全保障体制の戦略的重要性、有事法制を巡る民軍関係の調整、集団的自衛権を巡る問題の三つのトピックから議論を始め、議論が進んでいく上で、トピック意外にもさまざまな話題が話し合われていった。一般学生と防衛大学校生という立場や考えの違いから、ときには議論のすれ違いや意見の衝突も見られたが、尽きることのない白熱した討論の中、会議参加者、防衛大学校生の双方は多様な価値観の共有を楽しんでいたように見えた。訪問終了後も横須賀の街で夕食を共にしながら防衛大学校生の日常や、将来への思いを聞くことができ、深い友情を防衛大学校生と確かめ合った。

防衛大学校の全面的な後援により、訪問は終始スムーズに進行し、大成功に終わった。後日、日米学生会議参加者、防衛大学校生の双方から「非常に充実した一日だった」という感想を多く聞いたことから、この一日が両学生たちにもたらしたものは大きかったと言えよう。

会議参加者と防衛大学校学生



報告会 “第 54 回日米学生会議シンポジウム”

【主催】(財) 国際教育振興会

【企画・運営】第 54 回日米学生会議実行委員会

会場：市ヶ谷アルカディア 私学会館

日時：平成 14 年 11 月 17 日（日） 13：00～18：00

テーマ： 現代の社会問題における日米の役割を問い直す

Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues

当報告会は、会議の活動の成果をご賛助、ご協力いただいた方、および広く社会に向けて発表する場であるとともに、国際社会の中で確立されてきた日米関係の存在意義を問い直すことで、会議テーマを実現する場である。これは同時に、54 回にわたって開催されてきた日米学生会議の活動そのものを改めて見つめ、現代社会で私たち学生に何ができるか、何をすべきかを問う機会でもあると考える。このため、当報告会は一方通行の発信ではなく来場者とともにこれらの問いを再考し、さらには現代のグローバル社会を共創するべく、「第 54 回日米学生会議シンポジウム」のタイトルを掲げる。クリステンソン在日米国大使館首席公使による基調講演、分科会プレゼンテーション、パネルディスカッションに続き、来場者との交流とシンポジウム内容の発展を趣旨としたレセプション、Salon de JASC を開催する。

プログラム概要

第一部：日米再考

第 54 回 日米学生会議実行委員長挨拶

クリステンソン在日米国大使館首席公使基調講演

第 54 回 日米学生会議分科会報告

第二部：ポストテロ時代の共創

パネルディスカッション

パネリスト

長島昭久氏 民主党安全保障アドバイザー

宮島昭夫氏 外務省北米第一課長

新治毅氏 防衛大学校元教授

河野憲治氏 NHK 報道局国際部デスク

他 日米学生会議参加者 2 名

第 55 回日米学生会議開会宣言

第三部：レセプション Salon de JASC

歓談会

第54回日米学生会議 シンポジウム

現代の社会問題における日米の役割を問い直す
Redefining the Role of Japan in Relation to Contemporary Social Issues



1934 - 2002

第1部 日米再考
第2部 ポストレトロ時代の共創
第3部 Salon de JASC

11月17日(日) 13:00~18:00 12:30開場
市ヶ谷アルカディア 私学会館
 JR・営団地下鉄 都営地下鉄市ヶ谷駅 徒歩3分
 入場およびレセプション無料
 ホームページにて申し込み受付中 <http://www.us-net.surf.ne.jp/jasc/>
 当日申し込みも受け付けております

後援: 外務省 文部科学省 米国大使館 日米文化センター
 [財] 国際ビジネスマンコミュニケーション協会

主催: IEC 財団法人 国際教育振興会 企画・運営: 第54回日米学生会議実行委員会

報告会案内状 表紙

The 54th Japan-America Student Conference

日米学生会議シンポジウム

「日米学生会議シンポジウム」は第54回日米学生会議の活動の成果を、広く社会に向けて発信する場であるとともに、国際社会の中で確立されてきた日米関係を再考し、本会議テーマ「現代社会における日米の役割を問い直す」を現実することを試みます。これは同時に今学生に何ができるか、何をすべきかを問う機会でもあります。日米学生会議参加者、シンポジウムにご協力いただく方々、会場来場者との相互交関によって、社会のアクターそれぞれが日米関係の進歩を振り廻り、責任を背負い、そして未来を共に構築することを目指します。

プログラム

Opening Speech 開会辞 リチャード・F・Aクリステンソン 日米国際大使館 主席客員
 「本会議」をテーマに、第54回日米学生会議のタリスマンソン氏に開会をいただきます。氏は、国際情勢にて日本経済、在日米大使館にてマイタ・マンズフィールド大使(日米)の演説、その後の特別講演、在米日米関係者などを始め、現在在日米関係者や学生を招き合っています。

Table Presentation テーブルプレゼンテーション
 第54回日米学生会議ではかつの分科会が設けられ、一ヶ月に渡って議論を重ねてきました。その成果をプレゼンテーション、発表の形で発表すること、テーマにおける「問い」を問い直すこと、その成果を共有すること、(分科会名: 国際化、経済システム、先端技術と倫理、社会的格差、環境とイノベーション、多文化社会における教育、国際的な視点から見た歴史、国際化)

Panel Discussion パネルディスカッション
 政治、経済、教育、メディアの各分野からパネリストをお招きし、演説者、日米学生会議参加者との議論を通じてグローバルな視点、そして日本の進むべき道を探っていきます。

Salon de JASC シェン・デ・ジャック
 本会議、参加者(後援)を囲んで、本シンポジウムの内容をさらに深め、ご来場者の方々と日米学生会議の交流及びOB、OGとの人財・知財ネットワークを醸成する場としてレセプションを開催します。どうぞお気軽にご参加ください。



18:00	14:00	18:00	18:00
開会	テーブルプレゼンテーション	パネルディスカッション	レセプション

日米学生会議

日米学生会議は1934年、賓州卒業生で帰国化した日米関係を促進した日本の学生有志により創設されました。60年以上の歴史を持つこの会館は、全米にわたる全ての北米諸国が同国の学生の手に持って行われており、第54回本会議は約一ヶ月間に渡り、アメリカ田舎市にて開催されました。

当日のアクセス

市ヶ谷アルカディア 私学会館
 〒100-0052 東京都千代田区市ヶ谷3-1-1
 TEL: 03-3261-0921

Access to JASC
 日米学生会議公式ホームページでは、これまでの日米学生会議の活動の紹介と共に、第54回日米学生会議の概要、日米学生会議実行委員会主催の懇話会の案内等を掲載しています。また、メールマガジン登録申し込みもホームページにて受け付けています。

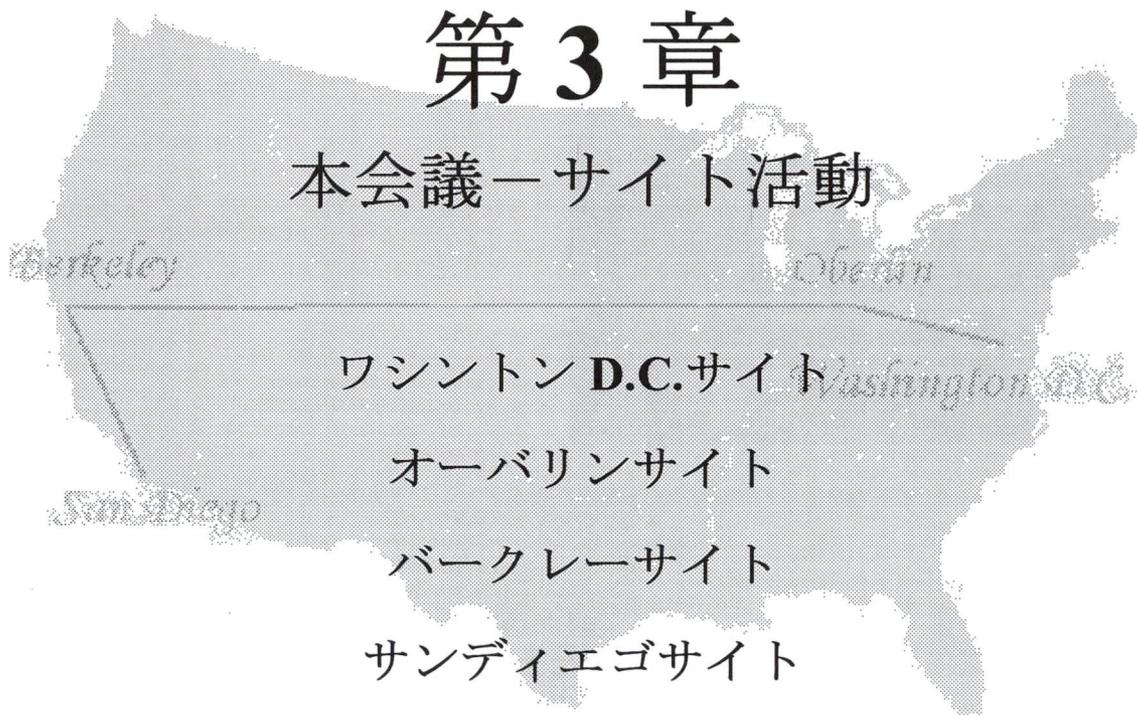
11月17日(日)
 13:00~18:00
 12:30開場
 入場・レセプション無料

日米学生会議事務局 TEL: 03-3261-0921
<http://www.us-net.surf.ne.jp/jasc/> (日本語ホームページ)
<http://www.jasc.org> (アメリカ英語ホームページ)

報告会案内状 裏面

第3章

本会議—サイト活動



ワシントンD.C.サイト

サイトコーディネーター：出浦 直子、秋山 洋児
Hannah Peterson-McCoy

● ワシントンD.C.サイトスケジュール（滞在期間：7月27日～8月3日）

7月27日	日本側参加者到着
7月28日	自己紹介、ジョイントオリエンテーション キャンパスツアー 分科会#1
7月29日	分科会#2 開会式 スキット上演
7月30日	K. Patrick Okura 氏による講演（Japanese Memorial to Patriotism） フィールドトリップ（国会、博物館） リフレクション
7月31日	分科会#3 “Human Rights and Global Security” パネルディスカッション リフレクション
8月1日	分科会#4 “U.S.-Japan Relations Economic, Security, and Cultural Perspectives” パネルディスカッション 日本大使館にてレセプション（加藤良三大使の挨拶）
8月2日	“Underground Railroad”勉強会、ディスカッション フィールドトリップ（Georgetown） パフォーマンスアート ST
8月3日	オーバリンへ出発

● サイトスタッフメンバー

秋山洋児*、佐藤陽一郎、シムヴィリヤ、出浦直子*、福田潤一、藤田葵、宮下紘
 (*はサイトコーディネーターを示す)



米国連邦議会議事堂前にて

● ワシントン D.C. サイトの理念

アメリカ政治の中心地である首都ワシントン D.C. で、“Human Rights and Global Security” というテーマの下、学術的活動のみならず、フィールドトリップを通して、本会議中において不可欠な、日米相互の価値観および歴史観の理解に努めた。アフリカンアメリカンのための大学として設立された歴史を持つ滞在先のハワード大学は、「人権」という言葉の重みを私たちに実感させるに最適の場所であった。また、同時多発テロの標的となったペンタゴンがあるワシントン D.C. は日米両国の「安全保障」を考える場所としても極めて重要な場所である。ワシントン D.C. は本会議の理念である「相互理解、『力』の獲得、そして前進」を追及し、政治的、経済的、文化的諸問題を討議するにふさわしい場所であった。

ワシントン D.C. サイトイベント

■ ジョイントオリエンテーション (7月28日)

参加者全員の自己紹介をした後、それぞれが自分の出身地や趣味に関係したお土産を交換し合いながら会話を弾ませた。初めての会話に緊張しながらも、ゲームを通じて次第に場が打ち解けていった。



自己紹介するアメリカ側参加者

■ オープニングセレモニー (7月29日)

琴の演奏とともに行われた第54回日米学生会議開会宣言に続き、日本側実行委員長の千代明弘とアメリカ側実行委員長の Jaime Muscar がスピーチを行った。

日本側実行委員長によるスピーチ

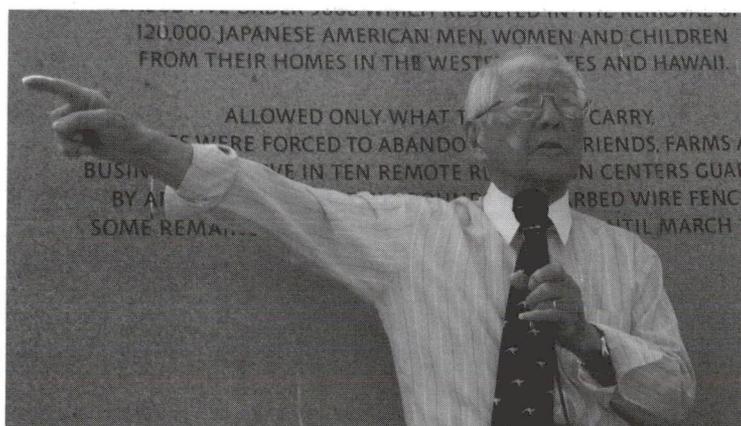


■ スキット上演 (7月29日)

参加者の期待と不安の入り混じる中、練習を重ねてきたスキットが演じられ、大いに盛り上がった。日本側は、いくつかの映画のワンシーンに剣道、柔道の技の披露を加えたコメディを演じた。一方、アメリカ側は、アメリカでの日常をユーモアを交えて紹介した。このスキットを通して仲間たちとの友情が芽生えたのではないだろうか。

■ K. Patrick Okura 氏による講演 (7月30日)

2001年に除幕された全米日系米国人記念碑において、第1回日米学生会議参加者である K. Patrick Okura 氏から、戦時中の貴重なお話をいただいた。参加者は戦死した日系人の名前が刻まれた石壁の前に集まり、第二次世界大戦中、アメリカ人でありながら敵国日本の一部と見なされ、強制収容された日系アメリカ人の苦難と差別に対する自由について考える機会を得た。



自らの体験を語る Okura 氏

■ ワシントン D.C. フィールドトリップ (7月30日)

議会へフィールドトリップに行ったグループは、議員秘書の案内の下、議会内部、彫刻ホールさらに旧最高裁判所の見学、そして会期中の上院議会の傍聴などを行った。ミュージアム、各種モニュメントへのフィールドトリップを行ったグループは、アメリカの文化、社会が残した遺産、そしてアメリカ建国に寄与した偉大な人々、歴代大統領の銅像を見学した。



ワシントンモニュメント前にて

談笑する日米の参加者たち



■ “Human Rights and Global Security” パネルディスカッション (7月31日)

安全保障に関連する諜報機関 (intelligence community) について、情報の独占と権力分立制について (Dr. Harold Scott)、行政における諜報の使用の歴史的変容と法的諸問題について (Ms. Terri Scadron)、情報の保護制度と移民政策について (Ms. Thankful Vanderstar) の各報告がなされ、会議参加者からのさまざまな質問を交えて活発な議論が交わされた。

■ “U.S.-Japan Relations Economic, Security, and Cultural Perspective”

パネルディスカッション (8月1日)

テロ後の日本のアメリカに対する後方支援や国際貢献に対する評価 (Mr. Brian Mohler)、細部で日米の齟齬があるにもかかわらず、日米が共有できる価値観について (Mr. Takehiro Funakoshi)、日米同盟が保険としての役割を果たしていること (Dr. James Auer)、女性の地位と積極的差別是正措置についての問題について (Ms. Ayako Doi)、各パネリストから興味深い報告がなされ、日米関係についての理解を深めた。



パネルディスカッションの様子

■ 日本大使館にてレセプション（加藤良三駐米大使のご挨拶）（8月1日）

日本大使館にて、駐米大使加藤良三氏によるご挨拶をはじめ、日米関係の最前線で働いていらっしゃる方々からのお話を頂戴した。実際の外交がどのように運営、機能しているのか、大使をはじめとする外交官の方々のお話に真剣に耳を傾けた。日本食も楽しむことができ、貴重なレセプションとなった。

加藤氏による挨拶



■ “Underground Railroad”講演、ディスカッション（8月2日）

“Underground Railroad”について、人種問題と南北戦争当時の歴史的背景を絡めて、アメリカ側参加者 Hannah Peterson-McCoy のご両親が講演された。講演、グループディスカッションを通して、改めてアメリカが抱える人種問題の重要性について考えさせられた。

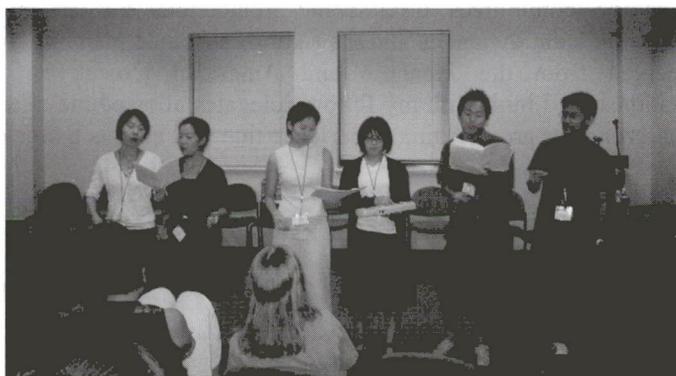
Hannah のご両親による講演



■ パフォーマンスアート ST（8月2日）

会議参加者の中から有志を募り、ユニークなパフォーマンスを披露してもらった。さまざまなパフォーマンスの中でも、特に「上を向いて歩こう」の合唱や柔道の技のパフォーマンスには盛大な拍手が送られた。

「上を向いて歩こう」を歌う参加者たち



サイトコーディネーター後記

To the 54th Japan-America Student Conference delegates and Executive Committees

As the Howard University-Washington, D.C. site coordinator for the 54th Japan-America Student Conference, my challenge was to plan site activities that would incorporate all the political and historic relevance of Washington D.C.-as an International hub important to contemporary social issues, as well as to highlight some of the city's tributes to the bilateral relationship with Japan, that symbolically date back to the 1912 gift of Cherry Blossom Trees. The theme for the Washington, D.C. site of "Human Rights and Global Security Issues" was chosen to encompass mutual importance of Human Rights and civil liberties in maintaining state sovereignty and security. In addition, I felt that it was important to introduce and expand upon the significance of Howard University, a historically black university founded in 1867 and its significance to the African American community.

With the post 9/11 attack on the United States pentagon and World Trade Centers as a backdrop to this year's conference, and the increasing pressures on Japanese government to amend article 9 in the Japanese constitution concerning military force, the future roles of the Japanese and United States governments in the current "war on terrorism" were the focus of many of the guest speakers. The "Global Security Issues Panel", lead by Thankful Vanderstar and Terri Scadron, of the United States Department of Justice (DOJ) and Dr. Harold Scott of the Howard University Ralph J. Bunche Center of International Affairs focused on the actions of the United States government after the September 11, 2001 attacks. Ms. Scadron and Ms. Vanderstar touched on the recent defense mechanism of the US department of Justice to designate terrorist organizations as a means of exposing them to the international community and United States allies. Dr. Harold Scott gave an overview of the development of United States Intelligence Agencies and talked about the possible pros and cons associated with the implementation of the Homeland Security United States government initiative.

The "U.S.-Japan Relations: Economics, Security and Culture" also emphasized the history of our bilateral security alliance. Takehiro Funakoshi, the first secretary at the Japanese Embassy in Washington, D.C. pointed out Japan's use of foreign aid as a means to secure peace both regionally, such as with the Cambodian peace keeping project and United States anti-terrorism efforts. Ayako Doi, editor and chief of the Japan Digest spoke of gender role differences in Japan and the United States, by relating Japan's economic reform inconsistency with gender dynamics in the demography of Corporate Japan.

The human rights aspect of the Howard University site was woven from various accounts of Human rights violations and victories throughout history. Patrick Okura, JASC I participant and board member gave a personal account of his experience being interned in California and the racial-stereotyping he experienced living in Los Angeles, California post WWII.

A field trip to the holocaust museum was also a very poignant aspect of the Washington, D.C. site as it offered many JASCers a first-time in-depth look at the history of the WWII holocaust tragedy. In addition to these instances of Human rights violations, the JASC delegation was asked to give an account of personal experience with racism and race relations in both countries in a group discussion that followed a lecture by Nancy Peterson and Chester McCoy on the history of African Americans. The culmination of these lectures and group discussions were important to the Washington, D.C. site theme in that the protection of human rights proves to be a contemporary global responsibility, and the threat of violation repetition is ever upon us.

The 12 months I spent planning the 54th Japan-America Student Conference with the respective executive committees offered me tremendous growth opportunity. Although the challenge of balancing team dynamics and the rigor of schedule planning by no means proved simple, the support I received from the Japanese and American Executive Committee members and the trusting relationships I built with my fellow delegates allowed me to embrace the 54th Japan-America Student Conference as an enriching experience that will always be remembered.

Sincerely,

Hannah Peterson-McCoy
Vice-Chair

54th JASC American Executive Committee

参加者ノート

私を感じたアメリカの第一印象は、以下の三点に集約できる。全部でかい。本当に多様な人種や文化を背負った人々がいる。そして社会のインフラが圧倒的に豊かである。

ただ、豊かさもまた多様であった。ワシントンD.C.で私達の滞在したハワードは、治安が悪いといわれていた。私は、猥雑なエネルギーが満ちているという印象をもった。反対にワシントンD.C.の中心部は、こぎれいで、何もかもがばかでかく、また豊かであった。美しい公園がひろがり、自分も含めた多くの観光客がのんびりとすぎていく午後を楽しんでいた。そこには、これまた巨大なオベリスクが建っている。

オベリスクの下に立ってワシントンD.C.を展望すると、オベリスクを中心に、ジェファーソンメモリアル、ホワイトハウス、リンカーンメモリアル、連邦議事堂が、東西南北に広がっていることに気付く。そのとき私は、ワシントンD.C.が戦後世界に起こった歴史的変動の渦の中心に君臨していたことを初めて実感した。アメリカ政府の下した決定が、どれほど強いインパクトをもって戦後世界を揺るがしてきたかを、どこまでも広がるワシントンD.C.の景観を眺めながら思い巡らせていた。

日米学生会議において、世界に存在するさまざまな問題を議論した。しかし、大学のきれいな施設で、物質的に何不自由ない空間と時間の中で議論をしている自分を相対化せずに、例えば世界の貧困を語るのは偽物だと思った。世界で起きているさまざまな出来事に対する想像力を持っているのか。今の生活や、自分がしがみついている価値観の殻を打ち破る勇気があるのか。思うだけで満足するのではなく、思い続けられるか。そして思いを行動につなげる意志があるのか。そんな終わりのない問いが自分の中に渦巻いている。

森川幹人（国際基督教大学）

オーバリンサイト

サイトコーディネーター：柴田 綾沙美

Nana Uemura

● オーバリンサイト スケジュール (滞在期間：8月3日～8月8日)

- 8月3日 ワシントンD.C.から到着
- 8月4日 分科会#5
Carol Lesser氏による講演 “Underground Railroad”
レセプション
リフレクション
「映画とアニメ」スペシャルピック “Shall We ダンス?”
- 8月5日 分科会#6
ボランティアデー
「スポーツ」スペシャルピック ボーリング
- 8月6日 **Theme: Remembering World War II ~The US and Japan**
Roy Ebihara氏による講演 “Internment Camps”
Diana Roose氏による講演 “Hiroshima Bomb victims”
リフレクションミーティング
- 8月7日 分科会#7
フィールドトリップ (クリーブランド)
「映画とアニメ」スペシャルピック “もののけ姫”
- 8月8日 バークレーに向けて出発

● サイトスタッフメンバー

川良麗子、北松円香、小林悦子、柴田綾沙美*、堀抜功二、増谷康

(*はサイトコーディネーターを示す)

● オーバリンサイトの理念

当サイトのテーマは「歴史の中の、そして現代のアクティヴィズム (“Historical and Present Activism”）」である。それぞれの参加者にとっても、学生として今自分に何が出来るか、社会にどれほどの影響力を持ち得るか、というのは日々の勉学の中であって常に考えていくべき課題である。私たちの滞在したオーバリン大学は、オハイオ州北部に位置する全米屈指のリベラルアーツ・カレッジで、特に音楽専攻の充実ぶりの際立つ大学である。歴史的には、全米で女子学生を初めて受け入れ、アフリカンアメリカンの教育においても指導的役割を果たすなどリベラルな校風で知られている。また、かつてキリスト教布教のフロンティアとして優れた教師、宣教師を輩出し、19世紀半ばには奴隷制反対を大学として掲げ、黒人解放運動の中核となる人

材の育成に大きく貢献した。これら過去の活動家たちの足跡は、現在においてもキャンパス内外いたるところで見ることができる。こういった土地柄は、参加者がそれぞれにとってのアクティビズムを考えるにあたって、意義深い示唆を与えてくれたことだろう。また、参加者に比較的なじみのあるアメリカ東海岸や西海岸の都市とは異なる、緑豊かなオハイオの地にて議論を行うことで、より包括的なアメリカ理解の助けになったはずである。

地元学生に案内される参加者たち



- オーバリンサイト イベント
- Carol Lesser 氏 講演 (8月4日)

“City of Refuge: Oberlin, Ohio and the Underground Railroad”

Carol Lesser 氏には、オーバリン大学の創設と街の発展の歴史、そして黒人奴隷の解放に加わり、「地下鉄道 “Underground Railroad”」と称された活動家たちの運動についてご講演いただいた。オーバリン大学は、拡大する開拓地にキリスト教的理想郷を建設するべく宣教師たちの手で 1833 年に設立された当初から、女子学生および黒人学生を積極的に受け入れ、そして奴隷解放の急先鋒の町の象徴であった。学生、住民らによる活動「地下鉄道」の名称は、南部から逃亡奴隷をカナダへ運ぶ秘密の鉄道がオーバリンを通っている、そう噂されたことにちなむ。理想を現実のものとするために活動した宣教師と学生の篤い信仰、その理念の力強さ。活動の結晶であるオーバリン大学の「聖地」としての雰囲気。講演後、参加者が活動をイメージした線路の展示に足を止めるなど、深く印象を残す講演となった。

- ボランティアデー (8月5日)

ボランティアの諸注意を受ける
参加者たち



サイトテーマである「アクティビズム」を考える一環として、会議参加者はこの日ボランティア活動を行った。本会議はフォーマル、ビジネスカジュアル着用のイベントが多いが、この日のドレスコードは“very casual”、つまりは汚れても構わない服装である。参加者は二つの

グループに分かれ、一方はオーバリン市内のハリソン文化コミュニティセンターへ向かった。ここでは室内の壁面の掃除、建物の金属部分のペンキ塗り替え、草むしりなど、施設の維持保全作業を手伝った。他方は、プラムクリークというキャンパスのすぐ傍を流れる小川の土手で、除草作業を手伝った。これは単に景観のためだけではなく、帰化植物を取り除き、アメリカ原産の植物の成長を促すためである。除草といっても、のこぎりで切らなければならないような大きな木に成長してしまった植物も多かった。今回参加者が切り開いた土手も、一、二年で元のような帰化植物の混じった茂みになってしまうという。アクティビズムとは継続した地道な作業であると確認させられ、参加者にとってはとても有益な時間となった。

■ Remembering World War II ~The US and Japan (8月6日)

広島に原子爆弾が投下されてから 57 年目を迎えたこの日、「第二次世界大戦下のアメリカ、日本」をテーマに、広島、長崎の被爆と核兵器に関するパネル、関連文献の展示を含めた講演会が催された。史話としてあまり語られることのない、戦時下における日系アメリカ人の葛藤と苦しみ、広島、長崎の原爆を生き抜いた被爆者の痛み。「ヒロシマ・ナガサキ」は真珠湾同様、日米それぞれの解釈がすれ違いやすいテーマでもある。今回の講演は、各参加者が持つ「日本」「アメリカ」それぞれの視点を越えたところにある理解と、歴史を語る上でのより多くの視点と率直な対話を得ることの重要性、これらを認識する貴重な機会となったようである。

Roy Ebihara 氏 講演 “Internment Camps”



Ebihara 氏に質問する参加者

Ebihara 氏は日系アメリカ人の二世である。ご両親がサンタフェの鉄道建設に参画するため 1918 年に渡米。一家は第二次大戦の最中オハイオへやってきたが、真珠湾攻撃の後、反日感情の急激な高まりの中で強制収容所へ送られたという。Ebihara 氏は当時まだ幼かったが、子供ながらに感じとった当時の空気や一家それぞれの苦悩を、ときには感情的になりながらさまざまなエピソードを交えて話してくださった。

1942 年 2 月、EO9066 と呼ばれる執行書の下、日系アメリカ人は「外国人」として西海岸各地へと強制的に送られた。収容された 12 万人のうち、特に 67% を占めるアメリカ生まれの日系二世たち（平均年齢 18 歳）は、忠誠を誓ったはずの祖国からの不当な扱いを受け、日米のアイデンティティの狭間で深刻なジレンマに陥ったという。実際に氏のご兄弟も、合衆国へ忠誠を誓い続けることへ疑問を抱きつつも、自ら大統領に手紙を書き軍隊に志願した

り、憲法が保障するはずの教育を受ける権利を求めて収容所当局と渡り合ったりしたという。Ebihara氏は、より「アメリカ人」たらしとする葛藤の帰結としての文化の喪失と、一世から二世へと伝えられた「恩」「恥」といった日本人の精神にも触れつつ、人種差別に基づく人権侵害がどのような政治的局面においても暴発しない社会作りの重要性を、同時多発テロ後の急務としても訴えられた。参加者は一つ一つのエピソードに感銘を受けながらも、氏の問いかけを強い焦燥と共に受け止めていた。Ebihara氏はクリーブランドに在住し、眼科医として働く傍ら、NAACP (National Association of Colored People) など人権擁護のための活動を続けている。

Diana Rose 氏 講演 “Hiroshima A-Bomb victims”



被爆者の実態について
講演する Rose 氏

Rose氏は広島、長崎における被爆者への数々のインタビューを実施し、全米で数々の講演を行っている。今回は、スライドを交えながら被爆の実態、被爆者とのインタビューの様子などをお話しいただいた。これまでヒロシマに触れる機会のなかったアメリカ側参加者はもちろん、ほぼ全員が広島を訪れた経験のある日本側参加者にとっても、被爆者それぞれの痛み、思いをまた一つ知ることは、歴史の輪郭を人間一人一人の営みの集積として具現化する貴重な機会となった。実際に、被爆者、原爆投下に関わった人を近親に持つ参加者もあり、被爆者の手による絵本や被爆地の写真集、パネル等を見ながら、広島訪問や自分の受けてきた歴史教育、伝え聞いた体験などについて語り合う姿が講演後も多く見られたのが印象的であった。

■ クリーブランド フィールドトリップ (8月7日)

クリーブランドは、五大湖の一つエリー湖に面し、空と湖、そしてオフィスビル群の織り成すコントラストが美しい、アメリカ中西部を代表する大都市の一つである。

オーバリンからバスで一時間。抜けるような青空の下で、参加者はダウンタウン、美術館や博物館が集まるユニバーシティサークルへ向かう二組に分かれてフィールドトリップを行った。ダウンタウンでは、エリー湖の壮大な景観と中心部の洗練された街並み、そしてロックの殿堂をテーマにした博物館である「ロックンロールミュージアム」を見学した。ユニバーシティサークルでは、古今東西の美術を網羅するクリーブランド美術館など、コレクションの充実ぶりが際立つ美術館群をそれぞれ観賞した。幾人かは地元のスタジアムでメジャーリーグを観戦。本場のナイターの臨場感溢れる雰囲気を楽しんでいた。

サイトコーディネーター後記

“To the 53rd and 54th Delegates of the Japan-America Student Conference”

When I was running for the 54th AEC during the 53rd JASC, never in my right mind did I ever think to get elected, but never thought about the possibility of being an Oberlin site coordinator. At the time, I was only interested in the possibilities the conference offered to me, not what I could offer to the conference; my head was filled with thoughts of working and seeing again at least 15 of the wonderful people I met at the 53rd conference, but to travel around the U.S. as well as relive the amazing experience I had during the 53rd JASC. It was also an opportunity for me to start over anew; at the end of the 53rd I felt that I still had more of myself to contribute, that I didn't make the kinds of friendships or connections that I had hoped. Those were the thoughts that filled my head as I was running for AEC. When the moment of truth came and I found myself on the list of the newly elected committee members, never in my naiveté did I realize the arduous path that I was to follow for the upcoming year. As the newly elected 16 met, the excitement was uncontainable in all of our faces. When we ended our meeting with the signing of the Tokyo Agreement, we felt confident in ourselves, as well as the success of the 54th conference. Little did we know that we would come to many roadblocks during our yearlong ordeal together; the first problem was the sites we had decided upon as a collective.

The intended sites for the 54th were Washington D.C., New Orleans, Seattle, and Guam. Immediately upon our arrival to the United States, we were informed that those sites were not possible, that the JASC Inc. office did the negotiations with the sites, leaving us virtually helpless in deciding where we wanted our conference to be held. When Oberlin was one of the candidates for a site, my jaw dropped to the floor; never was this a possibility I had entertained. When Oberlin College was confirmed as a site a couple of weeks later, I was at a loss for where to begin. I knew historically that Oberlin was a place of great historical importance; the problem was how I was going to relate that in a U.S.-Japan related context. The simple answer to the question is that I couldn't. But was that even an issue? Although it is true that Oberlin has low ties with Japan, that fact alone does not deem Oberlin useless or unimportant when looking at America and its vast mosaic of different regions, cultures, and geographies. While big cities are important sites to visit, not every place in America is like that; in fact, the majority of America is rural and not the bustling metropolis that media often depicts. There is validity in visiting a major city as there is validity in visiting a small town like Oberlin; therefore my goal for the site was to educate the delegates on the importance Oberlin in a historical context that most Japanese and Americans would overlook. Because the theme of the conference was Contemporary Social Issues, I coordinated the Oberlin site to be closely associated with the general conference theme: Historical and Present Day Social Activism. I knew the Underground Railroad was significant to Oberlin; many monuments around campus were dedicated to the brave citizens who fought for the abolishment of slavery, and there was a popular course taught at Oberlin called “Oberlin History as American History.” For present day activism, I knew that a Community Service project would be ideal to break up the flow of constant lectures and table sessions. It was also a way to be pro-active in one's learning, and see with one's own eyes what a difference they can make in their surrounding community by the giving of a little time and energy. We were also scheduled to be in Oberlin during August 6th, an important day in Japan-U.S. relations: the dropping of the atomic bomb on Hiroshima. I seized this opportunity to incorporate a dialogue on World War II by having two different views on the war. The first perspective was from a uniquely American experience: a verbal history of the war from an interment camp survivor. The other perspective stems from another personal narrative, but from a scholar's point of view: interviews of the Hibakusha, also known as the victims of the atomic bomb. Although impossible to fit all different perspectives from the war into one day, my hope was to start a dialogue about the war and have the discussions and cultural exchange that the conference is so known for.

Whether or not my hopes for the site were fulfilled I will never know. I think at times I was frustrated that many of the delegates were caught up in the “subjectivity” of the events rather than seeing the whole picture. One must be aware that any presentation or lecture has its limits, and not every point of view can be acknowledged and accounted for in a realistic scenario. Therefore it is up to the individual to come up with one's own conclusions about the complex nature of history, and I had hoped that hearing first hand about interment camp survival, Hiroshima, the Underground Railroad, and performing volunteerism would be used as a stepping stone, a foundation for further discussion and learning. The intentions of the 54th Executive Committee were not to offer the whole and unbiased truth. After all, that

would be impossible, if not unreasonable; therefore there was considerable anger when a certain member of the delegation during an election speech dismissed the interment camp survivor's story as a "stupid fool's tale." Just because this man's story was "biased," does that mean that we should shut ourselves from hearing about the harsh realities of war? I think not.

Despite these strong feelings that I still have, I and the 54th Executive Committee are extremely satisfied with our involvement in the planning of the 54th JASC. This experience will be without a doubt one of the highlights in my college career, and I have a greater appreciation for the Executive Committee members of the 53rd JASC, whose hard work went unnoticed and taken for granted from former delegates like myself. To them, I extend my belated gratitude and deepest apologies for not relating this sooner, and I would like to thank the 54th JASC delegates for letting me learn so much about you, as individual delegates, as well as allowing me to have a deeper understanding of myself.

With love,
Nana Uemura
Oberlin Site Coordinator
54th JASC American Executive Committee

サイトコーディネーター後記

私たち実行委員は一年弱かけてこの夏の会議の準備をしてきた。その過程で、さまざまな人に出会い、日米学生会議に対するさまざまな思いを受け取ってきた。本会議は、私たちの活動のメインであり、努力が実る場所であり、受け取ってきた思いや力を実現する場所であったはずだった。しかし、私は初めの一週間ほど、全くそれを実感することができなかった。昨年、参加者として日米学生会議に参加したときは、周りの人たちに圧倒されながらも、必死でついていけばよかった。しかし今年は、他の人についていくのではなく、実行委員として自ら動いていかねばならない立場にいた。異国の地、言語の壁、情報の差…。自分自身が何をすればいいのか、何をしなければならないのか、そして何ができるのか、大変なストレスを抱えながら働いている他の実行委員に対しての罪悪感を覚えながら、手探りの毎日であった。D.C.に滞在しているときから、オーバリンに早く行きたいと思っていた。そこでなら自分の役割はきちんとセッティングされている、そういう思いがあった。オーバリンで、できたのは事務作業のみだったが、「何を自分ではできるのか」という問いからは逃げることはできた。今思い返してみると、オーバリンでの環境が明るく感じたのは、D.C.滞在中に抱えていたもやもやからしばらくは解放されるという思いがあったからかもしれない。

しかし、それは裏を返せば、仕事を与えられていなければ、何もできないということだった。オーバリンを出発した後、それに気づき愕然とした。会議の運営をするべき実行委員として、アメリカに来たはずであるのに、何もできなかった。一カ月間その思いに苛まされた。あの悔しさ、挫折感を忘れることはないだろうと思う。自分の中で、何かを成し遂げたと思えたとき、そしてこの夏の挫折を乗り越えることができたとき、もう一度54回会議の足取りをたどってみたいと思う。

柴田綾沙美（慶應義塾大学）
第54回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員

バークレーサイト

サイトコーディネーター：喜多洋輔、松岡洋平

Amy Jones

● バークレーサイトスケジュール (滞在期間：8月8日～8月12日)

- 8月8日 オーバリンより到着
 キャンパスツアー
 市民運動について映画 上映
- 8月9日 分科会#8
 パネルディスカッション
 “Social Transformation in the 60s and 70s in Berkeley and Japan”
 ウェルカムレセプション(ホスト：バークレー市長 Shirley Dean)市役所訪問
- 8月10日 フィールドトリップ (サンフランシスコ)
- 8月11日 分科会#9
 フォーラム準備 開始
 Performance Arts ST
- 8月12日 サンディエゴへ出発

● サイトスタッフメンバー

伊藤志織、大塚絵美、喜多洋輔*、鹿谷幸史、高橋泰美、乗竹亮治、松岡洋平*、山田哲平
(*はサイトコーディネーターを示す)

● バークレーサイトの理念

バークレーサイトでは「社会変革」というテーマを掲げた。1964年、政治活動を禁止する大学当局の方針に反抗して〈言論の自由運動 Free Speech Movement〉を開始したカリフォルニア大学バークレーキャンパスは全米に大学紛争を波及させる発端となった。またサンフランシスコ湾周辺地域はベトナム反戦やヒッピー文化などの中心地ともなり「ニューエイジムーブメント」の盛んな気風を備えている。多民族国家アメリカを象徴するようにアジア系、ヒスパニック系の住民も多く、さまざまな文化の混在する中で議論することで多様な視点の獲得を目指した。

またバークレー校は9校あるカリフォルニア大学の中でも最も歴史が古く、政治経済、医療、IT、英文学をはじめ多くの分野で世界の研究をリードするアメリカの先進性を垣間見ることができる。大学に限らず環境問題やバイオサイエンスなどで先進的な取り組みをしている自治体や企業も多く、多くの分科会がフィールドトリップを行った。

常に社会問題に向き合い独自の姿勢を貫いてきたバークレーに触れ、多様性と先進性という二つの特質を持つバークレーがいかに社会変革を引き起こしてきたかを理解することで、現代

に生きる私たち学生にとっても社会に働きかけていくことの重要性と可能性を再認識するきっかけになった。

● バークレーサイトイベント

■ “Social Transformation in the 60s and 70s in Berkeley and Japan” (8月9日)

パネルディスカッション

サイトテーマである「社会変革」に基づき、多様なゲストを招いての1960年代、1970年代の学生運動、市民運動と今日の社会への影響についてのパネルディスカッションを行った。非営利団体と社会運動の相違から日本、アメリカにおける市民社会について Dr. Steven K. Vogel、日本とアメリカの学生運動の起源と発展について Dr. Peter Duus、60年代から現在までの文化的変化について Dr. Mariam Sas、とそれぞれの講演を聞くことができた。

アメリカの地で日本の学生運動の講演を聞くことはある種不思議な体験であったが、60年代から70年代における日本の学生運動とバークレーに代表されるアメリカの学生運動の共通点と相違点、演劇からストリートパフォーマンスと多岐に渡る表現とそれを許容する自由な社会環境、そして日米両社会の差異を作り出す社会背景、歴史的文脈などについて認識を深めることができた。

アメリカの学生運動について語る

Duus 氏



■ ウェルカムレセプション (8月9日)

ウェルカムレセプションではバークレー市役所を訪問し、バークレー市長 Shirley Dean の歓待を受けた。市長はテロ報復に反対したバークレー市議会の対応について熱弁され、また環境問題に先進的に取り組むバークレーにふさわしく、市役所自体も太陽発電や省エネシステムなどを駆使した最先端の管理システムであることを説明してくださった。

このレセプションにはサンフランシスコに在住している OB、OG も多く駆けつけ、シリコンバレーで起業した方や、日米の企業を仲介し、日本の技術をシリコンバレーで起業させる事業を行っている方もおられ、ビジネス面での日本との深い結びつきも実感することができた。その席でお聞きした「信頼関係が人脈を作り、人脈が信頼関係を作る」という言葉は国籍や言語を超えてもなお共有されるものだと感じた。優秀な人材の集積地だからこそ実績が信頼関係の第一条件であるということも非常に勉強になった。ビジネスだけでなく自治体も含めた市全体の空気にアメリカという国家のエネルギーと可能性を感じた。

● サンフランシスコ（8月10日）

終日自由となったこの日は各自が思い思いに行動計画を立て、心身ともにリフレッシュした。世界でも有数の知の拠点スタンフォード大学に赴きアカデミックな空気に触れた参加者や、映画「The Rock」でも有名なアルカトラズ島を回るクルーズに参加した参加者、またはレンタサイクルを利用しゴールデンゲートブリッジを渡る参加者もいた。中にはメジャーリーグ屈指の人気球団ジャイアンツのホームゲームを観戦、人気打者の敬遠に容赦なく相手球団にあびせられるブーイングに興奮し、自らもその輪に加わっていた参加者もいた。

チャイナタウンをはじめとする外国人街に向かう参加者も多く、通りを一つ挟んだだけでその様相を一変させる市街を間近に見てその多様性を実感していた。産業都市でありながら観光都市としても名高いサンフランシスコ。ショッピング、グルメ、そしてレジャーなど、サンフランシスコを満喫した。

● Performance Arts ST（8月11日）

ワシントンサイトに引き続き、参加者がさまざまなパフォーマンスを披露した。激しい動きのジャズダンス、和服に扇子という本格的な日本舞踊に加え、パークレーということで日本でも学生運動が盛んだった頃のフォークソングをアカペラで歌うなどオリジナリティあふれるパフォーマンスが繰り広げられた。特にグアムの民族舞踊は民族衣装に身を包んでのものだっただけに大いに盛り上がり、グアム舞踊に挑戦する参加者も見られた。

日本舞踊を披露する日本側参加者



サンディエゴサイト

サイトコーディネーター：古川敏明

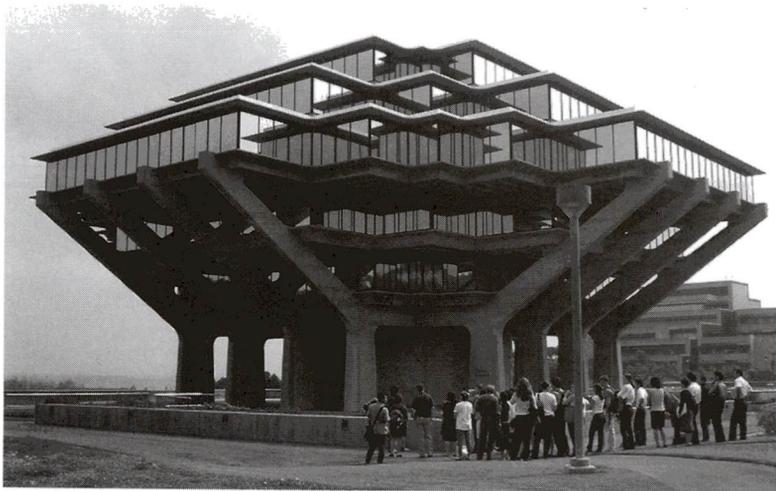
Liv Coleman, Lourdes Rivera

● サンディエゴサイトスケジュール（滞在期間：8月12日～8月21日）

- | | |
|-------|--|
| 8月12日 | パークレーより到着
「テロリズム」スペシャルトピック |
| 8月13日 | ウェルカムレセプション
パネルディスカッション |
| 8月14日 | フィールドトリップ
分科会#10
「民俗工芸」スペシャルトピック |
| 8月15日 | 分科会#11
フォーラム準備 |
| 8月16日 | 分科会#12
フォーラム準備、リハーサル |
| 8月17日 | フォーラム |
| 8月18日 | ホームステイ |
| 8月19日 | 新実行委員選挙
自由／新実行委員ミーティング |
| 8月20日 | 自由／新実行委員ミーティング |
| 8月21日 | 日本側参加者帰国 |

● サイトスタッフメンバー

石さゆり、大藪真紀、富田美緒、西納由紀、服部高明、古川敏明*、森川幹人
（*はサイトコーディネーターを示す）



近代建築としても有名な UCSD
の総合図書館の前にて

● サンディエゴサイトの理念

サンディエゴサイトでは、「文化的多様性」をキーワードに、プログラムの内容が企画された。アメリカ大陸を横断して行く中で、アメリカの多様な人口構成を目の当たりにしてきたが、メキシコと国境を接するサンディエゴは、特にヒスパニック系住民の割合が高く、これまでの三都市とはまた違った人口構成を見ることができた。

アメリカ全体では6番目に大きいカリフォルニア州第二の都市サンディエゴは、生物医学や通信を主要な産業とし、IT産業でも急速な成長を遂げている。また、米軍最大の海軍基地の存在もサンディエゴの経済に大きな影響を及ぼしている。さらに、海洋学や生物学の分野では、世界的に有名な研究機関を有し、今回ホスト校として我々を受け入れてくれるカリフォルニア大学サンディエゴ校も著名な科学者を多く輩出していることで知られる。

最終サイトであるサンディエゴでのメインイベントは、一ヵ月間にわたる本会議の成果を社会に向けて発信していくことを目的としたフォーラムであるが、それと同時に、日米両国の参加者が、日本とアメリカ、さらには参加者間における価値観の多様性を認め、互いの友情を確認することができるような場所の創造を目指した。

海辺でのレセプションにて



● フォーラムまでの活動

■ テロリズム ST (8月12日)

この ST は今回の日米学生会議が、2001年に起こったアメリカ同時多発テロ事件以来、初めての会議であることをふまえて立ち上げられた。グループディスカッションの形式で、事件当日をどこでどのように迎え、事件を知って、何を思い、どう行動したのか、一人一人が個人的な体験を語った。特にアメリカ側には、同時多発テロ事件をニューヨークやワシントン D.C. という現場で経験した参加者が何人か存在し、事件を直接体験した人間が記憶をたどりながら語る姿は、聞く者の心に深く響いた。分かち合いのときは10分、20分と延長を重ね、テロ事件発生の背景要因やテロ根絶のために日米が果たしうる役割などについても議論が及んだ。

■ パネルディスカッション (8月13日)



パネルディスカッションの風景

Moderator: Professor Stefan Tanaka, University of California San Diego

Tanaka 教授は参加者へ向けて、グローバル化する社会の中で文化が果たす役割はあるかと問題提起した。その上で、国際化とグローバル化の違いに触れ、グローバル化は国家の溶解ではなく組織の重層化であり、グローバル化の中では文化とはもはや地理的な要因のみでは成立しないという見解を示した。

Panel 1: Professor Ellis Krauss, University of California San Diego

Krauss 教授は文化のネガティブな面について前置きをした上で、日米の差異を「文化」の差として説明する傾向があると指摘した。しかし文化は「なぜ違うのか」という説明にはならず、またある社会変化を「文化」で説明することはできない。また、アメリカと比較すれば日本は異質な「文化」を持っているのかもしれないが、ヨーロッパのような第三の比較対象を持ち込むと、逆にアメリカが異質になるといったように、社会の相対的比較に「文化」を用いることは限界があると指摘した。

Panel 2: Professor Peter Nosco (JASC 23, 24, and NAC), University of Southern California

Nosco 教授はポーランド系アメリカ人一世の両親に薦められ他の国、民族の文化を学ぶようになった経験について話された。その経験が、教授に自文化ではなく、他文化を学ぶことの重要性や意義を気づかせたという。他文化を学ぶことは自文化を知ること、あるいは自文化を相対化することへつながり、他の人々の文化を学ぶことは同時に自分のアイデンティティを確認する作業でもあると述べた。今後グローバル化する世界において、他文化を学ぶことの重要性は増すだろうと予測して Nosco 教授のスピーチは終わった。

Panel 3: Professor Robert Uriu (JASC 34), University of California at Irvine

Uriu 教授は、文化を本質的な説明項として使うことの弊害について語った。Uriu 教授によれば、文化を動かしがたい伝統あるいは本質として理解し、それを他のさまざまな事象を説明する際のファクターとすることは、間違っただけを生み出すのだという。このことの例として、日米貿易摩擦が挙げられた。アメリカ政府内で、日本の市場が開放的にならないのは日本の文化が「本質的に」閉鎖的であることに起因するとしてグループが有力となった。これが日本の市場についての間違っただけにつながり、対立につながってしまったのである。Uriu 教授は文化について研究し、説明することを否定しているのではない。ある事象を説明する際に、説明しきれない部分を本質的な文化という外部項によって説明することは、説明したことにならないというのが Uriu 教授の主張の骨子である。

■ フィールドトリップ (8月14日)

UCSD に到着後すぐに一日分の自由時間があり、各参加者はサンディエゴ各地に繰り出していった。ビーチやパラセーリング、サーフィンに買い物とそれぞれのサンディエゴを満喫した1日であった。

スカイセーリングを
体験した参加者



■ 民俗工芸スペシャルピック (8月14日)

「日本文化を体験しよう」とのテーマのもと、綾取り、竹とんぼ、書道そして浴衣の着付けなど、日本の伝統文化に日米両参加者がチャレンジした。どの参加者も童心に帰り、ときが経つのも忘れるくらいに日本文化に浸った時間であった。

■ フォーラム準備 (8月15、16日)

一カ月間の成果を発表するフォーラムのため、各分科会ごとに総括的議論が長時間にわたって行われた。リハーサルも催され、プレゼンテーション資料の作成や、本会議中の活動の記録を

まとめたパネル作りなど、作業は深夜にまで及んだ。

● フォーラム後の活動

■ ホームステイ (8月17、18、19日)

Japan Society の協力により会議参加者は2泊3日のホームステイを行った。忙しい本会議の毎日を離れ、ホストファミリーと各自がゆったりとした時間を楽しんだ。アメリカの多様な家庭風景を垣間見る貴重な体験をした。



ホームステイ先の家族と

■ 新実行委員選挙 (8月19日)

新実行委員選挙は、来年の第55回日米学生会議発足への第一段階である。日米両参加者から推薦を受け付けた後、候補者を絞り込み、最終的には参加者全員による投票をもって新実行委員が選出された。日米合わせて16名の新実行委員が誕生し、第55回日米学生会議は記念すべき第一歩を踏み出した。

参加者に向けスピーチする
候補者



■ 新実行委員ミーティング (8月19、20日)

選出された新実行委員16名は第55回日米学生会議の骨格を決定すべく、活発な議論を重ねた。来年夏の本会議開催前に、日米両国の実行委員が全員集う唯一の機会であるため、熱気を

帯びた話し合いが深夜まで続いた。

● メキシコフィールドトリップ (8月20日)

会議終了前日、メキシコのティファナへ希望者はフィールドトリップを行った。バスと電車とを乗り継ぐこと一時間半ほどで国境に到着。招待されたセティス大学ではメキシコの大学教育について興味深いお話を伺った。乾燥したメキシコの大地が印象的であった。



メキシコ国境の民族土産屋

● クロージングセレモニー (8月20日)

本会議最後のイベントとなったクロージングセレモニーでは、第55回会議実行委員会から第54回会議実行委員会への歌と手紙のプレゼントを幕開けとして、さまざまな企画が用意されていた。第54回会議を運営、企画した実行委員会から、参加者への感謝状の贈呈や各参加者の思いを交換した手帳交換など、参加者にとっては忘れられない素晴らしい時間となった。

55回実行委員から54回実行委員へ
手紙が渡される瞬間



● 日本側参加者帰国 (8月21日)

ついに別れのときである。日本側参加者は朝のフライトで日本に帰国するため、アメリカ側参加者よりも一足早く、帰る準備をしなければならなかった。早朝、大学寮から空港に向かうバスを前に、会議参加者たちは別れを惜しみながら、最後の会話を交わした。一ヶ月に及んだ第54回日米学生会議は、ここに幕を閉じた。

参加者ノート

「会議創設のために最初に太平洋を渡ったのは日本側だったはずだ。」

アメリカ側参加者の一人が苛立ちに顔を紅潮させながら言った。次期実行委員選挙。十分な候補者を出していたアメリカ側に対し、日本側は定員さえ割り込み、朝から始まったミーティングは午後になって膠着状態に陥っていた。

「信じられない。」

創設時の精神はどこにいつてしまったのか。憤りを隠さないその言葉を受け止めながらも日本側参加者はなお沈黙していた。理由は分かっている。この異常事態でさえ、実行委員を含めた日本側参加者にとって全く思いもかけないことではなかった。「会議の休止もあり得る」誰かのそんな言葉が、私の中でも焦燥と共に現実味を帯び始めていた。

5月の春合宿以来、日米学生会議の存在意義は常に参加者の中で議論的だった。相互理解、そして個々人の成長。それだけに留まらない社会へのフィードバック。この会議でしかなしえない貢献のあり方。議論の中でさまざまなアイデアが浮かんで消えていった。「会議ありき」の体質それ自体が、会議の実体から、創設時の理念「世界の平和は太平洋にあり」を乖離させてしまっている。このことは、本会議の日程が進むにつれ、参加者のうちで決定的になっていたように思える。日米交互開催、四都市訪問といった本会議のフォーマットそれ自体の意義を問い直す必要はないのか。フォーラム直前には、何を指して作業しているのか判然としない参加者も少なくなかった。次回開催それ自体の是非を問わないままに、実行委員としての責任を背負うことはできない。日本側の苦しい沈黙のうちには、三ヶ月間の苦悩がそのままにじみ出ていた。

長い長い沈思の後に、なぜ彼らが自らを舞台に押し上げることを決意したのか、それは、なぜ日米学生会議の次回開催が最終的に支持されたのか、という問いに対する答えそのものでもある。次期実行委員となる彼らが、会議の意義を唐突に見出し得たわけでないことは彼ら自身がそう宣言している。ではなぜ。これについては私個人としても興味は尽きない。だが一方で、「休止もやむなし」と考えていたはずの私の中でさえ、このとき徐々に次回開催への希望が湧いてきていたことは、今振り返っても全く唐突としか言いようがない。なぜか。理由はまったく個人的で他愛もない。ただ、私の信頼する友人たちが作り上げる、新しいもうひとつの日米学生会議を見てみたくなってしまう。それのみである。

結果的に、あの場の沈思と議論からは、会議自体の意義を彫り出すことはできなかった。このことがときに彼らを再び長い長い沈黙に落とし込むだろう。それでもそこに会議がある限り、問い直しの作業は終わらない。新たな実行委員が問い直しをやめない限り、会議はそこにあり続ける。そして、私は彼らがその作業を決してやめないであろうこともまた知っている。

川良麗子（早稲田大学）

サイトコーディネーター後記

Accepting the role of a JASC Executive Committee member is a challenging responsibility, especially if you are a site coordinator. While all committee members (from the American and Japanese Executive Committees) willingly contribute to the overall preparation and implementation of the conference, nothing is more demanding than the coordination of a particular site. Prior to the conference, site coordinators are solely responsible for the coordination of food and lodging, on-site and off-site transportation, delegate recreation and entertainment options, hour-by-hour scheduling, formal and informal receptions, table meeting room locations, guest speakers and panel lecturers, field trips, etc. During the conference, they are still planning site events, making modifications to accommodate schedule changes, and confirming activities and speakers. The role of site coordinator is an extremely strenuous and highly proactive role.

This year, the 54th JASC culminated at the University of California, San Diego (August 12 – August 21), where the conference theme was “Cultural Diversity.” As site coordinator, I tried to schedule events that tied into the theme. The first major events occurred on August 13th: the Welcome Luncheon and Discussion Panel. The discussion panel focused on cultural diversity and its implications for the future, in terms of economics, politics, and mutual understanding. Another event that related to cultural diversity was the homestay program from August 17-19. On this program, delegates were exposed to the diversity of American lifestyle and culture. In addition, delegates were able to go to Mexico for a day (August 20). Some delegates had the opportunity to go to CETYS University, while other delegates got to go shopping around Tijuana. The above events went fairly well, in terms of planning; I was fortunate enough to work with helpful colleagues.

The event that posed the greatest challenge for me was the JASC Forum. It was particularly important because it symbolized the formal closure of JASC. Furthermore, it's the single most important event that justifies the integrity of JASC. In coordinating this event, I felt completely overwhelmed. However with the help of Forum coordinators Yuki Nakagawa and Hannah Peterson-McCoy, we were able to pull off a forum that initiated the usage of poster boards and visuals, complementary video segments of JASC, and a mock “Jeopardy” game show during intercession. It was quite successful, despite our low audience turnout.

Throughout the conference, I was faced with many obstacles that I successfully overcame. Many times, there would be changes in the schedule or unexpected events would arise. Nevertheless, I am pretty proud of myself for dealing with them. Quite a few times, I was disappointed with myself for the occasions that didn't exactly go according to plan. Despite the negativism, I believe the delegates were fairly pleased... As a site coordinator, I've come to realize that disappointments are inevitable, but you should always view disappointments as a temporary episode. Things will work on their own way. There are subsequent events to keep in mind. If a site coordinator worries about “what I should have done,” rather than “what should I be doing next,” then there is bound to trouble... In conclusion, as a person, I have realized that if I could properly coordinate a JASC site, I could master anything!

Lourdes Jeanette Rivera
San Diego Site Coordinator
54th JASC American Executive Committee

The 54th Japan-America Student Conference Final Forum

2002年8月17日 サンディエゴフォーラム

Final Forum (12:00 ~ 2:00)

1. Introduction (イントロダクション)
2. Four Table Presentations (分科会発表)
3. Quiz (クイズ)
4. Four Table Presentations (分科会発表)
5. Conference Conclusion: Slide Show
(会議総括：スライドショー)



分科会発表の様子

日米の実行委員会



Reception (2:00 ~ 4:00)

第54回日米学生会議は『現代の社会問題における日米の役割を問い直す』との総合テーマ、そして理念『相互理解、「力」の獲得、そして前進』を掲げ、約一ヵ月の間、ワシントンD.C.、オーバリン、バークレー、サンディエゴの各サイトを巡り、各地におけるさまざまなイベントやそれぞれの分科会において議論、交流を重ねてきた。その成果を社会に発信し、意義を再確認する場としてこのサンディエゴフォーラムを開催した。第一部において各分科会は、これまでの議論を踏まえ、学生としての柔軟で新鮮な視点を活かし、その成果をプレゼンテーションや提言の形で発表した。また、分科会発表の合間には、来場者を壇上に招いて日米関係に関連したクイズを行い、会場を沸かせる工夫も凝らした。第二部では、分科会のアカデミックな成果には集約しきれない日米学生会議の意義を伝えるために、一ヵ月間の共同生活の中で行われた学生の交流、相互理解の様子をまとめたスライドを上映し、会議の総括とした。第二部に続いて催されたレセプションでは、Japan Society of San Diego and TijuanaのPatrick Graupp氏、カリフォルニア大学サンディエゴ校Stefan Tanaka氏のスピーチを頂戴した。

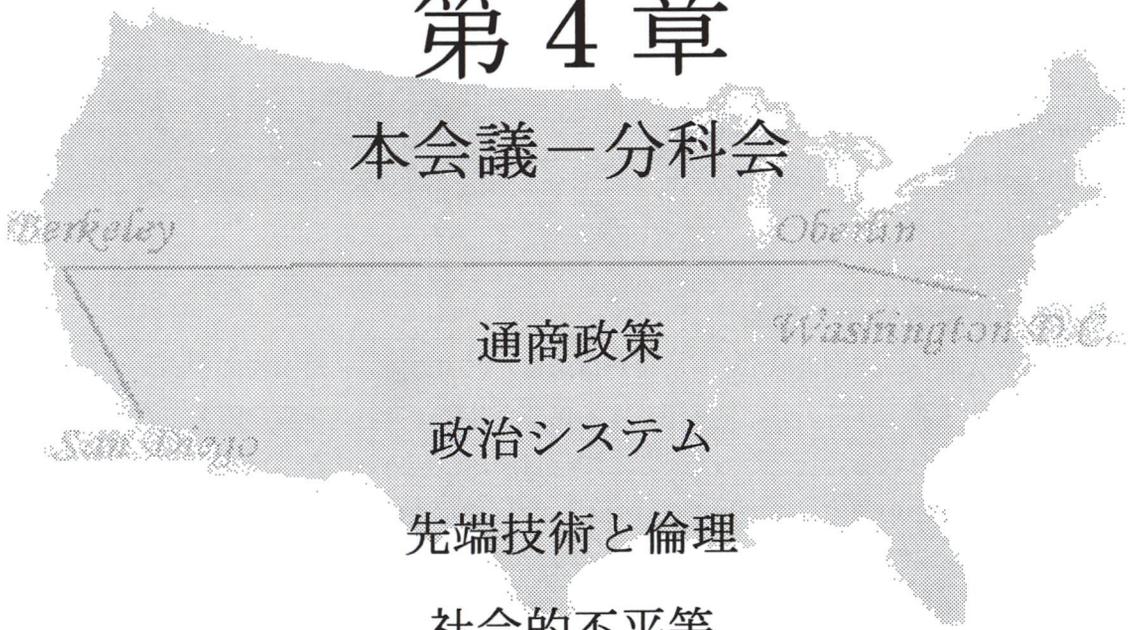
分科会発表パネルを見る参加者たち



青空の下で
歓談する参加者たち

第4章

本会議一分科会



通商政策

政治システム

先端技術と倫理

社会的不平等

宗教とアイデンティティ

多文化社会における教育

創造的表現から探る歴史認識

環境問題

通商政策

Trade Policy

● 分科会メンバー

秋山洋児* (立命館大学国際関係学部)

石さゆり (東京大学教養学部)

佐藤陽一郎 (早稲田大学法学部)

福田潤一 (東京大学大学院総合文化研究科)

Pamela Gard (University of Washington)

Max Homerding (University of Central Oklahoma)

Sophia Kan* (University of Washington)

Benjamin Larson (University of Washington)

Alexandru Luta (Occidental University)

(*はコーディネーターを示す)



● テーブル設置当初の目的

第二次世界大戦後、西側世界がとってきた自由貿易志向の通商政策が転機を迎えている。理想に掲げる自由主義と、その影に見え隠れする保護主義的政策との矛盾が顕著となり、通商システムの改編が迫られることとなった。ここで注目を浴び始めたのが「地域主義」である。日米を含めたいくつかの国家はこの形態に注目し、今日では EU、NAFTA、ASEAN のような政治的、経済的な地域取り決めも誕生している。ではこの新しい概念「地域主義」とは何なのか。当分科会では環境問題や貿易不均衡、規制緩和、中国の WTO 加盟といった現在議論されている事象に注目しながら、21 世紀における「地域主義」の可能性を探っていく。

● 実施研修

◆ フィールドトリップ：商務省

通商テーブルでは議論するだけでなく実際にアメリカにおいて日本との通商交渉などを担当している現場を訪問することが重要であると考え、ワシントン D.C.においてアメリカ商務省の日本担当デスクを訪問し、組織の概要や現在の通商関係の問題点、将来へ向けての日米共通の取り組みなどについてお話を伺った。とりわけ日本市場の閉鎖性がアメリカにおいて問題視されていることが指摘され、日米共同で規制緩和の取り組みが行われていることが紹介された。

● フォーラム

地域主義とはある特定の国々が政治、経済、とりわけ地域貿易の観点から共通のネットワークの中に統合されていく現象を指す。地域主義は包括的にも排他的にもなり得るが、その効果の測定は極めて難しい。というのは、それは貿易自由化とグローバリゼーションを促進もし、同時に阻みもするからである。当分科会ではまず EU、NAFTA、APEC の地域主義の「度合い」について大まかな測定を行った。それによると、EU は最も制度化が進み統合の度合いの高い

地域主義として位置付けられる。次に NAFTA であるが、この地域は制度化は進んでいるが、政治的統合の意思はないという観点から、中間の統合度合いと位置付けられる。最後に APEC であるが、この地域は最も統合の度合いの低い地域として位置付けられよう。

次に私たちが行ったのは、地域主義によってもたらされる経済上の変化の指摘である。まず、経済統合を行うことによって経済的に遅れた地域、国家の近代化、産業化が進展する可能性が指摘できる。これは域内の分業化が進むことで、地域の市場競争力が高まる必然の結果である。次に、規模の経済と技術の共有が進む結果として、国家がそれまで参入できなかった領域にも参入できるようになるという利点がある。地域主義は地域の経済的効率性を向上させ、域内企業の国際競争力の強化につながるのである。関税引き下げに関しては、地域主義は WTO で行われるよりも早いスピードで自由化を実現することが可能であり、自由貿易の促進に貢献するという側面を持つ。しかしこれはマイナス面と表裏一体であり、すなわち、それは同時に排他的な貿易障壁の設定をも意味し得る。経済統合が進めば進むほど、域内では貿易が促進されるが、域外では貿易転換が起こる可能性が高くなる。地域主義の問題点は、まさにこの自由貿易の促進につながるが排他性も高まるというジレンマにあるといえよう。

最後に、私たちは地域主義のもたらす政治的な効果について、特に日米関係に焦点を合わせて議論した。日米間には日米安全保障条約という形で同盟関係が存在しているが、この同盟関係は将来の通商政策の選択によっては、ネガティブな影響を受ける可能性がある。すなわち、アメリカはこれまで自由貿易の擁護者として日本へ市場を開放し、日本も原則自由貿易の姿勢を保ってきたが、NAFTA の発足に見られたように今後アメリカが地域主義へと大きく舵を切るならば、日本も地域主義へと政策を変更せざるを得ず、その結果、日米に経済関係と安全保障関係の振れが生まれかねないのである。それゆえ、もし日本が地域主義へとスタンスを転じるのであれば、その転換は慎重に行うべきであるというのが私たちの結論であった。

● 総括

本年度の通商政策分科会では、グローバル化が進む国際経済の中でアメリカが従来の政策を転換し、自由貿易主義から限定的な地域主義へと移行したのか否かが主なテーマとなった。これに伴い、議題も APEC や NAFTA を巡る日米の通商政策の様相などを中心とする限定的なものに制約されたが、それだけに方向性のある議論が可能になったように思う。

成果として、私たちは通商政策において日米関係を規定する一つの将来図を得ることができた。開放経済と地域主義の二つの戦略の選択次第で、日米関係は通商のみならず、防衛、安全保障の問題においても影響を受ける旨の理解が得られた。地域主義の制御は結局、各々の国家が責任をもって行わねばならないであろう。

他方で、日米の参加者間で十分な対話と意見の交換が成立していたと断言はできない。多くの誤解や進行上の対立、意見の不一致やコミュニケーション上の問題が発生した。相互理解の「理解」とは結局、真の相互理解が如何に困難であるかの「理解」に他ならないのだという事実を実感した。外交関係としての日米関係も、おそらくはこの延長であろう。

政治システム

Political Systems

● 分科会メンバー

鹿谷幸史 (東京大学法学部)

中川由紀* (一橋大学法学部)

藤田葵 (東京大学教養学部文科三類)

宮下紘 (一橋大学法学研究科)

Michael Baik (University of Texas)

Liv Coleman* (University of Wisconsin)

Hana Heineken (Princeton University)

Andrea Viski (Georgetown University)

Thomas West (Johns Hopkins University)

(*はコーディネーターを示す)



● テーブル設置当初の目的

日米双方で生じる政策決定をめぐるさまざまなトピックを日米関係の政治的枠組みの中で模索、分析することにより、両国内の政治システムについての理解を深め、国内システムがどのように国際関係に影響を及ぼしているかを考える。

● 実施研修

◆ 講演：国防総省インテリジェンスアナリスト **Clyde Owan** 氏

インテリジェンスアナリストの仕事内容、思考プロセスおよび、アメリカの諜報システムの現状について。9.11 事件以来、国家の諜報システムは安全保障の観点から大きく改革が検討されている。

◆ 講演：アメリカ領グアム代表下院議員 **Robert Underwood** 氏

アメリカ領だがその半植民地的性格からアメリカ国内法の制定過程に十分な参加が得られていないグアムを例に、政治における代表の問題、政治参加の不公平などアメリカの政治問題を扱った。

◆ フィールドトリップ：司法省移民局「伝統と創造」

現代の移民問題についてのパネルディスカッションを聴講。9.11 事件によりアメリカの移民問題は経済問題から安全保障問題へと転換し、受け入れ基準は厳しくなったが、国内産業の育成、維持のため移民に門戸を開くという政策の基本方針は変更がない。

◆ テーブルセッション

各回一人ないし二人の、論文執筆者による発表を基礎に議論した。発表の順に概要を示す。
“Finding a Voice: Avenues for Immigrant Integration into Politics”(Baik): 日米両国が移民政策に関して抱える問題を取り上げた。両国とも、移民に門戸を開き、その教化を積極的に行うべきだ

との主張がなされた。

“Japanese and American Responses to the ICC: A Comparative Analysis”(West):国際刑事裁判所に対する日米両国の対応の比較。国際刑事裁判所の存在意義についての議論がなされた。

“Governance and Public Management Reform”(中川):日本の行政改革をガバナンス(政府を限定的に意味する Government と異なり、政治システムとそれを取り巻くアクターを結びつけるコンセプト)改革として位置付ける必要性を主張し、行政改革先進国であるアメリカに習い民間の経営手法等を取り入れたニューパブリックマネジメントの導入を検討した。

“Reforming the Administrative Reform”(宮下):日米の行政権は、政治過程における多元主義を基礎とし、公務は特定の利益集団の反公共的な特殊権益たる「私」の駆け引きとして還元されている。公的知性の蘇生には、民主主義を陶冶すべき正統な行政権、公務の権限範囲を再定義する行政改革が必要であるとの主張に基づき、議会、官僚、利益集団の三極構造の問題点を議論した。

“Japanese Foreign Ministry Reform: What to Reform?”(藤田):外交は国民のために推進されるべきだが、現在の日本の外務省改革は、国民の支持を取り付けるというより、「外務省への関心を失わせない」という志向だけが見て取れると主張、国民に知らせるべき情報、ときには知らせずに事後説明のみをすべき状況、戦略と戦術の区別を見極めて改革を行うべきと提言した。

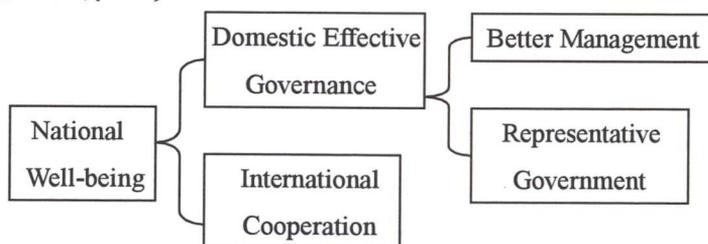
“Administrative Guidance”(鹿谷):政府内の人事システム、企業と政府の癒着が、税金の無駄使い、恣意的な行政を引き起こしたと指摘し、それを解決するために、行政指導の制限を提案。現行の日本の行政改革を評価した。

“The Japanese Constitution: Prospects of Revision”(Heineken):戦後日本政治史という歴史的観点から日本国憲法第9条改訂の是非を問うた。グローバルスタンダードおよび対外関係を鑑みれば、日本は憲法9条を改正してから次なるアクションを起こすべきだとの主張がなされた。

“Koizumi and Political Psychology: Will the Nail that Sticks Out Get Hammered Down?”(Viski):現在の日本の政治心理学的分析。行政改革の成否にかかわらず、小泉総理大臣の改革主導によって、国民の政治に対する関心が増してきたと主張。

“Clearing Away the Mists: Campaign Finance Reform in the U.S. and Japan”(Coleman):日米両国における政治不信、政治への無関心を、政治資金の観点から分析。政治スキャンダルを乗り越えて人民の支持を取り付けることが政治不信を克服する道だとの指摘がなされた。

● フォーラム



政治上のさまざまなシステムの改革はすべて「国家の幸福(National Well-being)」の追求という前提の下、政治の根底にある概念に言及しようとした。「国家の幸福」を構成するものは何かを各人の論文を基礎に上の図にまとめ、それに基づき発表を行った。

先端技術と倫理

Advanced Technology and Ethics

● 分科会メンバー

江川響子 (京都大学農学部)
喜多洋輔* (三重大学医学部)
筑紫正宏 (東京大学法学部)
山田哲平 (慶應義塾大学経済学部)
Hao-Hung Liao (New York University)
Katy Liu (New York University)
Hannah Peterson-McCoy* (Howard University)
Sachiko Tanaka (Keio University)
Rebecca Weisineger (Harvard University)

(*はコーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

人間の宿命だった、老い、病、死をバイオテクノロジーは克服しつつある。一方で、そのために受精卵などの命が実験材料にされたり、クローン技術が開発されたりするなど、今までの人々の常識を打ち破るような技術が開発されている。こういった技術の発展において、倫理はその大切な軸となる。当分科会はかつてないスピードで発展を続ける最先端技術に対して、倫理的な側面からアプローチすることを目的として設立された。

● 実施研修

◆ 講演：Steve Tsang 氏「情報革命とバイオテクノロジー革命」

情報革命とバイオ革命の概説および社会的影響の説明について、第53回の参加者で、現在国立保険局 (NIH) の研究者であるSteve Tsang氏から講義を受けた。内容そのものもさることながら、実際に研究の第一線で働く、現場の人の意見に触れられたことは、有意義であった。

◆ フィールドトリップ：国立保険局「国立保健局とアメリカの研究政策」

国立保健局の説明を受けた後、研究所内で働いている日本人研究者にインタビューを行った。アメリカの医学系の研究を一手に掌握しているNIHにおいて、私たちが学んだのは、アメリカ政府がいかに研究活動を重視しているかということだ。潤沢な予算と充実した施設だけでなく、日本人をはじめ、多くの国から研究者が集まっていることにも驚かされた。国籍に関係なく、実力によって評価する姿勢は研究者の意欲を大きく伸ばしていると感じた。

◆ フィールドトリップ：ホロコースト博物館「科学技術の負の側面」

ホロコースト博物館で私たちが特に感じたことは、ホロコーストにおいて、当時の最先端技術の影が見え隠れすることだ。大量殺戮をいかに効率的に行うかという点において技術者、科学者の果たした役割は決して無視できないものだった。人体実験や医学実験に利用された犠牲

者の方も少なくなかった。技術自体に善悪があるわけではないが、利用の仕方によって、大きな不幸をもたらすものであることを私たちは再認識することになった。

● フォーラム

先端技術における倫理的側面について概説を述べるとともに、具体的なケースとしてヒトクローンについて言及した。まず情報革命については、地理的な制約や国境を越えて、情報がいき渡るといふ側面と、経済的に恵まれない一部の人を情報からますます遠ざけていくデジタルデバイドを起こす側面を指摘した。これは貧富の差をさらに広げ、また国際的な著作権の問題をも引き起こす。バイオテクノロジーの発展は医学や生物学の発展を促し、医療技術を飛躍的に発展させる可能性がある。一方で、バイオテロや生物戦争を引き起こす技術を生み出す可能性も含んでいる。科学教育は研究活動の発展を促すだけでなく、社会への先端技術のインパクトについて、市民に知らせる役割を担っており、日米双方にとって、重要な意義を含んでいる。これらのことをふまえ、私たちは特に生殖技術と ES 細胞研究に着目し、事例として、ヒトクローンを取り上げた。生殖医療においてはクローン技術が、子供を設けたい不妊のカップルなどに彼ら自身のクローンを子供として提供している。他にも同性愛者のカップルやシングルペアレントなども利用を望んでいる。ES 細胞研究とはあらゆる細胞に発達する可能性を秘めた ES 細胞の研究であるが、この細胞を別の臓器に発達させることで、再生医療技術として利用することができる。現在は解決の難しい、パーキンソン病、アルツハイマー病、脊髄損傷などの治療に役立つと考えられている。結論として、生殖技術としてのクローンの応用は禁止すべきであると考え。ヒトの唯一性を傷つけるべきではない。国際的な規制、国内的な規制の双方をすばやく準備すべきだ。ES 細胞研究は大きな利益が得られるので、国際的な基準を作成し、研究を認めるべきだ。テクノロジーは常に発展しつづけるものであり、それ自体に善悪があるわけではないが、テクノロジーに人間がコントロールされないように、不断の注意を払い、議論を続けることが求められている。

● 論文タイトル

江川響子 “Why Science is a Matter for Debate”

喜多洋輔 “Ethical Issues on Biomedical Fields in Japan”

筑紫正宏 “The Application of Cloning Techniques to Fertility Treatment”

山田哲平 “Intellectual Property in the Digital Age”

Hao-Hung Liao “Advanced Technology and Ethics”

Katy Liu “Human Cloning: Regulate, not Ban”

Hannah Peterson-McCoy “The Implications of the Spread of Internet Technology”

Sachiko Tanaka “Nature vs. the “Designers” of the 21st Century Trend”

Rebecca Weisinger “Research Collaborations between Industry, Academia, and Government in the United States and Japan”

社会的不平等

Social Inequality

● 分科会メンバー

大藪真紀（国際基督教大学教養学部）
高沢健史（関西学院大学総合政策学部）
千代明弘*（国際基督教大学教養学部）
富田美緒（早稲田大学政治経済学部）
水本憲治（京都大学医学部）
Lindsey Gallagher (Guilford University)
Leona Middleton (Washington University at St. Louis)
Maho Saito (Smith College)
Jamie Scheppers (Northwestern University)
Nana Uemura* (Oberlin College)

(*はコーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

社会的不平等はすべての社会において不可避な問題である。しかもそれらは富める国であろうと貧しい国であろうと無差別に存在する。多くの社会的不平等は性別や民族といった人々が生まれ持った社会的属性によって発生しているが、その一方でそれらは、人々が生活している周囲の環境によっても創り出される。当分科会ではまずメンバーが日米両国に存在する不平等に関する問題を分科会で紹介し、互いに問題意識を共有しようと試みた。それを踏まえて、現代社会において埋もれがちになっている日米両国の社会的不平等に対する現実的かつ創造的な解決方法を探っていった。

● 実施研修

◆ フィールドトリップ：司法省移民局（INS）

アメリカ国境管理の役割を担い、またグリーンカードや市民権に関する事務手続を請け負うINSで、主に同時多発テロ以降の移民政策の転換について講義をしていただいた。

◆ フィールドトリップ：Urban Institute

都市問題に関するシンクタンク。アメリカにおけるドメスティックバイオレンス、ホームレス問題、難民問題、スラムの4つの問題についての現状と対策についてのお話を伺った。

◆ フィールドトリップ：ホロコースト博物館

ドイツのヒトラー独裁体制時に実行されたユダヤ人大屠殺、ホロコーストを当時の写真や映像、被害者の遺品を通して今に伝えていた。

● フォーラム

私たちは社会的不平等を生み出す5つの諸要因を導き出し、それを分析し改善策を見つける

ことでさまざまな格差の緩和、是正を可能にするという結論に達した。その5つとは伝統、教育、社会、経済的地位、マスメディア、法整備である。

I. 伝統

人が生まれて最初に触れる社会集団は多くの場合、家族である。その家族によって培われた伝統的な性別による役割意識、信仰などは日米それぞれに深く根付いており、世代に関わりなく影響を及ぼし続ける。地域活動等を通じて人々が交流を深め合うことが互いの偏見を打ち砕く第一歩となり、そこから生まれる新しい家族は悪循環を絶つ希望となり得る。

II. 教育

教育はそれを受けた人々に思想的に大きな影響を及ぼす。教育抜きに社会的不平等を考えることはできない。教育には主に三つの可能性がある。相互理解の手助け、バイアスのない情報提供、一人一人が自分自身の意見を形成する手助けである。

III. 社会経済的地位

一般に、より高い教育を受ければ、それだけ社会経済的地位も上がる。これは逆に言えば教育が受けられなければ、その地位も低く、それゆえ彼らの子供もその環境から抜け出すに足る教育を受けることができないという悪循環に陥る危険性が大きい。社会経済的に弱い立場にある人々に広く門戸を開く教育制度、奨学金の充実をめざすことが不可欠である。

IV. マスメディア

昨年の同時多発テロ事件後のマスメディアによる報道が一般市民のイスラム教徒に対する偏見を強めたといわれるように、マスメディアが世論に大きな影響を及ぼすことは否定できない。よって、先に述べたメディアリテラシー教育の普及や、自発的な市民団体や NGO による批判的なマスコミ分析によって各人の批判的思考力を向上させる必要がある。

V. 法整備

現在問題になっている不平等は法整備の不完全に拠るところが大きい。過去のアメリカの移民排斥法や、難民受け入れの門戸を大いに狭めている日本の現在の政策などがその例に挙げられる。不平等を生み出す法を見極めた上で改正し、是正する法の整備、そして社会的弱者たちとの対話の機会をもっと設けることが鍵となるであろう。

● 論文タイトル

大藪真紀 “Okinawa as a Scapegoat”

高沢健史 “Homeless in Japan”

千代明弘 “Untouchables in Japan –the History of Buraku-min”

富田美緒 “Japan’s Contemporary Policies on Refugees”

水本憲治 “What Causes ‘Difference’ and How to Solve it?”

Lindsey Gallagher “Cultural Roots of Domestic Violence in China and Japan”

Leona Middleton “Stunted Growth: Stereotypes and Discrimination in the US”

Maho Saito “Social Inequality after September 11, 2001”

Jamie Scheppers “Gender Related Wage Issues in the United States”

Nana Uemura “The Evolution on the Model Minority Myth and its Ramifications on Contemporary Asian Americans”

宗教とアイデンティティ

Religion and Identity

● 分科会メンバー

柴田綾沙美* (慶應義塾大学経済学部)

西納由紀 (一橋大学法学部)

乗竹亮治 (University of Central Oklahoma)

堀抜功二 (立命館大学国際関係学部)

米田綾子 (東京大学文学部)

Amity Malack (Earlham College)

Brittany Mitchell (University of Colorado, Boulder)

Jaime Muscar* (Washington and Lee University)

Adam Rasmussen (University of Washington)

(*はコーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

今日、グローバル化の流れの中で宗教は互いに影響を及ぼしあい、私たちの社会に波紋を投じている。それと同時に、20世紀後半から世界各地で宗教への回帰傾向が見られている。では実際に宗教はどのような影響を国家、地域、個人に与えているのだろうか。人間が作り出したものである宗教が、多少なりとも人間の行動規範となる。このことを考えると宗教は国家、地域、そして私たち個人のアイデンティティ形成の奥深くにまで影響を及ぼしているといえるであろう。当テーブルではこのような見地から宗教に起因する紛争やテロリズム、社会問題の解決方法も視野に入れつつ、これからの社会における宗教の可能性を探っていくことを目的とする。

● 実施研修

◆ フィールドトリップ：ワシントン大聖堂

最初のフィールドトリップ先であるワシントン大聖堂は、国葬などによく使われている聖堂で、どのような宗派の人にも門戸を開放している。大聖堂としては世界で6番目の大きさで、独特の形をしたガーゴイルやステンドグラスが美しい。広々としたゴシック様式のアーチ型天井の下で、大聖堂の荘厳な雰囲気に触れることができた。

◆ フィールドトリップ：ホロコースト博物館

宗教だけに関連のある博物館ではないが、ワシントン D.C. で見ておくべき場所として訪れた。展示物はナチスドイツ台頭以前の社会情勢から時代を追っていくものであったが、遺品や当時の資料等を目の当たりにし、それらがわずか半世紀ほど前に実際に起こった事実であるという事を改めて認識した。自分たちとは異質の者を排除しようとする動きは、現代の宗教紛争に見られる一面ではないかと感じた。

◆ フィールドトリップ : Saint Paulus Lutheran Church

サンフランシスコにある“Jazz Church”として有名な教会を訪れた。礼拝は特に信者だけではなく一般の観光客などにも開放されている。ユニークなのは礼拝の形式で、始まりからずっと歌やピアノ、ギターの演奏が続けられており、賛美歌を皆で歌うだけでなく個人がマラカスなどを使って参加するのも自由であった。厳かな雰囲気を持つというような礼拝のイメージとは違ってはいたが、信者が積極的に参加できるコミュニティであると感じた。

● フォーラム

フォーラムでは、分科会でのディスカッションを通して得られたものを発表した。メンバーが事前に提出した小論文は大きく分けて三つのテーマに関するものであった。一つは日本社会に伝統的に継承されている神道、そしてアメリカの最もメジャーな宗教であるキリスト教、さらに今日の世界情勢を考える上で無視することはできないイスラームである。

これらについて考えていく中で、何度も議論にのぼったのが、『宗教』と『伝統』の間にどうやって線引きをするのか」という問いであった。例えば日本においては墓参りや初詣などの宗教行事は習俗として定着しているし、アメリカのキリスト教も一宗教という概念を超えて国民が共通に持つ信条や価値観に近い存在になっている面がある。「イスラーム復興」とよばれる潮流の中でも問題になるのは、現代社会における伝統的なイスラームと西洋的、世俗的なものとの関わりが、どのようにイスラーム的なアイデンティティに影響するかである。

宗教と伝統の間には境界が存在するが、それは画一的に決められるものではなく、個々人が自分自身の基準によって決めなければならないものである。それぞれが自分の中で二つの均衡を保てる地点を見つけることでのみ、それらの間に生じる矛盾が解決されるのであり、その過程が人間のアイデンティティ形成の要素を成しているのである。前述の問いに対する絶対的な答えは存在しないながらも、重要なのは一人一人がこの問いについて自分なりの答えを見つけようと試みることなのだろう。

● 論文タイトル

柴田綾沙美 “Cult and Fundamentalism”

西納由紀 “Understanding Islam”

乗竹亮治 “Wheat, Rice, God and Gods”

堀抜功二 “Islamic Revival and Forming Identity in the Immigrant Societies: Functions of Mosques”

米田綾子 “The U.S. Presidency and Religion—Christianity as Civil religion—”

Amity Malack “Portrayals of Islam in American Media”

Brittany Mitchell “Interpretations of the Islamic World by the Media and Why They are False”

Jaime Muscar “Shinto and the Modern World”

Adam Rasmussen “Mormonism in Japan: Placing External Challenges in an Internal Context”

多文化社会における教育

Education in a Multicultural Society

● 分科会メンバー

- 伊藤志織（早稲田大学法学部）
大塚絵美（慶応大学法学部）
川良麗子（早稲田大学第一文学部）
古川敏明*（東京大学大学院総合文化研究科）
守屋彰人（慶応大学商学部）
Gregory Balan（New York University）
Lourdes J. Rivera*（University of Guam）
Taylor Upson（Duke University）
Fusako Yoneda（Ohio State University at Columbus）

（*はコーディネーターを示す）



● 分科会設置当初の目的

アイデンティティは生得的要因に加え、多くの社会的要因によって形作られているが、青少年の自己形成において教育が果たす役割はことに重要である。ところが、そうした教育の性格を左右する種々の問題も存在している。当分科会ではまず、教育行政、学校、家庭、地域社会の役割、教育的資源、生徒の権利、仲間集団、個人の学習スタイル等、教育全般に渡る問題を討議する。その上で、単一、多文化社会というステレオタイプに代表される、日米の教育を比較していく。共生に向けた教育を批判的に考察し、将来の法律制定に向け具体的な提言をしていくことを最終的な目標とする。

● 事前活動

- ◆ 勉強会：「2010年の日本、外国人、学校 — 多文化共生社会に向けて」
講師：明治大学助教授 山脇啓造氏 場所：東京大学駒場キャンパス
- ◆ 勉強会：「教育における失われた10年の検証」
講師：東京大学教授 荻谷剛彦氏 場所：日米会話学院

● 実施研修

- ◆ 講演：Robert A. Underwood 氏

Underwood 氏はグアム準州選出の下院議員であると共に、グアム大学の副学長を務めるなど教育者としても精力的に活動している。グアムとアメリカ本土との歴史的、政治的な関係。「アメリカン」でありつつも「グアム人」としてのアイデンティティを失わないために、チャモロ語と英語との二言語教育を試みている。ユーモアを交えながらもその主張は非常に力強く、印象に残るものであった。

- ◆ 講演：Reiko Matsumoto 氏

Matsumoto 氏の主宰する、英語を母語とする子供たちを対象にした二言語教育プログラム

(日独仏西の各国語)は、各地に活動を広げつつある。言語は人間のアイデンティティであり、文化である。母語以外の言葉を学ぶことで多文化共生への理解とグローバルな価値観を無理のない形で獲得するのがこのプログラムの狙いであり、多文化社会を目指す日本の教育でも応用できないかと考えた。言語をめぐる分科会の議論に、一つの方向性をもたせる講演となった。

◆ フィールドトリップ：ホロコースト博物館

人間を、その髪、瞳、肌の色、骨格などで分類し、優劣を選別する人種学。ナチスは教室にも、アーリア人至上主義、反ユダヤ主義に基づくプロパガンダと理論を持ち込んだ。うず高く積まれた犠牲者の靴、髪など数々の遺留品は、私たちがこの多文化時代をいかに生き、この記憶を次世代に伝えていくか、見る者の魂にその本質を訴えかけてくるようであった。

◆ フィールドトリップ：サンフランシスコ市庁

サンフランシスコは環境教育が浸透しづらい土地であるという。太平洋からの強風が、市民の知覚する以前に、汚染された大気を内陸に押しやってしまうためだ。そんな中でいかに環境に対する意識を高めていくか。氏は、教室で環境教育を受けた児童がその役割を担っているという。教室から家庭、そして社会へ。教育の可能性についてまた新たな示唆を得る機会となった。

◆ 合同分科会

教育こそ社会的不平等を解決する鍵を握っているという共通の認識に基づき、社会的不平等分科会との合同セッション企画した。多文化社会における歴史教育、アフターマティブアクション、社会的再生産、二言語教育等、幅広いトピックでディスカッションを行い、フォーラムでのプレゼンテーションに向け、双方の分科会が刺激を与え合うことができた。

● フォーラム

発表は、教師と生徒の対話という形式で行った。なぜ教育が重要なのか、教育の持つ可能性とは。教育によって形成されるべき三つのアイデンティティとして、一、地域社会、エスニックグループの一員、二、国民、三、地球市民を挙げ、多様な価値観、歴史認識を共有することの重要性を確認。言語文化からのアプローチとして、二言語教育などの可能性にも触れた。社会的な不平等を再生産する悪循環を断ち切る、戦略的な解決法としての教育。メンバー個々の教育的背景と問題意識に一つの方向性を持たせ、収斂する発表となった。

● 論文タイトル

伊藤志織 "Education Reforms by Special Education"

大塚絵美 "Bilingual Education in Japan and the United States"

川良麗子 "The Possibility and the Role of Education for Global Civil Society in 21st Century"

古川敏明 "Japanese as an International Language"

守屋彰人 "The way to make Japanese Education much better"

Gregory Balan "So, We're All Different, Now What?"

Lourdes J. Rivera "Popular Culture: The multicultural Catalyst"

Taylor Upson "Making the Grade: An Assessment of Japanese Entrance Exams"

Fusako Yoneda "Preparing Teachers for Diversity: The Role of Teacher Education in the Age of Multiculturalism"

創造的表現から探る歴史認識

Historical Perspectives through Creative Medium

●分科会メンバー

北松円香 (国際基督教大学教養学部社会科学科)

小林悦子 (慶應義塾大学総合政策学部)

松岡洋平* (京都大学教育学部教育科学科)

森川幹人 (国際基督教大学教養学部社会科学科)

Lisa Daily *(Eckerd College)

Marina Li (Mills College)

Walker Roberts (New York University)

Paul Rodriguez (University of Texas)

(*はコーディネーターを示す)



● テーブル設置当初の目的

映画や文学といった創造的表現は、単なるエンターテインメントとしての力以上に、私達の価値観や歴史認識を形成する上で重要な役割を担っている。このような情報、表現媒体では、どのような価値観、歴史観が語られ、また語られないのか。創造的表現、また芸術が持つ可能性と危険性を認識しつつ、参加者 8 人が独自の切り口からこの問いを追求する。

● 実施研修

◆フィールドトリップ：ホロコースト博物館

事実としての数字よりも一つの写真、一つの映像、そして一つの証言が見るものをとらえて離さない。展示物を通じたこの「経験」は私たちにアートやメディアの持つ力の強大さを実感させるとともに、時代を超えてなおその体験を共有することの重要さと、それを伝えようとする意志を感じさせるものであった。

● フォーラム

芸術、そして歴史認識について一つのまとまった見解に達することは不可能であり、無意味であろう。ただ絶えず他者と疑問を投げかけ合い、互いに耳を傾け合う、対話のプロセスを繰り返すことしかできまい。しかし私たちは、対話すべき相手を本当に捉えられているだろうか。耳を傾けるべき声を知りえているだろうか。

私たちは、さまざまな媒体から情報をえ、自分や他者に対する価値観やイメージを形成している。しかしその媒体が伝えるのは、一体誰の視点、声、ストーリーであろうか。伝えられていないのは誰のものであろうか。

現実世界では、富や権力を持つ者、あるいはメディアが、その価値観や認識を大々的に主張できる大きな発言力を持つ一方で、誰からも忘れられ、あるいは沈黙させられている者もいる。

この「声の不均衡」("imbalance of voices")を共通の問題意識として当テーブルはフォーラムを構成した。多様な「声」が持つ多様な視点、解釈、そしてそれぞれの真実の存在に気づき、絶えず自分が聞けていない「声」を探すことの重要性を訴えかける。フォーラムでは「声の不均衡」を簡単な朗読劇で実演し、「創造的表現から探る歴史認識」というテーマに反応した8人のそれぞれ異なる8つの主張、「声」をすべて発表した。(以下8人の「声」抜粋)

「富と権力の不均衡、メディアの介入によって、一部の歴史の語りだけが注目を集め、他の歴史は忘れ去られる。より多くの語りに耳を傾け歴史に複数の真実を見出す試みが私たちを謙虚にし、相手への想像力を養う。」

「芸術とは私をポジティブに表現する手段だ。芸術は人と人、歴史、考え、活動、アーティスト、思想家を結び、芸術家とは真実の探求者、社会を癒す者、市民、そして革命者であるが、芸術活動への制限は多様性を単なる飾り物に変えうる。多様な歴史認識にどれだけの人が触れ、経験し、文化的瞬間を決定付けるのだろうか。」

「私達の歴史の記憶に大きく影響する、映画の描く歴史、ステレオタイプに敏感にならねばならない。」

「芸術は、歴史や記憶と同じように、一つの声に基づく真実へのある一つの視点に過ぎず、まず個人的なレベルで、そしてそれが生まれた歴史的な脈において理解されねばならない。『どれだけ純粋な芸術であっても、その時代の政治性から切り離して創造され理解されることは出来ない。』(マリーン・マヨ)」

「日本の戦争文学に触れ、国家間の相互理解には人と人との交流、言語の壁を乗り越える努力が欠かせないことを認識した。真珠湾攻撃生存者は日本人との戦いを「顔のない敵」との戦いだったと証言した。しかし真珠湾攻撃から60年近くたった今日においても日米は「顔のない友達」になったにすぎないのではないか。」

「我々が平和の祭典として親しんでいるオリンピックは、現実の世界においてさまざまな制約を受け、限界を内に含みつつも巨大な力を持っています。商業主義と結びつき、オリンピックの平和のメッセージは本当に平和が必要な人々には届いていないという現実を考えるならば、語りついでいかななくてはならない。しかし、一般的な日本人も含む、豊かな生活を享受している人々は、理想の裏に隠された現実にもっと目を向ける必要がある。」

「芸術とは、芸術家が社会に対する関心について、個々人と対話する場である。エゴン・シーレの作品のような唯美的な芸術でさえも、社会から完全に切り離されているわけではない。セクシュアリティ、自己探求、死、などをテーマとしたシーレの作品は、芸術というものに対する私達の固定観念への挑戦であり、芸術家は自由に自己の関心を追求できることを示唆している。芸術を通して私達は社会における多様な視点を体験できる。」

「情報の発信者や受け手、流行やマイノリティーや社会的圧力などさまざまなレベルでの社会的な不均衡によって形成されている文化的バイアスは我々の思考に大きな影響を与え偏見や誤解を招いている。我々は社会、教育、個人、各レベルにおいて過剰な文化的バイアスに飲み込まれないよう立ち向かっていかなければならない。」

● 論文タイトル

北松円香 “Egon Schiele and the Fin-de-Siecle Vienna”

小林悦子 “Contemplation on State of “Memory”, and Trends of “Memory-Narrative” Today”

松岡洋平 “Cultural Biases in Modern Society”

森川幹人 “The Olympics and Politics”

Lisa Daily “The Aesthetics vs. the Political in Japanese and American Art”

Marina Li “Surviving Within Insecurity: Finding a Home for Art and Community”

Walker Roberts “As the Smoke clears: the Revival of War Film in Post 9/11 America and Japan”

Paul Rodriguez “A struggle for Understanding in Postwar Literature”

環境問題

Environmental Issues

● 分科会メンバー

高橋泰美（筑波大学第三学群国際総合学類）

出浦直子*（慶應義塾大学法学部法律学科）

服部高明（東京医科歯科大学医学部）

増谷康（東京大学大学院総合文化研究科）

Patrick Emerson（Guilford University）

Lauren Frese（Lafayette College）

Amy Jones*（University of Kansas）

Helen McCallister（Barnard College）

（*はコーディネーターを示す）



● 分科会設置当初の目的

1992年の地球サミットにおいて採択された行動計画（アジェンダ 21）に基づき、世界中で環境問題に対するさまざまな取り組みが行われてきた。だがこの10年の間、世界の多くの地域では貧困やエイズの問題が拡大し、また期待された環境問題についてもそれほど大きな成果は見られない。環境問題を解決するにあたって、必要な技術や政策オプションは既に数多く提唱されている。問題はこれらをいかに具体化し、政治的合意を導き出すかにかかっている。当分科会では、単に環境問題に関する諸現象を分析するにとどまらず、それらの解決策をいかに政策レベルで実現し、かつ実社会に応用していけるかという視点に重点を置き、議論を進めることにした。

● 実施研修

◆ フィールドトリップ：環境保護局（EPA）

EPAでは担当者のハーヴィー氏より、大気汚染や京都議定書など環境問題全般に関してのお話を伺い、その後分科会メンバーを交えての質疑応答、ディスカッションなどを行った。ブリーフィングの内容は、ブッシュ政権が提示した京都議定書の国内代替案である“Clear Skies”プログラム、代替エネルギー導入に関して炭鉱削減を目指すEPA政策、そして消費者の省エネルギー製品に対する関心を高めることを目的とした“Energy Star”プログラム等についてであり、分科会メンバーからもこれらのテーマに関する幅広い質疑応答が行われた。

◆ フィールドトリップ：エネルギー省

アメリカのエネルギー省の基本政策は、国家安全保障のための石油供給の安定化、技術革新、経済政策としての税制度や補助金制度の確立の三点である。地球温暖化対策に関しては二酸化炭素排出量を今後10年間でGDP比18%削減することを目指しており、そのための技術や補助金制度の導入などについての話を伺った。

◆ フィールドトリップ : Lewis Center

オーバリン大学付属機関である環境研究所を訪問した。建物自体が環境に配慮した構造となっており、ソーラーパネルやバイオマスなどに対する新しい取り組みを見せていただいた。太陽光により昼間の電力はほぼ賄うことができるが、総合的な採算に見合うかどうかについては検討中とのことであった。バイオマスについては人糞浄化による植物栽培を実践しており、殺菌に成功しているが、その植物を食べられるところまでは到達していないとのことである。当分科会の重要なテーマである代替エネルギーについての理解を深めるのに参考となった。

◆ フィールドトリップ : Bay Area Economics

バークレー地域の都市開発を専門とするコンサルティング会社 Bay Area Economics を訪問した。無計画な都市の肥大化を防ぐために都市周辺を木で囲み、自然環境を保全するグリーンベルトという手法がサンフランシスコ湾全域で行われているということである。私たちに身近な住環境の中で自然とどのように共生していけるかという有意義な視点を養うことができた。

● フォーラム

フォーラムでは「環境主義」を実現していくための具体的方策を提示した。「環境主義」とは本質的に環境破壊を内包する資本主義という経済システムを克服し、自然環境との共生を目指す次世代型の社会システムである。私たちは京都議定書、スマートグロウス（都市計画）および代替エネルギーの三つのテーマを中心に、「環境主義」を実現するための解決策を提示した。まず、京都議定書をめぐる意見の相違が日米の信頼関係に亀裂をもたらすものであってはならず、アメリカは京都議定書を批准しないのであれば他の国々を納得させられる代替案を早急に示すべきである。その際、日本は戦略的パートナーとしてアメリカに協力すべきである。次に、環境に配慮した都市計画モデルを実現していく必要がある。具体的には交通渋滞を解消し職場や学校へのアクセスがより便利になる「交通を基礎とした開発」、および住宅やオフィスの効率性を高める「グリーンビルディング計画」などである。

最後に、バイオマス、燃料電池、地熱、太陽光、風力などさまざまな代替エネルギー導入の必要性である。個々のエネルギーは小さな資源節約には成功しており、今後、効果的に組み合わせることで大きな資源節約につながるはずである。

結論として、二酸化炭素削減へのアメリカの自主努力、環境に配慮した都市計画の実現、代替エネルギー導入の三点を推し進め、世界中の国々が積極的に環境問題に取り組んでいけるように日米が協力して問題解決にあたるべきである。

● 論文タイトル

高橋泰美 “Research on the Environmental Tax”

出浦直子 “Current Water Supply Systems and Changes to Solve Water Issues”

服部高明 “Endocrine Disruptors”

増谷康 “Language and Natural Environment”

Patrick Emerson “Alternative Energy Sources”

Lauren Frese “The Kyoto Protocol: A Fissure in Japanese-American Relations”

Amy Jones “Transportation of Trash”

Helen McCallister “Capitalism: A Sabotage on Environmental Balance”

第5章

本会議—スペシャルトピック

Berkeley

Oberlin

食と健康

Washington D.C.

パフォーマンスアート

San Diego

アウトドアスポーツ

民俗工芸

リズムと音楽

映画とアニメ

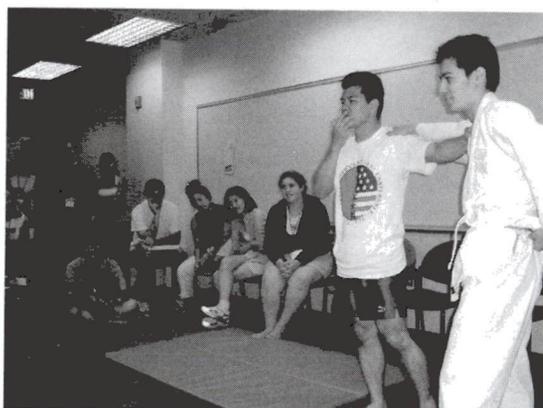
テロリズム

食と健康 (Food and Health)

人間が生きていく上で、食物を摂るということは、絶対に欠くことのできない重要な要素である。しかし、ときにはその食物によって生命が危機に晒されることもある。特に、生活習慣病や糖尿病は大きな注目を集めている。食と健康 ST では、ベジタリアンをキーワードにアプローチを試みた。アメリカ側参加者の数名のベジタリアンにインタビューを行ったが、そこで明らかになったことは、私たちと彼ら、彼女らとでは、食に対する考え方が違うということだ。私たちは健康面からベジタリアンを連想しがちだが、動物愛護などの主義、主張から、ベジタリアンを選択している人もいた。彼らにとって食物は、単に栄養を摂取するものではなく、一つの自己表現として確立されている。今回の活動は、結果的に、食と健康の関連だけでなく、食への態度に対する認識を深める機会となったのではないだろうか。

パフォーマンスアート (Performance Arts)

この ST はメンバーが自主的にステージを設け、パフォーマンス参加者を募り、日米学生会議参加者全員の前で、踊り、歌、楽器演奏、朗読等を披露するという形式をとった。ステージは第一開催地であるワシントン D.C. および、最終地であるサンディエゴにおいて二度に渡って設けられた。他人に対して自分の技術や能力を披露し、その見事なパフォーマンスを、会場が一体となって共有し互いに楽しむことは、アメリカならではの文化でもあり、会議参加者の結びつきを強める上でも非常に有意義であった。中でも、グアム出身者による民族ダンス、日本側参加者による日本舞踊、および柔道の投げ技の連続には、会場も大いに盛り上がりを見せた。



日本側参加者による
柔道のデモンストレーション



民族ダンスを披露する参加者

アウトドアスポーツ (Sports and Outdoor Recreation)

アウトドアスポーツ ST では、第二サイトであるオーパリンにて、“Capture the flag” とボウリングの二つの企画が実施された。これらは会議の早い時期に実施され、また、共にチームの連携を必要とするということから、参加者間の交流の促進に大きく寄与したと考えられる。スポーツという一種の *non-verbal communication* を通じ、言葉の壁を越えてお互いの連帯感を生むきっかけになった。会議の主要な要素である、*verbal communication* はもちろん、それ以外の要素を持つ企画を織り交ぜることで、参加者間のより一層の相互理解が図られるという意味において、この ST は非常に意義深いものであった。

民俗工芸 (Cultural Art)

民俗工芸 ST では、日米両国のさまざまなアートを共に体験できる場を提供した。日本側からは、折り紙や竹とんぼ、書道をはじめとして、実際に浴衣を着てみるコーナーが準備された。ユニークなものでは、日本の夏の風物詩である蚊取り線香の歴史の発表が行われた。アメリカ側からは、体全体を使ったマッサージの講習や、チョークで自由に地面に絵を描く *sidewalk chalk* が紹介された。また、大学構内に吹きガラス工房があったため、ガラス作りの工程を見学した者もいた。一人一人がそれぞれの活動に加わることで、一部分ではあるが、日本とアメリカの文化に触れることができた。

リズムと音楽 (Cultural Rhythms)

リズムと音楽 ST では、クリーブランドにある Rock'n' Roll Hall of Fame and Museum を訪れた。1994年に設立されたこの博物館には、エルビス・プレスリーやビートルズ、ジミ・ヘンドリックス、ローリングストーンズ、U2、クイーン、マイケル・ジャクソン、レッドツェッペリン、セックスピストルズ、スティング、ボブ・ディランといった、アメリカの音楽史を象徴するスターのコレクションが収められていた。また、この博物館は、若者文化というよりはアメリカ文化としての「ロック」を文化的にとらえた施設であり、ロックの誕生について振り返ることもできた。1951年、クリーブランドのラジオ DJ が、R&B と呼ばれていた黒人音楽をロックンロールという名称で白人の若者に紹介し、急速に若者の間に広まったという逸話は、参加者にとってアメリカ社会の多様性を再認識するきっかけになった。会議の最後には、博物館にも列しているボブ・ディランの *Blowin' the Wind* を日米の参加者で歌い、言語や国境、時代を越えて共有される音楽の持つ大きな力と、音楽を通じて社会と対峙するアーティストの姿勢を学ぶことができた。

映画とアニメ (Film and Animation)

オーバリンに到着した8月3日の夜、映画とアニメ STの一環として、映画「Shall we ダンス？」が上映され、多くの参加者が観賞した。映画は、平凡なサラリーマンが社交ダンスの持つ魅力に取り付かれていく中で生まれる、さまざまなドラマとその結末を描いたコメディである。日本側参加者からは、日本とアメリカの参加者で笑いのツボが違うという指摘があり、アメリカ側参加者からは、日本のサラリーマンについて、家庭からの距離や、父、夫、社員としての役割と個人の間の乖離が見えたという意見もあった。全体としては「面白くて、笑える」という感想が多く、移動の疲れや緊張をほぐす役割を果たしたようだ。翌日、8月4日の夜には、「もののけ姫」が上映された。多くの観客が集まった中、前日とはまた違った反響があり、映像のすばらしさを称える声や、非常に考えさせられる映画だという感想が聞かれた。

テロリズム (Terrorism)

第54回日米学生会議は、昨年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ以後、初めて開催された会議である。従って今回の会議では、日米双方の参加者が集うディスカッションとその後のエッセイ収集を企画した。これらの企画の目的としては、全世界に衝撃を与えたテロに対する両国の学生の意見を相互に交換することで、日米両国の相互理解を深め、将来のテロ対策を日米両国が中心となって構築する土壌を築こうというものである。

ディスカッションでは、会議参加者全員がおよそ二時間に渡って意見を交換した。ニューヨークに住む学生が事件当日の回想を述べたり、アメリカの報復作戦に対する意見が飛び交うなど、論点は広範囲に渡りながらも自由な議論が繰り広げられた。これらの議論を踏まえた上で、参加者から同時多発テロに関するエッセイを収集し、ディスカッションよりも、さらに一步踏み込んだ意見を集約することができた。

この議題の重要性は、多くの参加者がこの ST に真剣に取り組んでいたことから見てとれる。しかし一方で悔やまれる点もある。それは、この議論を継続的に行いながら論点を絞り込み、より深い議論に到達することができなかった点である。しかし、『この議論が、私の「9・11」観に現実味を与えてくれた』というある日本側参加者の言葉が示すように、今回のテロリズム ST の活動を通じて、被害国であるアメリカ市民と第三国である日本国民との間に存在する意識的な溝を、学生たちは多少なりとも埋めることができたであろう。



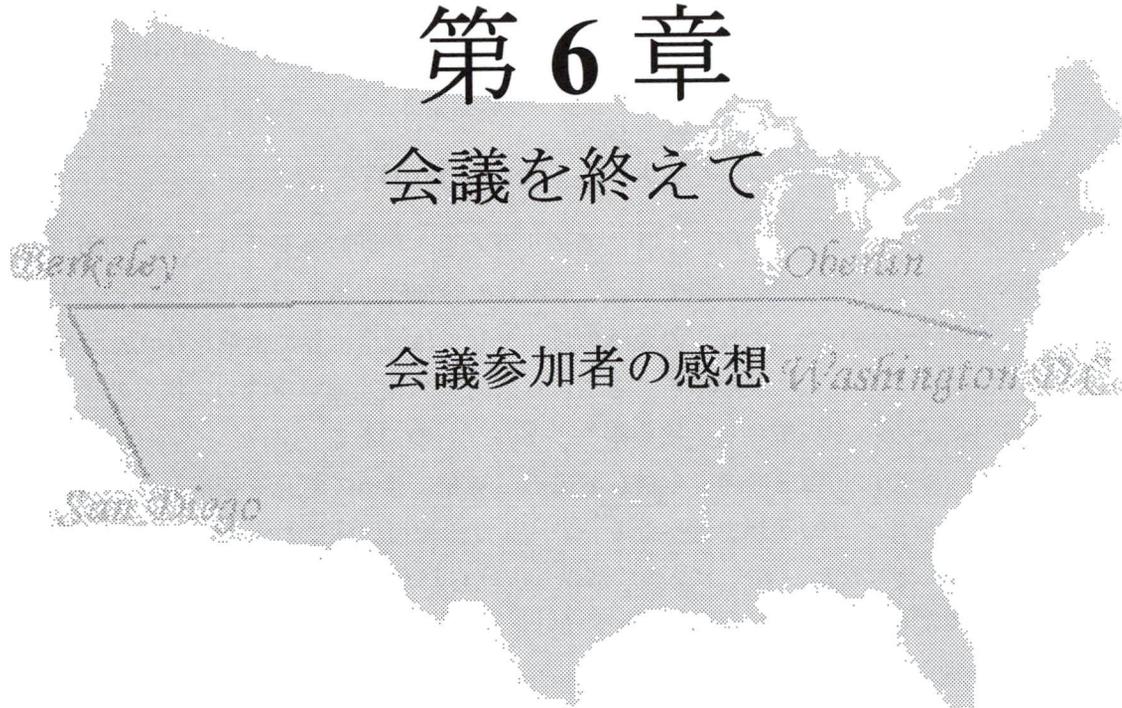
テロについて

各自の視点から議論する参加者たち

第6章

会議を終えて

会議参加者の感想



秋山洋児

今年で二年目となる日米学生会議の本会議は、私にとって去年とは異なる特別な意味を持っていた。それはこの会議のためにどれだけ貢献できるか、また私自身この会議から何を学ぶことができるのかという点である。会議を終えてこのように「感想文」という形で私の会議参加に対する意義を再度問い直す機会を得ることができた。私にとって日米学生会議とは何だったか、また上で挙げた私自身に課した課題は達成できたのか、この中ではっきりさせることができたらと思う。

まず、今年の日米学生会議も昨年と同じだけの出会いがあった。一つ一つの個性と触れ合うことによって私自身の大学生活やその後の将来について、何がしたいのか、またどうありたいのか深く考え、また会議中に仲間と語り合うことでその方向性のある程度見出すことができたと思う。そういう意味では日米学生会議は私にとって学生生活だけでなく、生きていく上での一つの起点になったのではないだろうか。しかし、同じような経験、示唆を参加者である仲間にも与えることができたのかというと、それには自分の世界があまりにも小さすぎて、自分の持っているものがあまりにも浅すぎたように思う。

このことは会議に自分がどれだけ貢献できたかという問題になるが、会議中は実行委員として分科会、ST をコーディネートする役を務めていたものの、会議の根幹、即ち参加者間のコミュニケーションの中で、自分の個性をどれだけ発揮して他の仲間に何かを与えることができたのか、そのためには、上でも述べたように私にしかないもの、即ち私の世界があまりにも小さすぎたように感じた。それは知識の差だけではなく、個性の差ではないだろうか。日々を大切に過ごしている人ほど、日々感じる想いは強く、それは他の個性に大きく影響を与えるものである。それは私が本会議の一月間常に感じ続けたことだ。どうすれば自分も彼らのように日々をより豊かに生きることができるのか。

私が会議を終えて学んだのは、それは毎日何かを知りたい、感じたいという想いを大切に一生懸命生きるということだ。今回の会議はそれを得ることができたきっかけに過ぎないが、今後そのことを自分の生活にどれ程活かしていくことができるかということが、日米学生会議を終えて自分のなすべきことであるように思う。

石さゆり

日米学生会議での体験は、いろいろな意味で「非日常」だというのは参加した者の多くが同意することだと思うが、私にとってその「非日常」の意味は、私たちが日常的に回避している(かもしれない)「深い」人間関係を通じて、日本側参加者、アメリカ側参加者の考えていることを垣間見ることができたことだと思う。

そのことの理由として考えられるものには二つある。一つは、やはり、24 時間ずっと一緒にいるという共同生活の効果。もう一つは、分科会、リフレクションミーティングなど議論する場が多くあり、そのテーマも無難なものに限られていなかったことだろう。(もちろん、参加者が語ることへの熱意と真摯さを持っていたことも前提になっていただろうが。)

24 時間一緒。一人になる時間がないに等しいというのは、「逃げ場がない」ということでもあり、ふとした瞬間にその人の考えが見えてしまう(あるいは、自分の性格を見せてしまう)

ことではないだろうか。差別反対と言う人がふとした一言に差別感情をにじませてしまうように。ふとした瞬間を見逃してしまうことだってあり得るだろう。

それよりも、私にとって印象的だったのは、議論における、日本側参加者、アメリカ側参加者双方の思い、考え方のぶつかり合いや、交換だった。深く他人を知るためには「話さなきゃ」という当たり前のことを確認することができた。私が所属していたのは通商政策分科会で、比較的ニュートラルな議論をすることを予測していたが、その予測に反して、かなり熱い議論が交わされることとなった。アメリカは、フェアな自由貿易をしているのか、自由貿易は正しいのか、競争はいいことか、資本主義かエコロジーか。日本の戦争犯罪や被差別部落民の問題にまで話は及んだ。それは、予期しなかった感情的対立かとも思う展開だったが、振り返ってみると、とても有意義な議論だったと思う。ナショナルスティックな感情や、アメリカの政治経済の背後にあるエートスのようなものをほんの少しではあるが、垣間見ることができたような気がする。また、アメリカ側参加者とのコントラストから、日本側参加者特有の考えも感じることができた。

日常生活では一緒にいても、深いところで自分が何を感じ、考えているのか、相手が何を感じ、考えているのか、語り合うことができる人々は非常に限られている。親しくなればそうはできても、そうでない人々とは「場」を設けられない限り難しい。私にとっての日米学生会議はそういう「場」であったし、その意味で有意義であった。普段生活していると、私たちがイデオロギーを持っていることは意識しないし、深いところでは偏見を持っていたり、かなり強い価値観を持っていることも見落としがちである。そうしたものを浮き立たせる議論をすることができて、とても興味深い体験をすることができた。

伊藤志織

日米学生会議では貴重な体験が多くできた。一ヵ月間アメリカの学生と日米関係について話し合えることなどもう二度となさそうだし、普段行けそうにない場所、個人的には会えないだろう著名人のことを考えると本当に質の高い会議であったと思う。この会議の特色として最も強調すべきはそこから得るものに対する制限が何もなくあったことであろう。学生の会議であるからこそその自由を享受し、自分の好む角度で全てをみることができた。だからこそ同じ体験の中なのに、実にさまざまなものの見方で、参加者一人一人が違うものを得ることが可能だったように思う。

このような形で過ごした一ヵ月間は、自分を認識し、試す時であったと思う。他者との視点の違いを比較する中で自分の視点を認識することが自然に行われ、討論ではその視点が試されたからだ。他者の持つ「もう一つ視点」を常に意識する中で、自分の視点が磨かれたと感じている。

日米学生会議後、日常に紛れると、あっという間に夏休みが終わっていた。しかし、日米学生会議は終わらない。会議で得た経験をいかに消化し自分の人生に活かすかが再び試されていると感じるからだ。日米学生会議は思い出として人生に影響しつづけるのだろう。ここで出会った友達と確かな絆のもと、新しい生活が始まった現在の状況を大切にしていきたい。

日米学生会議という素晴らしい機会を支え与えてくださった方、共に参加した仲間、全ての

方に感謝したい。本当にありがとう。

江川響子

私は幼少のみぎり、よく兄弟と殴る蹴るのけんかをした。他人とは物理的力の行使によって分かり合うものだ、人は屈服させるものだ、と認識してといた。その時いかに兄弟を人物評価していたかを私はよく思い出せないが、少なくとも兄弟を「兄はリアリストだ」とか「弟は真面目」という人格評価をもってして認識していなかったことは確かだ。防御力、攻撃力、ウィークポイントなどなどの得点化されたアビリティを総合したそれぞれの値を持った存在として彼らを認識していた。中学で友人に対してもそういった態度を取ってしまい、そこで痛い目を何回も見てしまった、それらの経験から自分が傷つきたくないあまり自分を他人からいかにディフェンスするか、という観点のみから他人と接するようになった。十分な距離を取りつつ他人の言葉や行動から他人を推し量り、彼ら一人一人の個人像を導き出し、それに対して自分のある部分を出したり出さなかったりして円満に臨機応変に付き合うことのみを心がけた。自分をさらけ出して人と付き合うということは多かれ少なかれ自分の要求を相手に突きつけることであり、安全のためにはそういったリスクを犯さず、事なかれ主義に徹することを第一に考えるようになった。他人とのコミュニケーションは私にとってむしろない方がいいものだった。

しかし、日米学生会議の参加者は物理的力を行使するわけではなく、私のエモーショナルな部分にたいして言葉を仕掛けてくるわけでもなく、やすやすと私のバリアーを破り、自分を突きつけて春合宿以来、常に私を揺り動かした。彼らは何か「力」を持っており、その力とは彼らの発する言葉の一つ一つを併せてつむぎだされる textile の模様の奇抜さ、美しさではなく、何か物理的な力とほぼ等価にリアルに伝わって作用するものであり、人には人を動かす摩訶不思議な力があるのだと発見した。

日米学生会議期間中、自分の大事にしていたものがいともやすやすと壊れていった。自分を揺さぶられる経験は決して心地いいものではなかった。しかしそれと同時に、地盤が落ち着いているときには分からないが、自分にはどんな大地震が起こっても崩れない強い部分があるということにも気づかされた。日米学生会議で得たものはたくさんあったが、一番大きかったのはそれらの事実であった。皆のおかげで実行委員になった私は来年、自分が震源地になって第54回以上の大激震を起こしてやろうと思っている。

大塚絵美

私にとっての本会議の一カ月は、今までにないほどさまざまな事に満ちており、そして信じられないほど時間が速く過ぎた。そもそも、大学生活最後の夏休みに何か心身共に打ちこめることを見つけない、大学生活最後だからこそ学生にしか出来ないことをしたい、そう考えて参加した会議であった。五月から始まった事前活動から夏の本会議そして会議後に至るまでの間には、多くの出会いがあり、多種多様の議論があり、価値観の衝突があり、人間関係面でもアカデミックな面でも色々な経験があった。会議から得たものは各人それぞれであろうが、その一つはこれが他者の存在を通して否応無しに自分自身と向き合う良い機会となったことでは

ないだろうか。私自身にとっては学生最後ということが逆に仇となったと思うこと、アカデミックな面を必ずしも徹底的に追求できなかったと感じること等は残念であるが、しかし、私が今年日米学生会議のさまざまな活動をする中で経験したことは、いろいろな意味で今後の人生に大きな影響を残すだろうと現在強く感じている。

大藪真紀

日米学生会議を振り返っての感想、これを書いていると本当にアメリカで過ごした約一カ月間のあの日々は「振り返る」対象、つまり過去のものとなってしまったのだという実感がする。72人という大人数での集団生活、しかも半分はアメリカ人、公用語は英語、目まぐるしく変わる滞在地、当然のように英語で行われるパネルディスカッション等々、これまでに体験したことのない生活に最初は戸惑い、辛いと感じることもしばしばで正直言って日本に帰りたいと思ったことが幾度もあった。しかし会議を終えた今、月並みな言葉ではあるが本当に日米学生会議に参加できてよかったと心から思う。素敵な夏だった。

私がこの会議でもっとも苦労したのはコミュニケーションである。語学力不足で自分の言いたいことを伝えることができない、また相手の言うことを理解できないというのも苦しく、自分の至らなさを嫌というほど感じたものだがそれと同じくらい、あるいはそれ以上に72人もこの集団の中いかに溶け込み、多くの人と会話を楽しむことが出来るかというのは会議全体を通じて自分の課題となり続けた。元来、付き合うのはごく限られた気の置けない友人中心、彼らがいなければ一人でもいいという付き合いのスタンスを取っていた私にとってこれは大きなチャレンジであった。積極的に自分から話しかけるのが時に辛く感じ、内にもりそうになることもしばしばであったが、今回日米学生会議に参加するに当たっての自分の目標の一つに、出来るだけ多くの人に自分から話しかけるというのを掲げていたことが助けとなった。何よりも、日米学生会議の仲間は本当に心根の暖かい人が多く、優しい気遣いで私を受け入れてくれたことが大きな支えであった。

今では、本当にあの時くじけずにいろいろな人に話しかけてよかったと思う。日常ではあまり話さないような人、とりわけアメリカ側の参加者たちとの会話によって自分にないものの見方、考え方、ユーモアをたくさん交換し共有することが出来た。日本に帰って大学に戻ったとき、それまであまり積極的に話しかけることになかった先輩や事務の方、掃除の方との会話を心から楽しんでいる自分に驚いている。まず、自分から話しかける。当たり前のことかもしれないが、これが相手とコミュニケーションをはかる第一歩であると実感した。私がこの会議で得た最大の収穫は、実は最も苦労したコミュニケーション能力の向上だったのかもしれない。

会議全体を通した反省の一つにアカデミックな分野での議論をさらに深めるべきというものがあった。もちろん現状に満足せず改善、改良を加えていくことは不可欠であるが、私たち若い学生にとっての意義は、学会のように学問そのものを深めるというよりむしろ参加者個人が自分の抱える壁にぶつかりながらも、試行錯誤しつつ乗り越え、真に心を震わせることが出来るような大きな感動をいかに多く得られるかどうかというところにあるのではないだろうかと個人的には思っている。さらに大きな感動を参加者間で共有できる第55回日米学生会議であってほしいと心から願う。

最後に、私はこの会議で出会った仲間全員に感謝したい。皆の支えが私のエネルギーだった。ありがとう。

川良麗子

日米学生会議を、あの一月を振り返るといって、どうも苦いものが多すぎてひたすら懺悔のようになってしまいそうな気がする。ただの独り言になってしまうかもしれない。それでも、「前進」する、この姿勢を崩ささえしなければ、ここに言葉を残す意味もあるものと信じよう。

私にとって、日米学生会議との邂逅は当初全く違和感に満ちたものであった。日米学生会議に応募、そして参加することも、それぞれ最後の瞬間まで悩みぬいた末の決断だった。何を期待されて受け入れられたのか、自分がここで何を得られるのか、どう貢献できるのか、自分のいるべき場所はここなのか、ともかくそれを見極めるために参加するのだ、という後付けも甚だしい地点からのスタート。今考えれば、あったのは、「何かあるはず」という漠とした期待だけだったかもしれない。いわば空っぽでのぞんだ春合宿、そして本会議。登るべき山を目の当たりにして嬉々としてはいたが、なぜ登るのか、登りきったところから何が見えるのか、というあたりは依然混沌としていた。

本会議期間中、分科会のセッションを重ねても、日程をこなすことに手一杯で、遥として答えをつかめないでいる自分に慥然とする瞬間が何度もあった。疑問は疑念に、日程終盤ではもはや混乱ですらあったかもしれない。自分への問いかけは等しく日米学生会議へのそれでもあって、なぜ今日米学生会議なのかという議論を連日繰り返した。相互理解、それがゴールでいい。そういうアメリカ側参加者の励ましとともとれる言葉にも素直にうなずけなかった。本会議の集大成としてのフォーラム、登りきったはずなのに私の視界はそれでも晴れていない。

ただ見えていたとすれば、それは私を叱咤して引っ張りあげてくれた仲間たちだ。それ以外に何があつたらう。最後まで、私は困惑と焦りそして違和感をぬぐいきれないままだったが、彼ら自身それぞれの形で同じものを抱えていたはずでありながら、共に見えないゴールを目指し、会議終盤、なんとも苦く納得からはほど遠い、苛立ちにさえ似た思いも理解し共有してくれた。あの一月はなんだったのか、私は未だに霧の中にあるが、彼らに支えられながら答えを求め続けた日々は、それとして私の中に確かに刻まれた。

本会議は終わり、日米総勢 72 名は再びそれぞれの日常へと戻り、一堂に会する機会は今もはやない。無理にきれいな結論に持っていくでなく、すばらしい会議だった、そう言って幕を引いてしまうでなく、参加者それぞれが沈黙と共に持ち帰ったものがある。本会議終了から 10 日あまり、一人になった私の中にあるものは、ただ得がたい仲間があることへの感謝、そして彼らと過ごした一月を、彼らとこれから歩む進行形の未来の中で、必ずやその意味をあらしめてみせる、そういう執念にも似た思いだけである。日米学生会議の本当の意義は、そういう沈黙の中からこそ生まれてきてもいいはずだ、今はそう感じている。

喜多洋輔

日米学生会議は、OB である友人複数が薦めてくれていたこともあり、かねてから参加した

いと思っていた。昨年の夏、日本開催の第53回に一参加者として参加することができた。

しかし、昨年は大学の再試を受けなければならないことになり、残念ながらハイライトたる沖縄サイトには参加することができなかった。しかし、そのおかげか、皆の気遣いを実感することも出来た。

会議の知的な満足度も高く、国籍に関係なく友情も深めることができた。最後、クロージングセレモニーでは、めったに感情を表には出さない自分が不覚にも泣いてしまった。

不完全燃焼の思いから、第54回のアメリカ開催の実行委員になった。第53回の日米双方の実行委員の皆が自分にとってはとても大きく見え、自分もやりたいと思ったからだ。

この一年間、学業と実行委員としての仕事の両立に苦心を重ねつつ、自分なりにベストを尽くしてきた。昨年とは違い、実行委員としてマネージメントする側にたち、また米国開催とのことで、一概に昨年とは比較できない。しかし、この夏は私に得難い経験を与えてくれた。

もっとも印象に残っているのは、オハイオ州オーバリン大学のサイトで、分科会のカウンターパートである女性と、夜ジョギングをしたことである。いつもは口べたな私が、最も素直になれた瞬間であったと思う。慣れないジョギングで息を切らしながらも、自分を素直に出し、彼女といろいろなことを語ることができた。この経験がこれほどまでに大きく自分の脳裏に焼き付き、残るとは考えていなかった。ジョギングの後半、酔っぱらった心なきドライバーから彼女が差別的言辭を浴びるということもあったが、それも含めて大きく印象に残っている。

多くの国際交流企画に参加してきたが、学生により企画運営がなされる日米学生会議の伝統はとても誇るべきものだと思う。21世紀に続く伝統を築き、新しいものを創ることの一端を自分が担えたか不安であるが、とても思い出深い夏であった。

みなさん、暑い夏をありがとう。

北松円香

第54回日米学生会議が終わりに近づいたころ、自分と他の参加者との関係を振り返り、自分の限界と、他の人々の寛容を感じた。その時その時はベストを尽くしたつもりでも、実のところ、自分の幼さを露呈していたに過ぎない私を、受け入れてくれた皆に対し、一方通行かもしれないが、深い信頼を感じる。

会議中、日米学生会議の意義は何かということ、参加者の間で議論した。一体、日米学生会議は何のためにあるのか、本会議前から自信が持てなくなっていた私が、一ヶ月の間に出した一つの答えは、上に書いたように、他者に対する信頼だった。異なる背景を持った人たちを、一ヶ月かけて信頼し、尊敬した経験は、今後私たちが他者を理解する出発点となるはずだ。

私が出したもう一つの答え、それは、現在の学生からの発信の場としての日米学生会議である。時に重荷にさえ感じられ始めた、毎年積み重なっていく日米学生会議の伝統に、意味はあるのか。それは惰性から来る継続ではないのか。これらの批判的な、とても重要な問いに対しては、日米学生会議は、学生の問題意識を基に、毎年ゼロから始まる新しい企画であるといえるだろう。日米学生会議の意義は参加者の数だけあるのかもしれない。

だから、第55回をつくっていく人たちへ。第55回が第54回を超える必要はない。それよりも、新しい座標軸の上で、原点から、自分たちが信じられるものを築き上げてほしい。

まあ、これは、私の考えに過ぎないのだけれども。

以上、この感想が、第54回参加者以外の方々の目に触れることを承知しつつ、今は非常に個人的な言葉しか書くことができない。私たちが成し遂げたことも、成し遂げられずに、将来まで課題として抱えていくことも、すべて含め、強い印象を残す会議だった。自分が第54回日米学生会議参加者であったこと、参加者と日米学生会議を支援してくださった方々に支えられたこと、会議でさまざまな問題意識に出会ったことを忘れたくない。

小林悦子

大集団生活の中での個々人の行動を見る機会など、高校以来なかったもので、日米学生会議の一ヵ月は、新鮮であり、「自分」がとても見やすかった。

単に寝食をともにするだけでは、必ずしも理解、対話などといったものは生まれない。それに雰囲気、タイミング、状況、自分の傾向、といったものが、コミュニケーションのあり方を大きく左右する。しかし、これらの同じ制約があったとしても、他人と知り合おうとする意欲や人へのアプローチの仕方、自分の表し方は本当に多様で、その多様なプロセスが展開してゆく様に一ヵ月間継続的に触れることができたのは、非常に興味深く、刺激的であった。そして同時に、自分に足りないもの、自分が反省すべき点などを気づかせてくれた。日米学生会議中、さまざまなコミュニケーション方法を通して私に接したり、さまざまなコミュニケーションを私に見せてくれた人たちのおかげで、今後私が自分の行動を振り返る際の自分に対するチェック項目や、私の今後の行動や決断の選択肢が増えていくのではないかと考えている。

日米学生会議に集った理由は、人それぞれで、目的意識も違うかも知れない。ただ、各人が持つ複数の目的意識のうち、何か一つ、他の人の目的意識と一致するもの、他の人と共有できるものがあれば、集団で何かしようという時、コミュニケーションも作業もずっとスムーズにゆき、深みが増す。しかし、この共有できるひとつの意識、を探すこと、あるいは一緒に作り上げてゆくことは、非常に大変なことである。しかし、困難であるからこそ、単に多様性の存在を認めるだけにとどまらず、その多様性の中から何を一つの考えや同意を生み出した時、その意義は計り知れないのだと思う。これは私が今後他者とともに働き、生活してゆく上で絶えず直面することになる挑戦であろう。

最後に、日米学生会議と私を結び付けてくれ会議を支えてくれた実行委員のみなさん、日米学生会議を居心地のよいものにしてくれた参加者のみなさんに尊敬と感謝の気持ちを表したい。

本当にありがとうございました、そしてこれからもよろしくお願いします。

佐藤陽一郎

日米学生会議という組織は、人生のステージであると言える。日米学生会議の活動は、三つの意味において、自分自身を伝え、自分を再認識し、自分を模索する場所なのである。

まず、第一点目の意味としては、自分の過去の人生を晒す舞台であるということ。日米学生会議という組織には、実に多くの個性豊かな学生達が集まっている。日本人参加者の間でさえ多様な価値観が混在しており、その中で信頼関係を醸成していくためには、自分がどんな人間

であるか、いままでの 20 年余りの間に何をしてきたかということのを伝えなくてはならない。その表現は、会話の中でもいいし、楽器を演奏するのもいいし、何でも構わない。日米学生会議という組織は、個人の価値観の表現方法や内容に関して、非常に大きいキャパシティーを有している。従って、自分の過去を他人に伝えることが求められる一方、それが受け容れられやすい空間なのである。

第二点目の意味としては、現在の自分と社会とをつなぐステージであるということ。学生というものは、所詮、「非社会人」である。即ち、自ら積極的に、自分と社会との接点の維持に努めなければ、忽ち社会の中で没的存在になってしまう。日米学生会議の活動で印象的だったのは、学生とは何か、学生として何ができるか、というような非常に抽象的な議論を皆が真剣に語り合っていたことだ。学生という社会的身分の可能性と限界を吟味した上で、社会への発信を目標に活動してきたことは、学生と社会との関係を深く考える契機となった。さらに、日米学生会議の OB、OG の期待や、官庁や企業の方々からのさまざまな応援は、学生という身分を奇貨として権利や自由を甘受してきた私に、それらと同じくらい重要である義務や責任というものを学ばせた。日米学生会議は、学生である今の自分と社会との関係を見つめ直す一つの局面であった。

第三点目としては、将来の人生を模索する場所であるということ。日米学生会議は、その活動を通じて、過去の人生で培ってきた価値観を相対化し、さらに現在の自分を社会的存在として意味付けた上で、「これから自分はどのように生きるべきか」という哲学的な問いを自問自答する場所である。異文化で育った人間とお互いの夢について深く語り合えたことは、私個人にとっては、その問いへの答えをより深いものにした。もちろん、一ヵ月という短い期間で、その問いに対する明確な答えを出すのはほぼ不可能であるし、人によっては、将来への不安や疑念を日本に持ち帰っただけの人もあるかもしれない。しかし、私に関する限り、日米学生会議の活動は、日常的な忙しさにかまけてその問いから目を逸らしがちな自分に、その問いに対して真正面から取り組む姿勢を学ばせてくれた。

日米学生会議という空間は、過去の人生を表現し、現在の自分を社会的に位置付け、未来の自分を想像するステージである。日米学生会議の活動は、哲学的な問いに対するこれらの作業が許される場であるし、そのような姿勢が求められているのである。

鹿谷幸史

私にとっての第 54 回日米学生会議を一言で集約すれば、テロ問題であったといえる。そして、それは成功と失敗が相半ばしたものであったように思われる。

「日米関係に興味がある」の共通点だけで集まり、考え方もバックグラウンドも育った環境も、ましてや話す言葉さえも違う 72 人の学生が一ヵ月間共同生活をして意見の衝突が起きないはずがない。「日米関係に興味がある」といっても、「日米関係」の何に興味を持っているかもさまざまであればなおさらである。

私個人としては、「テロ後初めて」「アメリカで開催される」と銘打ち、「現代の社会問題を問い直す」事を目的とする第 54 回日米学生会議が問い直さなければいけない最大の社会問題はテロリズムであったと思う。アメリカ史上初の本土攻撃。昂揚するナショナリズム。そして

アメリカの報復攻撃。危機にさらされてアメリカという国の本質が剥き出しになった今ほど各国の意見交換と相互理解が求められたことは、おそらく戦後なかったのではないと思う。

テロ攻撃を受けてアメリカ国民は何を感じたのか？本当にアフガニスタンを攻撃すべきだと考えていたのか？ブラウン管の中の熱狂的なナショナリストたちは本当のアメリカの姿なのか？テレビで繰り返し放映される映像を見て日本人は何を感じたのか？日本人はアメリカのアフガン攻撃をどう考えているのか？アメリカ人と共に崩れ落ちた瓦礫の前に立ち、グランドゼロを肌で感じ、焼け焦げた匂いを前にして、それでも我々日本人は報復攻撃はだめだと言い切れるのか？

おそらく、グランドゼロを目の当たりにしても被害者や現場に居合わせた人の想いの数パーセントも汲み取れはしないだろう。しかし、グランドゼロを見ないままテロを語ることは、ヒロシマを見ないまま原爆を語るようなものであり、説得力のあるものになるとは思えない。アメリカ側参加者と議論するにしても現場を見ないままでは、一方的な講話に終わってしまうように思われた。私は、どうしてもグランドゼロに行く必要があると思った。

しかし、第54回日米学生会議は、ニューヨークに行かなかった。私は抗議したが受け入れられなかった。期日直前での計画の変更はできない、安全が確保できない、グランドゼロに行かなくても、アメリカ側参加者とテロへの思いを語り合えばよいというのである。

ワシントンで国防総省を見ればよいという意見や、テロ事件について話す必要はないという意見もあった。しかし、われわれがテロ攻撃と聞いて思い出すのはなんだろうか。ほとんどの日本人は国防総省ではなく、WTCへの飛行機突入を思い出すだろう。

この点に関し、私はいまだに納得できない。テロ後初めてのアメリカ開催の会議で、しかもワシントンまで行っていながら、現場を見ずに何を語ろうというのか。私には、全てに優先して話し合わねばならないのはテロ問題に関する両国民の思いであり、それを語るにはテロの現場、それも最も衝撃的だったWTCに行き、それを見なければなにも始まらないように思えた。それが出来なかった点で今回の会議には不満が残る。

しかし、この件に関する抗議でいろんな事を学んだ。抗議する側も反論する側もお互い相手の事情や思いが良くわかっていない、そのことが、伝達方法のまずさから感情的な反発を呼び、会議に大きな波紋を呼んでしまった。まさに、第一回会議参加者が憂いた日米関係の縮図である。しかし、その後お互いのおかれた状況や考えを話す機会を持つことができ、結果的に信頼関係を持つことができた。

一人落ち込んでいた私を午前5時のロビーで励ましてくれた友人。元来あまり人間関係というものが得意ではなく、その状況にただ落ち込むだけの私に、どうすればいいか具体的な方策を示してくれた友人。私の発言を援護してくれた友人。そして私の思いを理解し、気遣ってくれたみんな。すごくうれしかった。自分のことを分かってもらえ、助けてもらえる嬉しさをこんなに感じたことはなかった。

私はこの会議を通じて人間関係の重要性とその構築の仕方を学んだ。まだうまくは実践できないが、会議で得た新しい視点は私の中に根付いている。

参加者個人の成長、その意味では、少なくとも私にとっては大いに成功した会議であったと言える。

シム ヴィリヤ

正直言って、日米学生会議への参加は私の今年の最大目標だった。しかし、本会議への出発直前、ビザが下りず、今まで抱いた大望は実現されないまま夢のように止まった。非常に残念なのは当然だが、こんな短い間に日米学生会議から得たものも少なくなかった。それは、学問的なものと貴重な人間関係そのものなのである。学問上では、日米学生会議に出会った後、自分の勉強している分野以外の文章を読み、考えるようになって、興味分野が広がった。人間関係の方は私にとって本会議の思い出を作るコアの要素である。会議そのものに参加できなくても、日米学生会議から離れることができなかつたのは、愛する友人、尊敬する友人、親しい友人がいるからである。誇りを持って、自分を日米学生会議参加者ということができるのも優秀な友人がいっぱいいるからである。

今年の夏は、私の学問上の計画には穴が空いてしまったけれど、この穴のおかげで次に行く道をしっかり決心することができた。

VISA REJECTION

An extract from my diary on July 31, 2002

"I don't hate or angry with them (the US consular office) for having rejected my visa, in contrast I'm sympathetic toward them because their decision is systematically margined by the restricted regulation. They're already the victims of blame and hatred even though they just fulfill their duty. But I'm very much disappointed that they underestimated the importance of my study in Japan. I strongly hope that this discriminating and stereotyped system toward Cambodian people will soon be lifted in the foreseeable future.

柴田綾沙美

アメリカから帰国して一週間ほどが経ったにもかかわらず、未だにあの一ヵ月をきちんと振り返ることのできない自分がある。それはあまりにも多くの未消化部分が残るからだろう。「この会議の意義とは何なのか」「私たちのやってきたことは何だったのか」それらは常に私たち実行委員に突きつけられていたといっても良い。私にとってあの一ヵ月は会議の意義を問い直されると同時に、一年間自分自身が行ってきたことと自分自身の資質を問われ続けた期間であった。私自身の考えている会議の意義と意味、それは私たちの掲げた理念に集約する。私たちの理念とは「相互理解、力の獲得、そして前進」である。そしてこれこそが日米学生会議の存在意義であると思う。昨年 53 回会議終了後からの活動の中で、第 54 回会議の意義が私たちに示されるのは、第 54 回会議活動期間中ではなく、もっと先のことであり、また、会議自体が社会にどう貢献するかは、この会議での経験を将来参加者に活かしてもらうという道しかありえないと考えていた。

それはどういうことか。そもそも我々が一ヵ月で成し遂げられることは限られている。その中で日米学生会議が何を参加者に提供できるかといえば、さまざまな苦しみや葛藤を乗り越えた経験と、一ヵ月間苦楽を共にした仲間だろう。言語の壁や文化の違いを乗り越えて、同じ目標に向かって走ること、お互いを認め、理解しようとする。その中から生まれる種々の感情をさらに乗り越えていく。そして、そこから巣立っていく。それこそが日米学生会議であり、

それだからこそ、この会議の存続が選択されてきたのではないだろうか。その限られた期間の中において、なぜ目標を掲げたかと問う人もいるだろう。なぜかといえば、その目標が達成されなかったとしても、そのプロセスのうちに、私たちの求めているものがあると思ったからである。

悔いの残るところは、多々ある。私たちの持っていた理念がうまく参加者に伝わったかどうか、この会議が参加者にとってどのようなものだったのか不安もある。しかし、それらは報告会を終えた後に、個々の参加者が日米学生会議での経験を消化しながら、一步一步進んでいくのを見て、自分自身で評価するしかない。そして自分自身の中でも、そんな彼らに恥じないように前進していかなければならないのだ。あの一ヶ月で問われ続けた問い。それらが真に力を持つてくるのは、むしろ会議活動終了後なのかもしれない。

最後に、この第54回日米学生会議にご協力いただいた方々に心より御礼申し上げます。多くの方々に支えられての、夏の会議一ヶ月間でした。本当にありがとうございました。

高沢健史

選考を終えて、この日米学生会議に参加することが決まった時、この会議を通して何か新しいものを見つけることができるのではないかと大きな目標を抱いていた。事前準備なども含めてあれから約五ヶ月。本会議の一ヶ月はもちろん、あっという間の半年であった。その目標がすべて現実になったと言ったら嘘である。むしろ、どちらかというところ、不完全燃焼で終わってしまったという気持ちが大きかった。完全燃焼という達成感は、困難に全力で立ち向かった時、または困難を克服した時に初めて得ることのできるものである。しかし、私は目標を達成するためのさまざまなチャンスをすべて生かしたかというところではない。

会議中にはいくつもの壁があった。特に英語の苦手な私にとって、ディスカッションにおけるコミュニケーションは一つの壁であった。相手の言いたいことが理解できない、それが分かっているでも自分の意見をうまく伝えることができない。たとえば、話すのが遅くとも皆は最後までじっと聞いてくれるし、言っていることが多少分からなくとも通訳をしてくれる参加者がいる。英語が話せないことが問題ではないと頭では分かっているながらも、なかなか行動にうつせない自分がそこにはいた。また、日本側参加者とアメリカ側参加者の会議における目標設定の違いも一つの壁であった。日本側参加者は事前に何度かミーティングを行う機会があり、分科会におけるある程度と同じ目標を持っていった。一方、アメリカ側参加者はネット上でのやりとりしかできなく、分科会で問題意識を共有するのにとどまるのか、それとも自分たちなりの解決法を探るのか、などというどこまで議論を深めるかというところで意識の違いがあった。このような壁がすべて解決できたとは思わない。しかし、この会議を通して、この失敗を通して、多くのことを学んだ。今後の私の人生において、この失敗を経験したことはとてもプラスに働くと思う。

会議前、今回の会議のテーマである「相互理解、力の獲得、そして前進」というこの文を聞いても、どこかピンとこなくて、ああ、そうなのかという気持ちが心のどこかにあった。会議を終えて、今もう一度今回の会議の「相互理解、力の獲得、そして前進」という理念を考えた時、会議前より親近感を感じるものになったし、少しこの理念を实践できたのではないかと思

う。相互理解だけをとっても非常に難しいもので、日本とアメリカ、それぞれの国という範疇でまとめてしまえば簡単であるが、アメリカの中でもさまざまな価値観や文化があり、日本のなかでもさまざまな価値観や文化がある。一ヵ月という長いようで短い期間で互いの全てを理解することは不可能である。しかし、そのなかでも相手に興味を持ち、そして理解しようとしたこの一ヵ月で、アメリカの多くの部分を知ることができた。それによって、たくさんの友情も生まれた。今回の理念である「相互理解、力の獲得、そして前進」は私にとって日米学生会議だけで終わるものではなく、これから社会に出て人生を歩むうえでの理念となるものであり、一生を通して探っていくテーマである。最後に、この日米学生会議を通して皆に出会えたことを本当に感謝します。ありがとう。

高橋泰美

日米学生会議に参加したことは私にとって大変意義のあることだった。私には得たものが三点ある。

第一に、自分の欠点を受け止めることができた。大学生にもなると自分の欠点や弱い部分には蓋をして、見ないようにしてしまいがちだ。大学に入ると受験を乗り越えた自信や誇りをもつようになり、それを維持したいがために、自分の弱い部分に気づいていながら正面から見つめようとしなくなってしまいがちである。私もその一人だった。しかし、会議に参加している間、英語を始めとして自分のできないことばかりで、自分の弱い部分を直視せざるをえない状況だった。会議中に発見できた自分の弱い部分は自分を成長させる上でよい材料となった。

第二に、日本に帰ってから、またこれからの生活の活力となった。会議中に自分の弱い部分、欠点を知ることができたので、日本に帰ってからはその弱点、欠点を改善できるように努力しようという向上心が生まれた。

第三に、刺激しあえる友達に会えた。日米学生会議の参加者と約一ヵ月間一緒に生活する中でいろんな人とさまざまな話をすることができ、参加者一人一人と深い人間関係を作ることができた。個人個人がそれぞれの視点をもっているのので、話をすることで物事を見る視点が広がることもできた。興味の違いや視点の違いを認識し尊重しあう関係が自然に築かれ、人の話を聞くだけでなく自分の考えも話す機会にも恵まれた。日米学生会議は自分自身を成長させるよい機会となった。

日米学生会議終了後は一人一人が違った道に進んでいくが、これからもここで出会ったことを大切に、お互いに刺激しあえる関係を保って行けたらいいと思う。

筑紫正宏

まず、日米学生会議の参加者として、自分を選んでくれた 54 回会議の日本側実行委員にお礼を述べたい。そして、日米学生会議の一ヵ月間、自分を仲間として迎え、素晴らしい時間を過ごさせてくれたすべての参加者に、そして、日米学生会議に協力してくれた全ての人に感謝の言葉を述べたいと思う。この一ヵ月の体験は自分にとって決して欠くことのできない部分になっていくであろう。その記憶は永遠に色あせることがないと思う。

自分がこの日米学生会議に期待していたのは、自分の日頃の問題意識への答えである。なぜ

アメリカはクローン研究に賛成するのか？なぜ経済的な利益があれば研究を続けていいのだろうか？なぜアメリカの人々はそれを支持するのだろうか？本当にアメリカ人がクローン研究を支持しているのだろうか？アメリカ人とはそもそも誰か？アメリカ人という集団は本当に存在するのだろうか？なぜ？どうして？世間でよく言われる、通り一遍の理由では、本当に納得することはできない。そんな想いを抱えながら、アメリカの地に足を踏み入れたように思う。

答えは見つけられなかった。語学力のせいだけではない。そもそも答えがあるかどうかもわからない。

しかし、この一ヵ月は終わりではなく、始まりに過ぎない。答えはこれからゆっくり探せばいいのだと思う。自分には十分な時間があり、学ぶべき幾多の学問があり、そして、優しい仲間たちがいる。その最初の一步として、日米学生会議という機会を得ることができたことは本当に幸せなことだ。

今、自分は日米学生会議と別れをつげ、新しい道を歩みはじめる。再びこの日米学生会議の人々と出会う時まで、自分の問題意識を何かの形にしてみたいと思う。論文かもしれないし、企画かもしれないし、文章かもしれないし、形はわからない。ただ、それこそが自分を育ててくれた日米学生会議に対しての自分なりの答えだと思うのだ。

千代明弘

2002年7月27日午後5時、成田空港。

出発ゲートの前にできた長い行列を前に私は考えていた。必死に考えていた。

今まで何をし終え、これから何をし始めるのかと。

とりあえず、ジーンズの左ポケットに手を入れ、携帯電話を取り出した。

番号を押し、親しい友人に電話をかけた。

「今までやるだけやってきた。だから、これからもやるだけやってみる」と。

電話を切った私は、大きく息を吸い込み出発ゲートへと足を進めた。

それから26日経った2002年8月21日午前10時、サンフランシスコ国際空港。

出発ゲート前には米国滞在を終えて帰国する人たちが集い、思い出話に花を咲かせていた。

この一ヵ月弱、苦楽を共にしてきた第54回日米学生会議参加者たちの顔には、

帰国を前にした安堵と、疲労と、若干の未練が浮かんでいる。

雑踏の中、出発ロビーの椅子に深く腰掛けた私は、空港特有の大きな窓を眺めていた。

窓を通して見えるのは、空港職員達のあわただしい仕事風景、巨大な航空機、

そしてサンフランシスコの青い空と赤茶けた山。

ふと気が付き、チノパンの右ポケットに手を入れると、そこには一枚のレシートがあった。

くしゃくしゃになったそれを丹念に開き、目を凝らす。

どうやらサンフランシスコで買い物をした時のレシートのようだ。

“Thank you for your coming ! See ya !”

レシートの一番下にはそう書いてあった。なんだか、無性に嬉しくなった。

私は、再びアメリカを訪れることになるだろう。

「そういう予感がする」と言った方が正しいのかもしれない。

それが実現するまでは、素晴らしい72人の仲間達と過ごしたこの夏の記憶を、遠い日本の地で何度も何度も思い返すことになるだろう。

2002年の夏を、私は生涯忘れない。

顔を上げ、窓を見る。素晴らしい天気。小さなちぎれ雲が澄み切った青空を漂う。

搭乗開始のアナウンスが入り、ロビーに少しだけ緊張感が走る。

搭乗のチェックを終え、出発ゲートをくぐった私は、もう一度後ろを振り返った。

そして、誰もいないロビーに向かって小さくつぶやいた。

「またね」、と。

私に勇気を与えてくれたレシートは空港のロビーに置いてきた。

いつか戻ってくるその日に、祈りを込めて。

出浦直子

実行委員である私は、この一年間、過去に経験したことのない、ある種の使命感に燃えて活動してきた。去年初めて会議に参加したときは、当時の実行委員たちが提供してくれたプログラムを一生懸命こなし、そこから何か得ようと必死にもがいている自分がいた。しかし、今年では自分が参加者に提供する立場に立ち、夏の貴重な一ヵ月間を日米学生会議のために費やす参加者たちをどうすれば満足させられるか、どうすれば彼らの期待に応えてあげられるか、常に考え行動してきた。

結果的に一部の参加者にとっては不満が残る会議となってしまったのは非常に残念なことであり、反省すべき点でもある。会議が十分にアカデミックでないこと、社会発信が十分にできていないことなど、特に最終サイトでは参加者の不満があらわになった。それは私を含めた実行委員の力不足が原因だったのかもしれない。

しかし、日米学生会議の経験は、その活動それ自体で終わるものではない。そこで体験し、感じ、得たものは、何年、何十年後の自分に還元されるものである。第54回日米学生会議の理念である「相互理解、『力』の獲得、そして前進」は、少なくとも個人のレベルで実現されたのだと信じている。

最後に、第54回日米学生会議を可能にしてくださった方々、そして会議を共に作り上げた実行委員ならびに参加者に心から感謝したい。

中川由紀

「実行委員を体験しなければ、本当の意味で日米学生会議を体験したことにはならない」とはよく言ったものである。第54回会議に実行委員として企画・運営に携わったこの1年は、昨年の会議にがむしゃらに取り組んだ体験とはまるで違うものであった。すべきこと、しなければならぬことを緊張感の中で常に考え続け、どうやって人をつなぐか、どうやって実現させるかということと格闘していたように思う。時には、楽しむことも忘れ、責任とプレッシ

ヤーに押しつぶされそうだった。数え切れないほど逃げ出したいと思った。しかし、湧き出す充実感と自分のできることはすべてやったのだ、という達成感と共に本会議を終えることができたのは、言うまでもなく同じ目的に向かって会議を共創しようと志す仲間、支えてくれる人々がいたからである。日本で一年間協力しあってきた実行委員はもちろんのこと、一年ぶりに再会したアメリカ側実行委員とも同じ苦しみと喜びを共有しながら会議を運営してきたこの経験は、これからの私の基礎と原動力になるであろう。

日米学生会議の活動を自己完結させるのではなく、より社会に還元していこうという第54回会議の目標はその言葉通りの意味では達成されなかったように思う。参加者がそれぞれ持ち帰ったのは、個人レベルでの相互理解であり、エンパワーメントであり、前進である。よって私たちの活動が直接的に社会に訴えかける力を持ったかどうかについては疑問に思わざるを得ない。このことは実行委員側の力不足であったかもしれない。しかし、同時に思うのは、日米学生会議とは一夏の体験に終始するものではないということである。会議でのさまざまな出会いや経験を通して自らの無力さ、非力さを痛感し、それぞれの日常に持ち帰り、それを乗り越えたときにこそ、社会の一員としての自分が試されるのかもしれない。私個人に関して述べるのであれば、今回日米の代表団をつなごうとしてきたこの思いを、社会人としても日米の橋渡しとして発展させられればと思っている。そして同じような熱を胸に励んできた私たちの活動が、今後の日米学生会議の力の土台となることを願う。

この一年間の活動は、まさしく自分のキャパシティを伸ばす絶好の機会であった。このようなチャンスを私に与えてくれた全ての人、もろい私の隣に常にいてくれた人に心から感謝したい。

西納由紀

本会議を終えて、今私が最も貴重に、そして大切に思うのは、会議を通して大勢の人々と出会えたことである。一人一人、それまではお互いの顔も名前も知らずに歩んできた72人の歩みが、この時点において、この学生会議という機会を通して交差したことに不思議と感慨を覚える。日常おかれている環境が異なり、異なったアクセントで英語を話し、異なった価値観と考え方を有している、そんな仲間が、学生という唯一の共通項によって、夏の一月を共に過ごすために集まったのだ。

学生だからできること、学生にしかできないこと。それは何か。日米学生会議に応募した当初からしばしば考えながら、未だ明確な答えは出せていない問いかけである。ただ、その「学生だからできること」に潜在的な可能性を見だし、大きく期待する思いは本会議を終えて一層強くなった。また来年の実行委員としての役割を与えられたことによって、その問いかけは、次回の学生会議へ、新たな挑戦へと身を乗り出すためのエネルギーを与えてくれた。

日米学生会議で過ごした夏は、単なる楽しい思い出には終わらない。会議を通して出会った人々の中に見たさまざまな輝き、特に、何か伝えたいこと、成し遂げたいことを心に持つ人と分かち合った熱意と取り組みの姿勢は、今後の私自身の歩みの中において常に生きた力の源泉の一つとなると思う。

乗竹亮治

8月2日夜。2002年。ワシントンD.C.

僕は数人の仲間と夜のしじまのなか、リンカーンメモリアルに佇んでいた。

アブラハム・リンカーンの巨大な石像が見つめるその先には、整然とした広がりを見せるワシントンD.C.の夜景が、煌々と照らし出されている。

この静かに鎮座するリンカーンを前に、幾人もの指導者らが演説し、幾万人もの人々が集い聞き入った。

公民権運動の指導者、キング牧師もその一人だった。

「私には夢があるのです ("I have a dream")」そう切り出したキング牧師の演説は、ここに集った幾万人もの人の心を揺さぶるのにあまりあるものだった。

数十年前、この場所にキングは立ち、熱気を帯びた人々に語りかけたのだ。ここなのだ。この場所に人々は集ったのだ。

当時のことに想いを馳せ、身震いするような感動を体の芯に覚えた。夜の闇に包まれながら、感動のあまりしばらく呆然と立ち尽くしていた。

あの感動はどこから来たのだろうか。歴史的な場所を訪れたことは幾度もある。しかし、リンカーンメモリアルで覚えたあの感動は一体なんだったのだろうか。

僕の中の何がそんなに共鳴したのだろうか、としばらく考えていた。そして、はたと思い当たった。

僕の中の何か共鳴したのではない。あの場所に僕は、共鳴し合える仲間達と立っていたのだ。そのことがあの感動を呼んだのだ。

第53回日米学生会議実行委員の一人が、第53回報告書に寄せた感想文の終わりに、高村光太郎の詩『火星が出てゐる』を引用し、以下のように結んでいる。彼の文章を読み、強く惹かれ、54回では、どんな友情の結晶を生み出せるのだろうか、と会議参加を前に思いをめぐらせていた。

「要するにどうすればいいか、といふ問は、／折角たどつた思索の道を初にかへす。／要するにどうでもいいのか。／否、否、無限大に否。／待つがいい、さうして第一の力を以つて、／そんな間に急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。／予約された結果を思ふのは卑しい。／正しい原因に生きる事、／それのみが淨い。／お前のところを更にゆすぶり返す為には、／もう一度頭を高くあげて、／この寝静まつた暗い駒込台の真上に光る／あの大きな、まつかな星をみるがいい。／真っ赤な星を見上げているのは僕一人ではないはずだ。」

8月2日夜。2002年。

真っ赤な星を見上げていたのは僕一人ではなかった。

服部高明

私は、2002年の7月27日から8月22日まで第54回日米学生会議に参加した。日本側参加者35名、アメリカ側参加者36名の総計71名で、ワシントンD.C., オハイオ州のオーバリン、バークレイ、サンディエゴと巡りながら、現代の社会問題について議論を重ねた。

正直、私は日米学生会議に本当に参加するかどうか、アメリカに行く直前まで迷い続けてい

た。もともと一ヵ月しかない夏休みに、そのまま一ヵ月を必要とすること。さらに休み明けに重要なテストがあるので、アメリカでも相当勉強をしなければならないこと。また、一度大学院を出ている自分の経歴からして、学生達と専門外の議論に一ヵ月を使うことが有益であるか迷ったこと。医学生としてそろそろ本業に専念すべきではないだろうか？などなど、いろいろな迷いが去来した。しかし、やはり行くことに決めたのは、行ったことのないアメリカにおいての開催であり、英語の勉強にもなるし、他分野のことを学ぶ機会になるからというものであった。

今回、私はアメリカに初めて行ったので、何もかもが新鮮だった。まず空港に降り立って、歩いている人たちの圧倒的な肥満度にまず驚いた。医学生として当然、「これは遺伝体質なのか、生活習慣なのか、そのお互いの寄与度は？」と考えてしまった。アメリカで見た最もショッキングな場面の一つであった。私達もアメリカの大学のカフェテリアで食事したが、好きなだけ食事を注文できるバイキング方式だった。これではいくらでも食べられるし、同じ値段ならもっと食べようと思ってしまい、肥満を促進してしまう。環境問題の一つに食糧問題も含まれるはずだが、まさに飽食を体現するアメリカの現状を見て、食料分配について改めて考えた。

アメリカでは英語にかなり苦労した。特に聞くことの難しさを痛感した。日本語なら議論しつつ、わずかな言葉の誤謬へも反応することができるが、英語ではとてもそれは難しかった。改めて、英語というのは“potential”なのだと痛感した。日本に住んでいる限り、英語はほとんど本質的には必要ない。しかし、一度海外に出て、議論する状況に入ったとき、いかに多くのものを汲み取り、力強く切り返せるか、その能力は深く英語に依存していることを痛感した。自分の日本で持っている能力に、英語力(0~1)が係数として掛けられて、最終的な海外での能力となる。英語力が低ければ、当然ながら能力を十分に発揮することができない。そうした“potential”としての英語が、問われる場面がいくつもあったように思う。人に会って、できるなら多くの人と多くのものを共有したいと願っている自分にとってこの再認識は強い印象を残した。

私は環境問題の分科会に所属したが、八人の参加者ととも四つのフィールドトリップを行い、自分達を書いてきた論文に基づいて議論をした。環境問題は、現実的かつ具体的な問題であり、多方面からのアプローチを必要としている。専門分野と興味の違う参加者が、それぞれの視点を互いに提示して行う議論はなかなか興味深かった。二酸化炭素の排出削減について、アメリカの学生達も、アメリカは京都議定書に参加すべきだと主張していた。特に9月11日のテロをめぐる国際的な協力を受けて、アメリカも環境問題をめぐる国際的協調が強く求められていくはずだとの指摘は興味深かった。しかしながら、ブッシュは2002年8月末のヨハネスブルグでの環境開発サミットに参加していない。その他、環境に配慮した都市計画、代替エネルギー源の導入などを用いることで、積極的に環境問題に取り組んでいく可能性について議論をした。私は自分の修士課程での研究を生かして、環境ホルモンについて発表をした。アメリカ側参加者にも分かりやすかったと言ってもらえ、いろいろな論点も共有できて良い機会となった。環境問題を議論することで、いろいろな分野の方法論や視点を知りたいという自分の当初の動機は満たされたように思っている。

公式行事以外でも、日本の学生やアメリカの学生とパーティー、タレントショー、夜の飲み

会、宿舎のラウンジなどを通して交流できたのも楽しかった。タレントショーでは、自分が七年続けてきた柔道を見せた。筑紫君を相手に手加減せず投げて立ち技を披露したので、柔道の激しい投げ込みに見慣れないアメリカ側参加者達はびっくりしてしまったようだった。その他、みんなとアルコールを飲んだりして、踊ったり、遅くまで騒いでいたのも楽しい思い出となっている。また今回は、国際関係、政治学、ビジネス、法律など、自分が今まで知らなかった分野について、熱っぽく語る人たちに出会えたことも貴重な機会となった。その時ごとに私なりにいろいろと質問をさせてもらって興味を分けてもらえたことを幸いに思っている。またアメリカについてもいろいろと学ぶ機会ともなった。日本に戻った今、以前よりずっと新聞記事やニュースに親近感を持てるようになった。

その他、多く観光やフィールドトリップにも行った。ワシントンD.C.では、ホワイトハウス、議会、スミソニアン博物館などを見学した。また環境保護省、エネルギー部門なども訪ねて、直接、アメリカの環境問題とその指針について話を聞いた。また駐米日本大使館においては、加藤良三大使も列席するなかレセプションを催していただいた。第二のサイトとなったオハイオ州のオーバリン大学では、米国で初めてアフリカンアメリカンに門戸を開いた歴史を聞いたり、環境技術の研究所を訪ねたりした。近くのケースウェスタンレジスター大学では、自分の身近な知見に関するノーベル賞受賞者の多さに驚いた。第三のサイトであるバークレーに滞在した時は、UCバークレーに滞在し、ペイエリアエコノミックスという民間団体による環境的な都市計画の試みについて伺った。またサンフランシスコにも行き、ゴールデンゲートブリッジを自転車で渡ったり、市街を歩いて坂の街を実感した。第四サイトであるサンディエゴでは最終的な分科会ごとのまとめを発表するフォーラムを催した。また、メキシコ系移民の方の家でホームステイをさせて頂く機会もあり、スペインとアメリカとに翻弄された歴史を垣間見る思いがした。そして8月22日には私たちは成田空港に無事到着した。

こうして私たちの第54回日米学生会議は終わった。アメリカに行く前は参加することを迷っていたが、帰国してみると予想以上に実りは多かったように思っている。一カ月の集団生活の中で人間関係についていくつか学ぶ機会を得たし、自分の知らなかった社会的な知見や興味を分けてもらうことができたと思っている。今回得た問題意識をこの先の日常生活の中でも活かしていくことで、最終的な私の日米学生会議の実りへと結び付けてゆきたいものである。来年度、私はアメリカや別の海外の病院で医学の臨床研修をしたいと希望しているが、そこまでの自分の道のりを今回改めて確認することができたように思う。今、新たな目標を設定して、新たな努力を始めたところである。良き機会と貴重な出会いを与えてくれた日米学生会議に深く感謝している。

福田潤一

私は普段は過去を振り返らない。何故ならば未来に起こることは既に起こってしまった事象に比べて格段の重要性を持つからだ。過去を振り返ることは主に後悔の源泉となり、あまり建設的でない場合が多い。しかし日米学生会議の場合は特別というべきだろう。本会議中に感じた多くのことは、そのまま次の問題意識となって未来に投射出来そうである。集団行動そのもの、分科会、出会いの三つから振り返ってみよう。

集団行動については多くの新しい視点を得た。まず、多人数で普通にディスカッションをしても決まらない時は決まらないのだということ。ワシントンD.C.におけるNYへ行くかどうかの議論を通してこのような時は主に二つの解決法があるのでないかという着想を得た。A. 強力なリーダーによる議論の纏め上げ、B. グループを分割しての効率的な議論、の二点である。結局リーダーがいなければ議論は拡散してしまい収斂せず、それも小さいグループ（最大4~6人？）で無ければ全員の納得を十分に引き出せない。議論の整理に関するこの教訓は日米学生会議のみならず、今後の私の活動全般に対する教訓となった。

分科会については多くの反省が残っているが、そこから教訓を学び取るとすれば以下の点だろう。まず、分科会においても集団行動の問題が生じるということ。お互いの関心が大きく異なる状況において、全員の関心を纏め上げるリーダーが不在であれば議論は収斂しない。問題は誰がそのリーダーを務めるかである。この点に関し、私のイニシアチブが足りなかったかと少々後悔している。次に、英語である。米国人の議論に当意即妙に答えるには私の会話力はいまだ未熟だという実感を抱いている。この点は来年にかけて解決を図らねばなるまい。最後にコミュニケーションの不足である。学術的対話を行うにも親密な個人的関係が不可欠であるが、それが十分図られていなかった。運もあるが、次回このような局面でどうすべきかの貴重な教訓となった。

出会いは未来に最も関連を持つ要素の一つである。日米学生会議に参加して良かったと思うのは、多くの素晴らしい友人を作ることが出来たと思うからである。人間のアイデンティティは他者との接触を通じて形成される。日米学生会議の人々は、福田潤一という一個の存在を映し出す鏡として理想的な人々であった。かつても多くの人々との交流を通じて人格の形成に努めてきたが、日米学生会議の人々はA. 人間としての奥深さ、B. コミュニケーション能力、の二点において最高レベルの人たちであった。打てば響くような人たちの中で一ヵ月を過ごせたのは真に幸運であり、その中で以前は考えなかった自分の新たな可能性についても気づいた気がする。未来へ繋がる人々との出会いが日米学生会議の最高の価値である。

ポスト本会議を生きる私にとって、日米学生会議を振り返ることの意義とは何か。それは、過去との対話を通して新たな可能性を自分に与えていくことである。「問い直す」という会議のテーマは、この観点から言っても会議に相応しいテーマであった。

藤田葵

「日本の『国益』のみならず、日本が関係を結ぶ国の『国益』にかなう外交を創る」という私の一大目的を達成するための課題が日米学生会議に参加するにあたり、二つあった。第一点は、教養(知識、外部からのインプットにとどまらず、それを自分の中で消化したうえで、人に伝える力)の獲得。第二点は、"Little has changed in the relation between U.S. and Japan, during these 150 years." (Walter LaFeber "Crash") の言葉の信憑性を日米関係史の視点に基づき確かめるということである。

一月は、このような大それた課題を達成するには短すぎるのは分かっていたながら、敢えて自分に課した課題であった。この目的にいかにか近づくことができたかを振り返ったうえで、今後の課題を確認したい。

まず第一点について。反省すべきは、さまざまな分野において、事前準備が足りなかったことである。英語運用能力の向上努力、分科会の議論、本会議中の講演会やパネルディスカッションで取り上げられるであろうテーマなど、準備不足であったため、英語そのものについてゆくことも、内容消化もできなかった議論もある。しかし、何とか議論や講演にコミットしようと努力した結果、一部の議論は初耳であったが、先入観を持たずに参加でき、既存の自分の知識で対応できる議論は、それを英語でぶつけ合うことがよい訓練となった。自分の考えを人に伝えるという作業は、ことにその手段が外国語となった時、**native tongue** を使うのに比べて倍以上の難しさを伴うが、今回、時に十分に伝えられない悔しさを、時に相手に分かってもらえた喜びを感じられたことは、自分の自信につながるとともに、自分を伝えるということにおいて常に「他者」を意識し謙虚であらねばならないと、自分を見直すチャンスにもなった。

第二点は私にとって生涯のテーマと言ってもよいが、達成の一步となればと思って課した。会議中は毎日の日程をこなすだけで精一杯で、自分の個別的テーマに立ち戻る余裕がなかった。それを反省しつつ、今回達成できなかったこの目的については、来年 2003 年、「ペリー来航 150 周年」を迎える日本で、自分なりの中間的結論を出せればと思っている。今後の日米関係を考えるうえで、常に反省材料として慎重に省みられるべき 150 年にわたる両国関係を「ほとんど変わっていない」と言っていた LaFeber の言葉の衝撃を忘れずに、この課題に向き合っていきたい。

本会議が終わり、当初の課題の位置付けを確認した今、私の一大目的が少々変わった。「日本の "National Well-being" のみならず、日本が関係を結ぶ国の "Well-being" を目指す外交を創る」「国益」も "National Well-being" も自分なりの定義ができていないのだが、後者の方が私には受け止めやすい。目的が定まり、では次にそれを達成するための課題を自分に課さねばなるまい。「ペリー来航 150 周年」を迎える日本で、LaFeber の言葉を確認し、次なる課題はしかし、未だ具体的な形は遠く霞んでいる。

古川敏明

日米学生会議の醍醐味は、日米の学生が集う夏の本会議にあるといえる。しかし、僕自身は、参加者の選考というプロセスで、それに勝るとも劣らない強いインパクトを受けた。選考に携わただけで、一年間実行委員としての活動をしてきて本当に良かったと思えるほどである。第 54 回会議には、例年にも増して多くの応募があり、実行委員会としてはうれしい悲鳴をあげていたが、応募用紙を読み、応募者の水準が高いこと、さらに、多くの人が参加に対して並々ならぬ思いを持っていることが分かってくると、非常な緊張感に襲われることとなった。その後の応募者との面接では、さまざまな個性を持った人たちが、思いの丈をぶつけてきた。そのことに、圧倒され、心底感動し、それと同時に、何としても彼、彼女らに密度の濃い時間を提供しなければならぬと思った。

参加者決定後は、事前活動から本会議に渡るまで、やはり数多くの問題が生じることになった。そうした問題の中でも、参加者の一人が本会議中に的確に指摘したように、プログラム全体の運営、特に、分科会の運営において、コーディネータである実行委員がどこまでイニシアチブを取るべきかということが大きな問題になっていた。物事を効率よく進めるということは

もちろん大切なことなのだが、参加者一人一人の意見をじっくり聞きたいというのが実行委員に共通のスタンスだった。しかし、そうした態度が、専門的知識の不足や段取り上の不手際に対する言い訳として使われていた可能性は否定できない。分科会コーディネートの経験を通じ、自分の学びだけでなく、集団の学びをデザインすることの困難を痛感することとなった。

本会議中は、英文エッセイやそれに付随する議論、さらにその他の活動を通じ、参加者の一人一人が独自の「憧れ」を持っていることに気付くことができた。つまり、それぞれが、自らの学びに対し大変な情熱を持っているということである。僕はそうした情熱に惹き付けられ、参加者一人一人から大変な刺激を受けた。こうしたことは、僕だけでなく、多くの人が感じていることに違いないが、参加者間には、まさに「憧れに憧れる」という図式が成立していたと言える。実行委員会が目指していたのはまさにこうした場の創造であり、至らないところも多々あったが、参加者個々人が持つ独特のスタイルをぶつけ合い、「クリエイティブな関係性」を築くための環境は提供できたと確信している。

来年の実行委員たちは、こうした場の創造だけに満足せず、第54回で十分には問い直すことができなかつた諸問題に加え、そもそも日米間で議論することの意義、それに学生会議自体の意義などに対して正面から取り組もうとしている。まだまだ先は長いけれども、来夏、日本開催となる第55回日米学生会議は、参加者はもちろん、社会に対しても、きっと今年以上のインパクトを生み出す、すばらしい創造の場になることだろう。

堀抜功二

私にとって、第54回日米学生会議とは、「新たな世界」への旅立ちであった。新たな人々との出会い、新たな活動、新たな経験、新たな考え方。私は新たな自分の、そして日米学生会議の可能性を垣間見ることができた。

私をこの会議へ導いてくれた先輩は、かつて次のように言った。「自分の狭い殻に閉じこもることなく、外の世界を見ろ」と。一見広いように見えた大学生活というのものも、実は狭い。「井の中の蛙、大海を知らず」という諺のとおり、私は何も知らなかつたし、自分を客観視できていなかった。そんな私にとって、5月の合宿、6月の防衛大学校見学、勉強会、そしてアメリカでの本会議は、まさに「新しい世界」であった。

それでは、この「新しい世界」はどのようなものであったのだろうか。

日米学生会議には、学問的にも人間的にも、そしてその他のことについても奥の深い人間が集まっている。このような人間が集まる刺激的な環境での一ヵ月間は、非常に貴重な経験である。これは日米学生会議の大方の参加者が同意することであろう。このような機会は、個々人としての成長に寄与することはもちろん、日米学生会議の成熟、そして中長期的には社会への貢献に一定の役割を果たすものであると確信した。

また、当然のことながら、改めて「米国」そして「日米」というものについて考えさせられた。われわれは時として、米国に関するどのような事象でも「米国」という一括りで見てしまう。そして、それが「嫌米」や「反米」感情に発展することが多々ある。しかし、それは一面で真実であるが、他方で真実でない場合が多い。例えば9.11の議論をみても、メディアからの情報とアメリカ側参加者の意見、感想などのギャップに驚きを隠しえなかつた。多様なチャン

ネルとパースペクティブの重要性を、改めて認識した。

しかし、日米学生会議という「新しい世界」のすべてに満足したわけではない。

例えば、「もっと多くの議論をしたい」という強い欲求があった。しかし、それをするには自分の語学力と知識があまりにも足りなかった。これは、日米学生会議に対する不満ではなく、自分自身に対する不満である。「もっと何かできたのではないか？」と会議終了後に強く思ったのは、このせいである。

内省のない発展はない。このような思いから、私は第 55 回日米学生会議の日本側実行委員となった。2003 年の夏に向けて、アメリカで感じ、思い、考えたことを忘れずに活動が続けていきたい。それは、取りも直さず日米学生会議の継続と発展、新しい参加者への機会提供、日米関係の再認識、そして未だ自分の知らない「新しい世界」の発見に繋がるであろう。

増谷康

頭の片隅にはいつも第 1 回会議があった。1934 年日本の満州侵攻を受けアメリカとの関係悪化を懸念した日本人学生 4 名が立ち上がり日米双方における「草の根学生会議」の開催を目指して東奔西走したという史実——この原点を思い起こすたびに現代の学生会議との隔世の感が拭えない。

現代は猫もノビタも留学する時代——。そんなことを冗談で言い合った。確かに 70 年前とは時代状況が大きく異なる。だが、現代を生きる私たちにも、社会に対して（あるいは日米関係に対して）何か貢献できることがあるはずだ。私たちは渡航前よりインターネットなどを通じて意見交換を行い、会議の意義、目的などについて何度も話し合った。だが会議参加を通しての「自己成長」という目的以外、積極的な意義は見つからないまま渡米の日を迎えることになる。

いざ本会議がはじまると私（たち）の不満は爆発した。特に今回は昨年 9 月 11 日同時多発テロ後初めての会議開催。テロリズムというテーマに日米双方の視点から取り組んでみたいという思いがあり、会議中のニューヨーク訪問を強く希望した。だが（日程変更も生じさせずまた完全に私費で行くという提案にもかかわらず）この要望は大きな反対を受けることになる。学生会議でありながら、学生の自由な意思もまかり通らないような会議のあり方に失望感を感じた。

分科会も後半になると「議論」というよりも「口論」の方が多くなった。フォーラム（報告会）での発表方法をめぐって、全員の意見を発表するか、一部の意見だけを報告するかで意見が分かれた。私は前者の立場を強く主張したが、結局グループとしては議論の統一性を優先させるため後者を選択することになる。もちろん、どちらかが正しいという議論ではない。だが、私たちがそれだけ「社会的アウトプット」の場として期待を寄せたフォーラムには十数名ばかりの来客しか現れず（しかもほとんどがホストファミリー）、ブース（展示）を見に来る者もほとんどなかった。完全な内輪の発表会であった。

他の学生団体等が私たちより少ない人、資金、期間でより多くの結果を出していることを見るにつけ、学生会議との差を感じずにはいられない。本会議から帰国すると、ピースボートが国後島訪問をめぐって世間を騒がせていた。ささやかな抵抗にせよ、自分たちの主張を押し通

している姿には非政府組織としてのあるべき姿を見る思いがした。

学生会議の現代的意義とは何なのか。社会に対して何らかのアウトプットを主張するのか、あるいは会議参加を通して自己成長を実現する場であるのか。もちろんどちらかを選択しなければならないという問題でもない。だが今後の会議継続にあたって、この問題を避けて通ることはできないだろう。会議の原点は「対話」することを通して相手の立場を理解し、また自分たちの問題意識を相手にぶつきたいと思う心にある。個人的には相手との「対話」を通して、(共通の認識は得られずとも)それぞれの考えや立場の違いを理解するという目標までは達せられたように思う。学生会議を通して学んだ「対話」することの姿勢を今後も継続していきたいと思う。

松岡洋平

自分にとって、今回の会議を総括して一言で表現しろといわれれば、「アメリカの多様性に触れた」という言葉が一番しっくりくるように思う。この国は自分が創造していた以上に多様で、複雑で、危険で、それでいて無限のパワーがあって、懐かしさも持っていて……。国としての多様性はもちろん、そのなかにいる人々の多様性に由来するものであり、アメリカの多様性とアメリカ人の多様性、この二つの多様性を実感し、ぶちあたり、少しずつ理解し、そして好きになった。それと同時に、今まで気づくことのなかった多様性にも目が開かれた。それは自分自身の多様性だ。これまで無意識のうちに自分で自分の意志を制限していたことに気づき、その制限を少し越えたところに新たな自分を発見することができたように思う。

また、分科会で痛感したことは英語力はもちろんのこと、ある人間が話す言葉を理解するには、言葉の理解だけでなく、それを話す人間の理解が必要だということ、ひいていえばその人がなぜそう思うようになったのかというコンテキストや社会など、その人を取り巻く環境を理解することなしに言葉を理解することはできないのだと痛感した。

同じ環境で生まれ育ち、同じ言葉を話す人たちと普段接しているときには、無意識にお互いを理解しあう部分がある。しかし、バックグラウンドはもちろん、異なる文化、環境で生まれ育った人たちとなるとお互いを理解しようという気持ちが空回りしてうまくいかない、ということを経験した。

これからビジネスの世界に足を踏み入れる自分だが、今、自分の立っている位置と、これから立ちとうとする位置と、それを考えるにあたって日米学生会議は本当にいい機会だったと思う。人を幸せにする、ということを実現するためにもっとも必要な人の理解。それもこれまでは、全く出会う機会のなかった人々と出会い、語らい、議論し、遊ぶという経験は本当に貴重なものだと思う。

水本憲治

まず、組織としての日米学生会議について考えたい。

最近、真っ白なノートを好むようになった。自由に好きなものを描けるから。

今回もノートを渡された。しかし忘れてはいけないのは、渡されたノートのタイトルは「日米学生会議」であり、ゆえに、さまざまな制約と可能性を併せ持っているということである。

事前、事後活動における距離的、時間的制約、本会議中における各個人の姿勢の差。そして、日米学生会議に流れるこれまでの歴史と伝統の重み。これらに代表されるものは、本を手渡された時から、その表紙や描く道具などの「形」として在るのであり、これらの存在を認め、何を描けるのか考慮に入れること。その上で、ページいっぱいまで、自らの手で、時には他者の手によって、描いていくことが、満足のいくノートに仕立てるに不可欠な要素であると感じた。

次に、日米学生会議における個人的体験について述べる。

楽しかった。過ぎ去った時には、往々にしてそう感じるのかもしれない。だが、26日間で、隣には約70人もの仲間がいて、しかもツワモノばかりなのである。他の人の取り組みや、自身ががっぷりよつになってみることで、等身大の自分の姿が見えてくる。意見の違い、思考回路の違い、そもそもの視点の違い。また、自分の得手不得手。それらがみえてくる頃には、自分のフィールド外のことを、信頼する仲間任せられるようになっていた。

そして、会議への主要な参加動機であった、アメリカ人の感性の理解という点では、十分な感覚を得られたとは正直いいがたい。しかし、同じ「ヒトとして」という根源的なところで触れ合ううちに、結果として現れる行動様式に対しては理解ができるようになったことは、大きな収穫であったと思う。

自分の姿、そして、信頼できる仲間たち。これが日米学生会議を通して得ることができた大きな財産だと思う。

宮下紘

"Expect the unexpected."

日米学生会議であるからこそ、自らが期待していたことを期待するというよりは、むしろ予期せぬ何かを期待していた。

しかしながら、一面において、“Mutual Understanding, Empowerment and Progress”という大それた理念を掲げた会議そのものの意義を問い直すとき自らの学生としての非力に決して樂觀することはできなかった。そして、そこには会議に参加する以前からこの崇高な理念の多幸福感に酔うことのできない自分がいた。

日米学生会議には、異質な他者との開かれた対話の中に未知の領域と可能性を発見するだけの自律した個人がいる。一ヵ月間の異国の地における共同生活の中、70人ほどの確固たるアイデンティティを持つ個人が多様な議論を重ね、相互啓発をする環境はまさに日常とはいいがたいものであった。日米学生会議という非日常的な環境が、日常に埋没し疲弊していた自分に新たな自分を発見させてくれた。日米学生会議での出来事を反芻すると、そこには今までの自分と新たな自分がある。過去の自分と現在の自分の“Mutual Understanding”、そして新たな自分の“Empowerment and Progress”。ここに偶然にも自身の“Mutual Understanding, Empowerment and Progress”の一抔を発見したのであった。

しかし、“Mutual Understanding, Empowerment and Progress”を一種の代償満足として自己理念化するのではなく、他者との関係、さらには日米関係にもこの理念を見出そうとするのであれば、日米学生会議はここで終わったわけではない。

日米学生会議の理念を思い起こしたとき、そこには自分がいた。日米学生会議での出来事を

謳歌しながら、精進していきたい。

日米学生会議思う、故に我あり。これこそ日米学生会議が与えてくれた予期せぬ何かなのだろう。

森川幹人

私が日米学生会議を通して出会った貴重なもの。それはリアリストとしての考え方である。理想を夢想するだけで自己満足していた私は、現実をみていなかった。それを強烈に自覚させられた。

まずは国際政治に関して。日米学生会議を通して語られる日米関係では、国際交流や相互理解が強調される。しかし、両国ともそれぞれの国益のために協力もするし争いもする。そして、私は日本という国家に守られて生きている。

次に異文化交流に関して。それはとてもタフで疲れるものだった。心の中で日米という壁を作ってしまう自分がいた。相手を国籍で判断するのではなく、自立した個人として考えるべき。頭の中ではよく分かっている。だがそこに険しい壁がある。私はまだそれを乗り越えることができなかった。

ただ、異文化の定義自体がとても主観的であることを実感できた。AとBがお互いに異質であると思っても、AとBの前により異質な存在が現れれば、AとBは同質なものになれる。要は程度の問題であり、とても主観的なものだ。

日米学生会議を経て、私は日本人学生とより仲良くなったと感じる。内面に迫ったより本質的な対話ができしたのは、日本人学生との場合が多かった。春合宿のときはぎこちなかった人間関係が、本会議を通して、またアメリカという異質な存在に出会うことで変わっていった。

たしかに度合いとしては、日本人学生と接する時間が長かったことは否めない。しかし、文化や国に関係なくして仲良くなったアメリカ人学生にも出会った。彼らと話すことで、アメリカの多様性を垣間見ることができた。同時に、その多様さを束ねていくのがいかに大きな課題であるかは、日本で生まれ育った私にはなかなか想像できないことだった。私の英語力不足によって、アメリカ人との対話が困難かつ不十分に終わってしまったことは残念であったが、それは私に大きな目標を残してくれた。

ただ、自分と異質なものに対して心を開いて向かっていくことが異文化交流の本質であるならば、私は結局それから逃げてしまった。異文化交流はとても根気のいることだし、また自分の弱さをさらけ出すことでもある。そのためには強い個人が求められる。それが日米学生会議を通して私が見つけた課題である。自分の弱さ、小ささを直視させられた。これはけっこう骨の折れる経験だったが、とても貴重だった。

また、人間にとって本当に大切なことは、現実だけを見ていたのでは発見できないことも多いと感じた。現実の厳しさを知らない者の理想は、時に青臭く、偽善に満ちている。しかし、目指すべき理想や希望を抱き続けることは、生きていくうえで大切なものではないか。時には、恥ずかしくなるぐらいのナイーブさがあってもいいのではないだろうか。

日米学生会議では、一人で旅するときとは異なる孤独を感じるが多かった。感じるとは、本を読んで頭で理解することとは異なるものだ。四週間という時間の流れにおいて、悩み、笑

い、対話をする中で結晶化されたものである。一人でいることの孤独と、人の中において感じる孤独。二つの孤独を体で感じる事ができた。それを忘れないでいられれば、相手に対する想像力を少しでも豊かにすることができるのではないか。もう少し相手が存在することに敏感になれるし、自分だけの正義や価値観を振り回すことにもっと懐疑的になれるのではないか。

日米学生会議では、劣等感を感じる事がしばしばあった。それは通奏低音のように、ずっと自分の頭に響き続けていたと思う。自分にとって魅力的な参加者が多すぎるほどいたことが理由かもしれないし、集団で生活するプレッシャーが理由だったかもしれない。お互いに異なる自分と相手が日米学生会議という舞台で出会い、羨望、劣等感、孤独、いろいろな感情を抱いて葛藤する時間があつた。しかし、日米学生会議も終わりに近づいた頃、多くの対話をして、お互いが心の内で感じていたことをちょっぴり共有できた。そして新しい発見があつた。だんだんと劣等感を感じる必要はないのだと思い始めた。みんなも自分と同じように、悩んでいた。最後に参加学生どうしでメッセージを交換する中で、自分もまた日米学生会議における大切な参加者の一人であつたことを実感することができた。そんな出会いと発見は、私にとって未来につながる希望だ。

最後に、実行委員の皆に感謝したい。あなたたちにとって日米学生会議が持つ意味は、私には想像もできないほど大きなものだと思う。それは、あなたたちが日米学生会議に投じてきたものの大きさに比例するものだから。どんなに素晴らしい機会が提供されようと、それに対して主体的に行動し、また全力をもって向かっていかなければ、得るものは少ない。日米学生会議にも多くの批判があるだろう。それはそれで考えていく必要があると思う。しかし、日米学生会議がどれほどのインパクトをもって自分に跳ね返ってきたか否かは、ひとえにその人の行動にかかっている。もちろん、あなたたちもいろいろと悔やんでいることもあるだろう。でも、少なくとも私の立場から言わせてもらえば、なるべく客観的に見て、やっぱり皆の頑張りはずごかつた。

そして、新しい実行委員会のみinnにも同じ言葉を贈りたい。

守屋彰人

最初に、このような貴重な機会を与えてくださった協賛団体、実行委員、日米双方の参加者など、全ての方々に感謝の意を表したい。日米学生会議は、学生生活最後の夏にふさわしい素晴らしい環境を我々に与えてくれた。日米で協力すべき課題を通じて、各自の問題意識を再認識すると同時に、多様なバックグラウンドと価値観を持つ学生の間でのディスカッションの難しさなどを学んだ。そして、何事にも変えがたい日米間での友情を得た。しかしながら、やればできるかもしれないのに、挑戦しないで現状満足することにもどかしさを感じ、アメリカにまで来て何もできない自分が耐えがたかつた。社会に出ると、立場を伴い、外圧も生じ、言論の自由さえ奪われる可能性がある。私は教育分科会だったが、学生という教育の当事者に携わっているにもかかわらず、新たな具体的提案をせずにして終わるのが悔しかつた。この経験を無駄にしないよう、残り半年の学生生活と、自ら立ち上げた学生団体 SBA で、自分の考えを、立場を超えて実現していきたい。また、日米学生会議参加者との密な交流をいつまでも続けることに努めたい。将来は、どんなささいなことでも良いから、日本を変えて、より良くしてい

きたい。

日本に、最も足りないことを述べて、感想を終わりにしたい。社会の現実に対して「知っている」という人は多い。しかし、「問題点や解決策の気付き」がある人は少ないと思う。だから社会には矛盾が多いし、納得のいかないことが多い。「知っている」ということと「気付いている」ということの違いは何か。例えば、煙草が体に良くないなんて「知っている」が、実際に煙草の害が自分の身に起きていないから煙草をやめない。「気付いていない」。もし、健康診断に行つて「肺ガンですよ」と言われたら、一般的に考えると煙草が体に良くないということに「気付き」すぐに煙草をやめるだろう。戦争が良くない、偏差値で判断するのは良くない、差別をするのは良くない。そんなことは全部知っている。でも気付いていないだけ。だから歴史は繰り返すのだと思う。「気付き」というのは行動を起こすための最初の出発点ではないかと思う。しかし、世の中にはさまざまな人がいて、価値観も多様、「気付き」の基準もさまざまであるし、「気付いても」行動しない人も多い。だから世の中うまくいかないことも多いのだろう。ここに書いたことは、当たり前なことだが、当たり前であるが故に見落としがちであることが多い。だからこそ、一人一人が、気付こうとする意志、気付いたことに対する行動心がけて生活して行ってほしい。なかなか難しいが、それを実現できれば良い社会になるのではないだろうか。

山田哲平

日米学生会議を終えてみて、何か自分に変化があったのかと考えてみる。少なくとも、この学生会議がどういうものかはある程度知ることができた。それには応募する前にテレビや報告書で見て持ったイメージを修正する別の面が多くある。例としては基本的に会議を参加者で作っていくという方針があることや、会議中にも公的、私的にこのプログラムの意義や目的自体について不断に話し合われること、通訳作業が課題となったということ、アカデミックな活動よりも参加者間の交流が実質的に会議の中心と考えられている場合が多いことなどがあり、会議を固定された厳格なものに考える見方を変えるものがあつた。

個人的には、春合宿の時から会議自体や他の参加者に圧倒され続けてきた。それが一ヵ月行動をともにしてさまざまな意味での限界が見え、冷静に眺めることができるようになった気がする。また、終わった後、心理的に日常生活に慣れるのに苦勞するほど、会議の間自分にとって密度の濃い生活を送ることができた。会議への適応に苦勞することもあつたが、参加前に予想しなかつた形で自分に大きな影響を与えたことは確かだ。会議中は渦中にははつきりと分からなかつたが、今は日米学生会議に参加できて本当に良かったと思う。

米田綾子

日米学生会議で過ごしたこの夏は、私にとってまさに怒涛のような一ヵ月間だった。最初ワシントンD.C.に着いた時はまだ時差ボケも治らないままにオリエンテーションが終了し、それからあつという間に三つのサイトが移り変わって気付けばサンディエゴにいた、という感じだった。それだけ私たちが共有していた時間は密度の濃いものだったのだろう。けれど日米学生会議を通して得た最も貴重なものは、72人の日米学生会議参加者たちとの出会いである。アメ

リカに到着してから私が常に心がけていたのはなるべくたくさんの人と出来るだけ話をする事だったのだが、アメリカ側、日本側を問わず、参加者には常に刺激を受けっぱなしだった。何だかんだ言って普段の大学生活では似たもの同士で固まりがちだが、ここで会った人々は皆さまざまな興味、関心を持ち、さらに、それぞれが素晴らしい持ち味を備えていた。

そのような人々に囲まれて毎日が興奮と緊張の連続だったが、自分でも驚いたのは、こんなに大勢の集団の中で行動していてこれ程までリラックスし *be myself* でいられたことは今まで一度もなかったことだ。高校でも大学のサークルでも、私は良い意味で肩の力を抜いて人と向き合うことがなかなか出来なかった。もしかしたらそれは単に環境の変化や母語以外の言語を使用している開放感といった一時的な要因によるものだったかも知れない。うまく説明することは未だにできないが、彼らと一緒に過ごすことで自分自身の本来の姿がよりはっきり見えてきたことは確かだ。とはいえ日米学生会議で十分満足できる活動が出来たかと言うと、英語力を始め分科会テーマに関する勉強不足など、心残りな点があるのも事実である。

最終日が近づくにつれ、私はしきりに「日本に戻るのが怖い。」と周囲に漏らしていた。あまりにも非日常で、青い海と突きぬけるような空に囲まれた世界から現実世界に帰ることに怖れを感じていたのだ。しかし、一カ月の会議は既に終わってしまい、残ったのは山のような数の写真と最後の夜に寄せ書きされたプレートだ。私の生活はこの東京で日々流れていく。自分が会議中に出来なかったことを含め、全ての経験を今後に生かすことなしには、私の日米学生会議体験は終わったと言えないだろう。

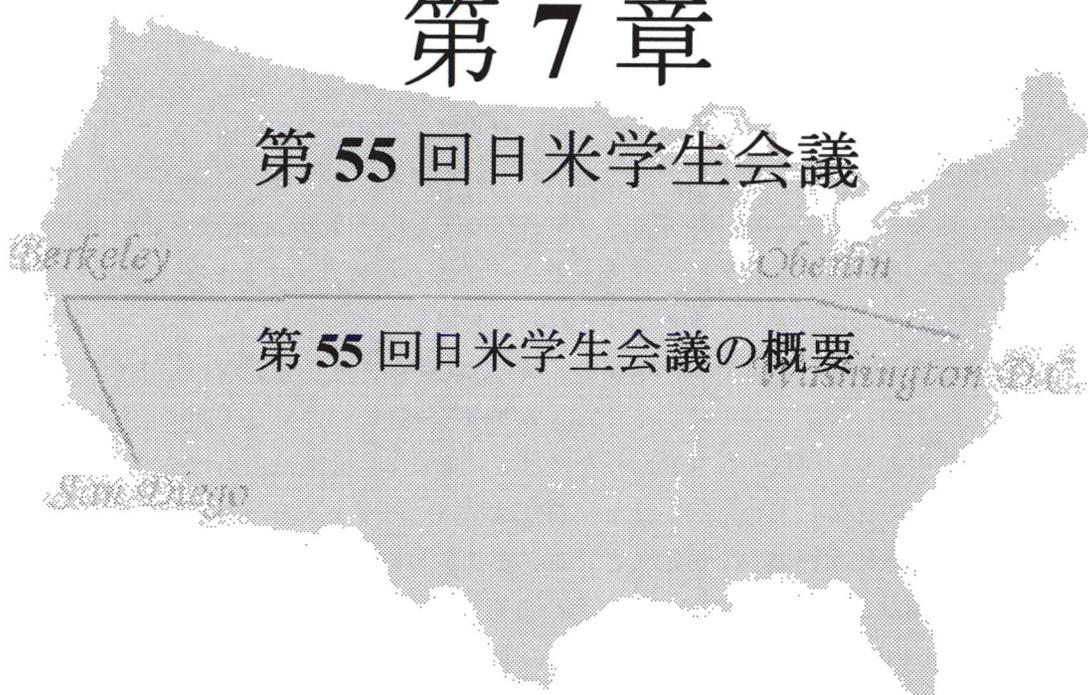
バークレー市役所屋上にて



第7章

第55回日米学生会議

第55回日米学生会議の概要



第 55 回日米学生会議の概要

● 開催期間

2003 年 7 月 26 日～2003 年 8 月 21 日

● テーマ

U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society

グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～

1934 年、日米学生会議は 2 つの理念を掲げて発足した。それは、日米学生の交流を通して、日本、米国の相互理解促進を草の根で支えること。そして、学生という自由な立場で、対等に交わす意見交換と議論の実を、社会に向けて発信していくこと、である。会議創設当初、日米関係は悪化の一途をたどっていた。両国間のつながりのほとんどは国の政治レベルで接点のみであり、市民がもっている情報はわずかであった。そのような背景の中、日米両国の学生は、日米間の相互理解のために、学生による交流を試みたのである。

それから半世紀を経た現在、日米関係は極めて友好的な関係にあり、強固なパートナーシップを結んでいる。民間から国家レベルに到るまで、あらゆる分野において日米間の交流が展開されているのだ。このような時代の移り変わりを受けて、日米学生会議は、もはや「日米間の相互理解」の追求のみに甘んじてはいけいではないだろうか。脈々と受け継がれてきた当会議の理念は、今日的状況の中で再定義される必要があるのではないだろうか。

今や、日本、米国はともに世界に対して多大なる影響力、そして責任を負う超大国である。日米両学生は、「日米関係」にとどまらず、「世界の中の日米」の視点を持って語り合うべきではないだろうか。そこで、第 55 回日米学生会議は、現代世界を語る上で無視し得ぬ、グローバルイゼーションという潮流の中で、日米が世界に対してどのような関係を構築していけるのか——「グローバル化社会と日米」——を考える。日米二国間の相互関係を世界中の国との関係性の中で再定義し、世界に対して日米両国の学生が何をなし得るのだろうか、という問いかけを試みるのだ。

では、「グローバル化社会と日米」は、どのような視点から取り組まれるべきであろうか。重要なのは、以前は情報発信の主体とはなり得なかった「市民」が、意見や情報を発信する権利、技術を獲得し、社会的、政治的なプレゼンスと実行力を高めるようになったということである。やがて社会の一員として社会を動かしていく学生にとって、このように市民一人一人が社会の問題解決に向かってどのように働きかけていくことができるのか——「市民参加の視点から考える」——を確認する作業は意義深いことである。無数の問題提起ばかりが先行している現代において、各人が自分の立場で地道に行動していくこと、自分の行動の可能性を信じていくこと、が求められている。そのための行動指針を具体的に提案していくこと、これこそ社会に新しい風を社会に吹き込む存在である学生に託された役割といえよう。

第55回日米学生会議のテーマ、「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～」は、歴代日米学生会議の、今という時代の、社会の、そして学生自身の要請を受けて今ここに宿った。2003年夏、その産声が生み出す原動力が、様々な方向に波及していくことを確信している。

● 開催地

◆ 東京

東京を定義するのは容易ではない。日本の政治、経済、交通の中心地。1200万人の人口を抱える巨大コミュニティ。また、400年の歴史を背景に発展した伝統芸能、文化を残す街並み。これら枚挙にいとまがないほど多くの顔がモザイク上に交錯する街、それが東京である。

当会議では国会議事堂や省庁が連立する東京の地で政治、経済の観点から日米関係に対する認識を深めていく。同時に、ゴミ問題など巨大コミュニティとしての東京が抱えるさまざまな問題について NGO、NPO への訪問を通じて学ぶことで、グローバルな問題意識とローカルな市民参加の二つの視点で具体的かつ精緻な議論を進めるための端緒を開いていく。

◆ 沖縄

第二次世界大戦中、日本で唯一の地上戦の場となった沖縄。多くの一般市民が犠牲となったその歴史は、米軍基地問題などの形で現在も沖縄に色濃く残っている。その一方で、沖縄はかつて琉球王国としてアジアの国々との交流を盛んに行い、平和の国として知られた歴史をも持つ。このように、独特な歴史的、文化的背景を持つ沖縄の地で、「本土と沖縄」また「米国と沖縄」という観点から日米における諸問題を議論することは、日米関係及びアジアにおける日米の役割を検討するにあたり、多角的な視点を提供する点で重要である。

◆ 福井

福井という開催地は、一見すると日米関係とあまり関係ないようにも思われる。しかしながら、コメ生産や原子力発電所の問題は、食料や電気という身近な事柄でありながら、コメ輸入自由化問題、放射性廃棄物処理問題など、日米関係や日米両国が率先して取り組むべき世界的問題に大いに関係している。普段、身近にありながらあまり意識することのない諸問題に取り組むことこそ「市民参加」という当会議のテーマに沿うものである。また、日本海に面する福井県は、海外との交流の窓口としての歴史を持ち、アジアの中の日本という視点を提供するものである。

◆ 京都

日本を代表すること「京都」は、1200年の歴史とその変遷の中に魅力を感じさせる。古くからの伝統行事や寺社仏閣などの建造物、人々の生活の中に日本古来の文化を色濃く残す一方で、観光や学生の街として栄え、多くの NGO や NPO、ベンチャー企業などを生み出すなど発展を続けている。このように古い文化と新しい文化が共存する京都では、祇園祭における町衆のように、市民のたゆまぬ努力によって新旧二つの文化の調和が保たれている。当会議では、これ

らの文化に触れるのみならず、それを維持する市民の努力の観点から文化の調和の問題を考えたい。

また、伝統的に学生のチャレンジを受け入れやすい気質である京都の地で、第 55 回日米学生会議フォーラムを開催し、成果を社会に発信する。

● 会議の過程

第 54 回日米学生会議の参加者から選ばれた実行委員が、日本側は主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側は JASC Inc.の協力のもとで本会議開催のための準備活動を行う。参加者決定後、実行委員と参加者は春合宿や講演会、勉強会への参加などを通して、本会議へむけての準備を進める。

本会議では主として英語を使用し、約 1 ヶ月にわたる共同生活を送る。会議中の主要な活動となる議論、意見交換の場は、分科会と全体討論、スペシャルトピックに分けられる。

分科会では 8 つの分野に分かれて討論を行い、議論やフィールドトリップを行う。全体討論では、米国同時多発テロ事件をはじめとした国際情勢の緊迫をふまえ、「安全保障問題」について、参加者全員が一堂に会して議論する機会を設ける。またスペシャルトピックでは、学問、文化、スポーツなど様々な分野で参加者が自発的に興味関心に沿った論題を設定し、自由な意見交換と相互理解の場を作っていく。

分科会や全体討論を通して導き出された結論は、フォーラムという一般公開の場で、提言として社会に発信される。また、各参加者は、導き出された結論を各自の行動や進路に反映させることにより、会議の成果の社会的還元を目指す。会議の内容を後日報告書にまとめ、第 55 回日米学生会議の総括とする。

◆ 分科会

経済活動と倫理	Business Ethics
天然資源	Natural Resources Issue
市民活動と地域社会活動	Activism and Community Action
民主的政治システム	Political Decision-making Process
現代社会とジェンダー	Gender Issues in Contemporary Society
移住労働者と外国人コミュニティ	Foreign and Immigrant Communities
健康と安全	Domestic Health Issues
科学教育	Science Education

◆ スペシャルトピック

スペシャルトピック（ST）では、参加者の新たな視点の獲得や発想を促すことを目的とし、東京、沖縄、京都の各サイトで1回ずつそれぞれ異なったトピックについて議論する。原則として参加は自由とし、議論するテーマや運営方法などは、参加者の関心に応じて決定する。現在検討されているトピックとしては、「歴史的記憶」「農業」「消費文化」「東アジア関係」「スポーツ」などがある。

◆ 全体討論

全体討論では、在日米軍問題や米国同時多発テロ事件を始めとした国際情勢の緊迫をふまえ、「安全保障問題」について、本会議全体を通して参加者全員で討論する。なお、具体的な論題は、本会議が行われる時期の世界情勢を考慮して設定する。

第 8 章

第 54 回日米学生会議に
ご協力いただいた方々

協力者

賛助者・団体・企業

第54回日米学生会議 協力者

● 第54回日米学生会議主催・後援

主催：財団法人 国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター、
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

● 第54回日米学生会議開催協力（敬称略・順不同）

◆ 会議全般

財団法人 国際教育振興会

理事長

常務理事・事務局長

総務広報部部长

総務広報部

国際教育振興会賛助会

事務局長

事務局

JASC Inc.

理事長

専務理事

外務省

文化交流部 人物交流課長

文化交流部 人物交流課 外務事務官

文化交流部 人物交流課 外務事務官

文部科学省

大臣官房 国際課長

大臣官房国際課 文部科学事務官

米国大使館

広報・文化交流部 文化プログラム室

財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

専務理事・事務局長

GHRD 推進室主任

山室勇臣

鈴木堯

稲田脩

玉城美穂子

伊部正信

山崎花里

Jack Shellenberger

Grechen Donaldson

高岡望

三宅妙子

西池万葉

木曾功

井上裕幸

松元美紀子

松崎浩

田代美智子

日本電気株式会社コーポレートコミュニケーション部

社会貢献部長

社会貢献部フィランソロピーエキスパート

社会貢献部担当

鈴木均

山辺清和

櫻内郁子

国際交流基金日米センター

所長

事業第二課 課長

事業第二課

和久本芳彦

佐藤宏美

平岩あかね

日米文化センター

日本代表

伊部正信

日米学生会議 OB 会

会長

山室勇臣

幹事長

中瀬正一

社団法人 日米協会

専務理事

久野明子

京王観光 株式会社

東京中央支店 課長補佐

大平浩一

株式会社 実業公報社

常務取締役

古屋繁

株式会社 千修

横井靖典

株式会社 インターナショナルサイエンティフィック

特別顧問

山元雅信

◆ 事前活動

— 全般 —

財団法人世界平和研究所理事長

大河原良雄

東京三菱銀行相談役

行天豊雄

三菱商事株式会社会長

榎原稔

日本テレビ放送網 株式会社

報道局政治部デスク

伊佐治健

報道局チーフプロデューサー「報道通」

小林景一

報道局

菅原薫

株式会社ガクシン

編集長

小渡ユウキ

担当者

渡瀬みずほ

立命館大学国際関係学部職員

河上正昌

青山学院大学専任講師

武田興欣

NPO 法人国際親善・交流サポートセンター事務局長

園鉄彦

早稲田大学政治経済学部助教授
 毎日新聞キャンパル編集部スタッフ
 琉球新報
 沖縄タイムス
 国立オリンピック記念青少年総合センター

飯野公一
 瀬長あすか

—講演会・勉強会講師—

東京大学教授
 日本ケイデンス・デザイン・システムズ社代表取締役
 防衛大学校校長
 防衛大学校教授
 防衛大学校学生
 東京ジャーミイ・トルコ文化センター
 放送大学助教授
 東京大学東洋文化研究所所長
 プレジデント社企画出版部編集担当部長
 衆議院議員
 日米会話学院講師
 同志社大学附属高校元教諭
 同志社大学法学部助教授
 明治大学商学部助教授

苅谷剛彦
 グレン・S・フクシマ
 西原正
 源田孝
 榎本圭祐
 セリム・ユジュール・ギュレチ
 高橋和夫
 田中明彦
 原孝
 福山哲郎
 ポール・アレンソン
 堀内保丸
 村田晃嗣
 山脇啓造

◆ 本会議活動

—ワシントンD.C.サイト—

United States Embassy of Japan

United States Department of State

United States Department of Justice

Hon. Ryozo Kato
 Mr. Hiroshi Kamiyo
 Mr. Takehiro Funakoshi
 Mr. Brian Mohler
 Ms. Terri Scadron
 Ms. Thankful Vanderstar
 Ms. Fujie Ota Ohata
 Mr. Ronald Ohata
 Mr. Thomas W. Hussey
 Ms. Laura L. Flippin
 Mr. William Yates
 Ms. Janis Sposato
 Ms. Barbara Velarde
 Mr. Paul Pierre

The United States Department of Commerce

United States Department of Energy

United States Environmental Protection Agency

Howard University

Guam's Delegate to the United States Congress

Vanderbilt University

UN Foundation

National Institutes of Health

The Japan Digest

The Urban Institute

Ministry of the Environment

The Brookings Institution

Szepko International

The Boeing Company

English Teacher, Translator, Consultant

2K9 Nightclub

Ear, Nose and Throat, Head and Neck Surgery

Kinko's

Washington Toho Koto Society

Hoya Crystal, Inc.

Ms. Rosie Lacot

Ms. Renee Harris

Ms. Nicole Melcher

Ms. Jennifer F. Sklarew

Ms. Cora Dickson

Mr. Peter Karpoff

Mr. Reid P. Harvey

Hon. Horace Dawson

Dr. Harold Scott

Dr. Michael Frazier

Dr. Charlie E. Mahone, Jr.

Mr. Alphonzo Horton

Hon. Robert A. Underwood

Dr. James Auer

Dr. Paula Newberg

Mr. Steve Tsang

Ms. Ayako Doi

Dr. Robert D. Reischauer

Ms. Fuyumi Naito

Mr. Edward J. Lincoln

Mr. Brian Szepkouski

Hon. Thomas R. Pickering

Ms. Jennifer L. Swanson

Mr. Derick and Linda Owens

Dr. Ernest M. Myers

Mr. Michael Schate

Ms. Reiko Matsumoto

Ms. Kyoko Okamoto

Mr. Clyde Owan

Mr. Pat Okura

Ms. Cherry Tsutsumida

Mr. Paul Y. Tani

—オーバリンサイト—

Oberlin College

Consul General of Japan, Detroit

Lakeland Eye Care, Inc.

Honda of America Manufacturing, Inc.

Oberlin Shansi

—パークレーサイト—

Mayor's Office

University of California, Berkeley

University of California

Stanford University

The Japan Society of Northern California

Mills College

Takara Sake USA Inc.

Rafu Shimpo

—サンディエゴサイト—

University of California, San Diego

University of California, Irvine

University of Southern California

California State University San Marcos

Ms. Nancy S. Dye

Ms. Diana Roose

Mr. Al Moran

Ms. Nanci K. Hardwick

Dr. Carol Lasser

Dr. Ann Sherif

Ms. Heidi H. Chambers

Ms. Yvonne Gay

Hon. Makoto Ito

Dr. Roy U. Ebihara

Ms. Caroline Ramsey

Mr. Carl W. Jacobson

Hon. Shirley Dean

Dr. Miryam Sas

Dr. Steve Vogel

Ms. Joan P. Kask

Dr. Peter Duus

Mr. Christopher J. Sigur

Ms. Carolyn Otis Catanzaro

Ms. Wah K. Cheng

Mr. Teisuke Kainuma

Ms. Nao Gunji

Mr. David Shiver

Dr. Ellis Krauss

Dr. Stefan Tanaka

Dr. Takeo Hoshi

Prof. Ulrike Schaede

Ms. Flannery A. Shaughnessy

Dr. Robert Uriu

Dr. Peter Nosco

Mr. Sean O'Connell

Dr. Peter Zwick

Japan Society of San Diego and Tijuana

Consulate General, Los Angeles

Asian Pacific Student Alliance

Kajima Construction Services, Inc.

Country of Santa Clara

Allarus Agency

Mazda North American Operations

Japanese Assistance Network

Mr. Patrick Graupp

Dr. Michael S. Inoue

Ms. Wakako Matsumoto

Dr. Randall Phillips

Hon. Masaharu Kohno

Ms. Zeela Diwa

Mr. Richard H. Davis

Mr. Johnny C. Gogo

Ms. Stephanie Kellems

Mr. John R. Westgarth

◆ 事後活動

日本放送協会 (NHK)

エグゼクティブ・プロデューサー

報道局国際部デスク

民主党安全保障アドバイザー

元防衛大学校教授

在日米国大使館首席公使

経済産業省

経済産業政策局調査課

外務省

北米第一課長

川良浩和

河野憲治

長島昭久

新治毅

リチャード・A・クリステンソン

角野然生

宮島昭夫

◆ その他全般

天野順一

小関道幸

竹本秀人

降旗健人

山田勝

岩崎洋一郎

木ノ上高章

田端利夫

松井泰三

吉原健吾

大高巽

信田智人

辻喜久子

宮本昭八

第54回日米学生会議 賛助者・団体・企業（敬称略）

財団法人 石橋財団	社団法人 京都日米協会
財団法人 鹿島平和研究所	社団法人 神戸日米協会
財団法人 国際教育財団	社団法人 日本歯科医師会
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	社団法人 日本自動車工業会
社団法人 信託協会	財団法人 平和中島財団
財団法人 日商岩井国際交流財団	財団法人 三菱銀行国際財団
社団法人 大阪日米協会	財団法人 吉田茂国際交流基金

味の素 株式会社	トヨタ自動車 株式会社
株式会社 イトーヨーカ堂	日本アイ・ピー・エム 株式会社
オムロン 株式会社	野村證券 株式会社
株式会社 オリエンタルランド	ぴあ 株式会社
キッコーマン 株式会社	株式会社 日立製作所
シダックス 株式会社	富士ゼロックス 株式会社
新日本製鐵 株式会社	富士通 株式会社
住友不動産 株式会社	本田技研工業 株式会社
積水ハウス 株式会社	松下電器産業 株式会社
セコム 株式会社	三井不動産 株式会社
ソニー 株式会社	三井物産 株式会社
大成建設 株式会社	三菱地所 株式会社
株式会社 竹中工務店	三菱重工業 株式会社
堤清二	三菱商事 株式会社
株式会社 電通	三菱信託銀行 株式会社
東京海上火災保険 株式会社	宮沢喜一
株式会社 東京三菱銀行	明治生命保険 相互会社
東京電力 株式会社	安田生命保険 相互会社

エクソンモービル有限会社	住友商事 株式会社
株式会社 大和銀行	武田薬品工業 株式会社
塩野義製薬 株式会社	日清食品 株式会社

安里周吾	中村義哉
飯久保廣嗣	山元雅信

編集後記

この度、第54回日米学生会議の成果をまとめた報告書がようやく完成いたしました。会議中に起きた数々の出来事や感情を、この一冊で伝えきることには限界があります。しかし、なるべく多くの参加者の生の声を載せ、日本側参加者全員が執筆に携われるよう、工夫いたしました。

第54回会議は日米学生会議の存在意義が根本から問われた会議でしたが、この報告書が参加者にとって会議の価値を再確認する機会になることを願うと同時に、報告書を手にとってくださった方には、時代を経ても連綿と受け継がれていく日米の学生の気概を感じとっていただくことができればと思います。

最後になりましたが、報告書発行にあたりご協力くださった関係者の方々、そして何よりも第54回日米学生会議開催にあたり、多大なご支援、ご指導をいただいた皆様に改めて心より御礼申し上げます。

報告書編集委員一同

2002年10月29日



第54回日米学生会議日本側実行委員会

第54回日米学生会議 日本側報告書

2002年10月29日発行

編集：第54回日米学生会議日本側実行委員会

秋山洋児・喜多洋輔・柴田綾沙美・千代明弘

出浦直子・中川由紀・古川敏明・松岡洋平

参加者報告書編集委員

小林悦子・佐藤陽一郎・筑紫正宏・西納由紀

編集責任者： 出浦直子

発行： (財) 国際教育振興会内 日米学生会議事務局

〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-21

Tel/Fax 03-3359-0563

印刷： (株) 実業公報社

Japan-America Student Conference
Since 1934

■主 催

 財団法人 国際教育振興会

■企画運営

第 54 回日米学生会議実行委員会
